スタッフ寄せ書き色紙

『キラキラ☆プリキュアアラモード』の完結を記念して、
製作スタッフチームのみなさんに描いていただいた特別色紙。
貴重なイラスト＆コメントをご覧あれ。

Illustration Gallery
イラストギャラリー

番宣ポスターや各雑誌に掲載された描きおろしイラストなど、『キラキラ☆プリキュアアラモード』の美麗イラストを一挙にご紹介。

★初出：キラキラ☆プリキュアアラモード オフィシャルコンプリートブック 表紙
原画／井野真理恵

★初出：『キラキラ☆プリキュアアラモード』
番宣ポスターイラスト　原画／井野真理恵

★初出：『キラキラ☆プリキュアアラモード』提供バックイラスト
原画／井野真理恵

★初出：『キラキラ☆プリキュアアラモード』提供バックイラスト
原画／井野真理恵

★初出：『キラキラ☆プリキュアアラモード』提供バックイラスト
原画／井野真理恵

★初出：『キラキラ☆プリキュアアラモード』提供バックイラスト
原画／井野真理恵

★初出：Febri Vol.43（一迅社刊） 原画／井野真理恵

★初出：アニメージュ
2017年9月号（徳間書店刊）
原画／井野真理恵

★初出：アニメディア2018年12月号
原画／鳥我井克美　仕上げ／竹澤聡　特効／牛山裕美

★初出：「キラキラ☆プリキュアアラモード」
カレンダー 2018年（発売元／東映アニメーション）

★初出：「キラキラ☆プリキュアアラモード」
カレンダー 2018年（発売元／東映アニメーション）

Contents

キラキラ☆プリキュアアラモード
KIRAKIRA☆PRECURE A LA MODE
オフィシャルコンプリートブック

キュアホイップ
宇佐美いちか
Cure Whip
Ichika Usami
Character Collection 1
キュアホイップ
（声／美山加恋）
宇佐美いちかが変身するプリキュア。1年ぶりに会う大好きな母への想いをこめた「ケーキ」が奪われそうになったとき、ケーキを守ろうとする強い想いが、いちかを変身させた。うさぎとショートケーキの特性を持つプリキュアであり、跳躍力や聴力にすぐれ、ホイップクリームのエネルギーを使って技を出す。イメージカラーはピンク。
変身
デコレーション！
ショートケーキ！
元気と笑顔を
レッツ・ラ・まぜまぜ！
ホイップクリームやいちごをふんだんに使用して、ショートケーキが完成していく流れと合わせて、キュアホイップに変身していく。
キュアホイップ
できあがり！

キャンディロッドからクリームエネルギーを導き、いちごを添えて放つ。ふんわりとしたエネルギー体で相手の動きや攻撃を受けとめる技だ。
キラキラキラルン！
ホイップ・デコレーション！
合体技①
4種類の合体技のうち、最初に登場する技。キュアカスタードの生地作りからキュアホイップのデコレーションまで、5人でケーキを作るようにエネルギーを成形し、相手を包む。
キャンディロッド！
キラキラキラルン、
フルチャージ！
スイーツ・ワンダフルアラモード！
キュアホイップ表情集
基本スタイル
大きな耳のカチューシャやブーツは、まさにうさぎ。スカートのふんわり感や髪飾りなどはショートケーキがモチーフになっている。
アラモードスタイル
スイーツキャッスルの力によってパワーアップしたスタイル。キュアホイップのコスチュームも、ゴージャスなロングドレスにチェンジ。靴もロングブーツになる。
クリスタルアニマル
プリキュアの分身のような存在で、アラモードスタイルに変身するためのアイテムとなる。キュアホイップが持つのはうさぎ型。本体を召喚したときの鳴き声は「ピョーン！」。
うさぎ

キラッとひらめいた！
宇佐美いちか
（声／美山加恋）
スイーツが大好きな中学２年生。作るのも大好きだけど、レシピを確認せずに作って失敗することもしばしば。思い立ったら即行動するタイプで、スイーツショップ「キラキラパティスリー（キラパティ）」の開店を発案したのもいちか。「キラッとひらめいた！」が口グセ。うれしいと、うさぎのようにピョンピョン跳ねる。好きなスイーツはショートケーキ。
いちか表情集
★キラキラルを奪われたいちか
夏服
ふんわりしたラインの服が好きらしく、私服はパフスリーブやフリルスカートが基本。
夏の制服
カラーが夏らしく白地になった。タイの色は選べるのか、人によって異なる。いちかはピンク。
制服
いちご坂中学校の女子の制服。ソックスや靴、バッグなどの小物はスクール仕様で共通。
★スクールバッグ
冬服
冬服はニットとミニスカートの組み合わせ。ブーツはデザインも色も、いちごモチーフ。
★ハロウィンVer.
ハロウィンのときは、かぼちゃ型の帽子を身につけていた。スカートもかぼちゃ型かな!?
キラパティの制服
いちかたちが開いたスイーツのお店の制服。胸元のリボンやブーツなどで各自の個性を出している。いちかはキラパティを引っ張るリーダー的な存在。
いちかのグッズ
★クッキーの材料
母のために焼くクッキーの材料。どっちの粉を使うか悩んで、結局どっちも購入した。
★キーホルダー
久しぶりに帰国した母が街で買ってくれた。大切な宝物だ。
★お母さん手作りのマドレーヌ
外国にいる母から送られてきた母手製のマドレーヌ。
★ふろしき包み
シエルに弟子入り志願するときに持ってきた。
★買い物バッグ
スイーツの材料の買い出しには、大きなバッグは欠かせない道具。

ファッション
いちかの大好き
～そして夢～
スイーツでみんなの
心をつなぎたい
母が作るスイーツはキラキラ輝いて大好きだった。「スイーツで世界のみんなをつなぐ」。それがいちかの夢、そしてエリシオとの約束。
“あれから1年”
決めた！ 世界に
飛び出してみる！
ノワールとの戦いから1年、キラパティやペコリンのことが心配で踏み出せなかったいちかも、ついに夢に向かって飛び立っていく。
“数年後”のいちか
世界のどこかの国で、いちかが作るスイーツは、子どもたちを笑顔にしていた。いちかは夢に向かってホイップ・ステップ・ジャンプ！
★商店街のマスコット“イチゴン”
★エプロン
★シエルとパンケーキ作り
★ゆかりの家でお茶会
★冬のコート
★白うさぎの仮装
★エリシオの世界の服
★お泊まり用のパジャマ
★水着&パーカー
いちかの家族
医師として海外を飛び回る母と、彼女を理解して、家で空手道場を開いて娘を見守る父。
★帰ってきたお母さん
★小学校卒業式
★宇佐美さとみ（声／山口由里子）
★宇佐美源一郎（声／津田健次郎）

キュアカスタード
Cure Custard
Himari Arisugawa
有栖川ひまり
Character Collection 2
知性と勇気なレッツ・ラ・まぜまぜ!
キュアカスタード
(声／福原遥)
有栖川ひまりが変身するプリキュア。いちかがひまりをイメージしてデコレーションした「りすプリン」を守ろうとしてキュアホイップがピンチになったとき、"友達をなくしたくない"という強い想いが、ひまりを変身させた。りすとプリンの特性を持つプリキュアで、俊敏で小回りが利く。カスタードクリームのエネルギーを使って技を出すことができる。イメージカラーはイエロー。
変身
デコレーション!
プリン!
カスタード色のエネルギーを身にまといながら、カラメルやクリームをまぜまぜ。大きなプリンを作りながら変身していく。
キュアカスタードできあがり!

キュアカスタードが放つ技は、クリームとさくらんぼを使用する。ふたつの巨大なさくらんぼを出したあと、クリームエネルギー弾を放出する。
キラキラキラルン!
カスタード・イリュージョン!
キュアカスタード表情集
基本スタイル
りすの大きな尾が特徴的なデザイン。小柄なキュアカスタードが着ると、まさにりす。プリンを彩るさくらんぼがチョーカーになる。
合体技②
ふたつ目の合体技はキュアパルフェも加えた6人技。キラキラルクリーマーにクリスタルアニマルを差し込み、本体を召喚。メリーゴーランドのように相手の周囲を回って浄化する。
キラキラルクリーマー!
キラッと輝け! クリスタルアニマル!
プリキュア・アニマルゴーランド!
アラモードスタイル
パワーアップバージョン。ケープを羽織り、手袋は短くなった。髪はおろし、ウェーブのヘアスタイルがかわいい。
クリスタルアニマル
りすの特徴である尾は大きく、本体の動物を召喚すると、尾の大きさはさらに際立つ。このときの鳴き声は「クルル」。
りす

有栖川ひまり
(声／福原遥)
勉強熱心な中学２年生。子どものころからスイーツ作りを研究し、熱く語りすぎて周囲に引かれたことがある。その苦い経験がトラウマとなり、人と接することに臆病になっていたが、いちかの明るさに刺激され、少しずつ交流を広げていく。「スイーツは科学です！」がログセ。レシピを守る大切さを説く理論派。好きなスイーツはプリン。
スイーツは科学です！
ひまり表情集
キラパティの制服
エプロンの胸元のリボン、袖やブーツの色もイエローだ。キラパティでのひまりは知識でいちかのスイーツ作りを支えている。
★ハロウィンVer.
背中には羽根を付け、頭のうえにはリングを付けて、ひまりは天使になった。
制服
中学校の制服。いちかよりスカートが長めだ。タイの色はイメージカラーのイエロー。
冬服
ブラウスにジャンパースカートを重ねた冬服。足元は温かそうなロングブーツを着用。
夏服
ゆったりめのワンピースが好きであるらしいひまり。夏服は涼しげなレモンイエロー。
夏の制服
半袖になったブラウスは丈も少し短くなった。襟元も白地ベースの夏仕様になっている。
ひまりのグッズ
★スイーツの科学
科学者・立花ゆうが、料理を科学的に分析して、それをまとめた名著。
★バッグ
愛読書「スイーツの科学」やノートを、いつも持ち歩いている。
★バケツプリン
数量限定の「ドデカプリン」を買えず、いちかと再現したプリン。
★スイーツノート
レシピや知識をまとめた宝物。43話でエリシオに焼かれてしまう。

ファッション
★エプロン
★レポーター服
★ゆかりの家でお茶会
★水着&パーカー
★立花先生の実験助手
◀インカム
★ハンプティダンプティの仮装
★冬のコート
▼手袋
★お泊まり用のパジャマ
回想のひまり
スイーツについて熱く語り、友達を引かせてしまった、小学校低学年のころのひまり。
ひまりの大好き～そして夢～
スイーツの科学を学びたい
夢は昔から決まっていた。「スイーツのことをもっと知りたい！」。昔は、その夢を聞いてくれる友達がいなかった。でも、今は違う！
"あれから1年"
食品科学で有名な高校へ進学
スイーツを科学として理論的に勉強したいひまりは、経験を積むパティスリーでの修業ではなく、まず専門コースのある高校に進学。
"数年後"のひまり
高校卒業後の進路は不明だったが、大人になったひまりは立花先生の研究所で研究に励んでいるようだ。失敗をしながらも奮闘中。

キュアジェラート
Cure Gelato
Aoi Tategami
立神あおい
Character Collection 3
キュアジェラート
(声／村中知)
立神あおいが変身するプリキュア。バンド活動の新曲の作詞に行きづまったとき、初心を思い出すきっかけをくれたいちか&ひまりが作った「らいおんアイス」を守りたい、という強い想いが、あおいを変身させた。ライオンとアイスの特性を持ち、情熱的で勇敢なプリキュア。アイスのエネルギーを技に変える。イメージカラーはブルー。
キュアラモード・デコレーション!
アイス!
自由と情熱をレッツ・ラ・まぜまぜ!
力強く咆哮し、片脚だけソックスをクイッと上げる。ラストは、ギターを持ってジャンプ。色味はクールだが、アクションは情熱的!
キュアジェラートできあがり!

キラキラキラルン！
ジェラート・シェイク！
アイスのエネルギーで巨大な氷のかたまりを作り出し、パンチでシェイクして、それをぶつけるパワフルな技。相手を凍らせることもできる。
合体技③
スイーツキャッスル！
レッツ・ラ・おきがえ！
プリキュア・ファンタスティックアニマーレ！
「プリキュア・アニマルゴーランド」をパワーアップさせた技。アラモードスタイルの6人がそろって、相手を浄化する。
クリスタルアニマル
らいおん
キュアジェラートをアラモードスタイルにパワーアップさせる存在。召喚されたあとの大型アニマルの鳴き声は「ガオー！」。
キュアジェラート表情集
基本スタイル
上着は革ジャン風で、丸いシルエットのスカートはジェラートのイメージ。ソックスを右だけ上げた、クールでロックなスタイルだ。
アラモードスタイル
たてがみのような髪は、さらにボリュームアップ。ドレスは、後ろに伸びた引き裾が特徴的。ブーツは左右で長さが異なっている。

立神あおい
（声／村中知）
自由奔放で情熱的な中学２年生。２年前に偶然、演奏を聴いたロックバンドのボーカル・岬あやねの歌声に憧れ、路上で歌い始める。声をかけてくれた園部けいらと共に自身もバンドを結成し、ボーカル兼ギター担当として活動。ログセは「燃えてきたー！」。大財閥の跡取りだが、大好きな歌を歌い続けたいと願う。好きなスイーツはアイス。
燃えてきたーー！
あおい表情集
キラパティの制服
リボンや袖口、ブーツの色をブルーで統一した、あおい仕様。豊かな髪は帽子で包む。キラパティでは、力仕事で店を支えている。
KIRAKIRA PATISSERIE
★ハロウィンVer.
ハロウィンは、天使のひまりと反対に、悪魔デザインをセレクトした。
制服
中学校の制服。タイはつけていないようだ。ブルーのmyカーディガンを羽織り、バッグも学校指定を使わない。
★スクールバッグ
冬服
冬はソックスも長め。鮮やかな青色のカジュアルなパーカーに、濃紺のミニスカートを合わせる。
夏服
私服をたくさん持っていたあおい。夏はブルーを基調にしたTシャツとショートパンツ。
夏の制服
夏でもベストを着用。タイをつけずカジュアルな着こなし。
★小学生のあおい
★幼少期の水嶌とあおい
★水嶌みつよし（声／佐藤拓也）
あおいのグッズ
★歌詞ノート
新曲の歌詞を書き留めるノート。言葉選びに悩むような場面もあった。
★ギター
以前はバイオリンを習っていたが、今はバンドでギターも担当。
★マイク
ライブで使うマイク。ロックバンドにスタンドマイクは必需品だ。

あおいの大好き〜そして夢〜

自分の思うままに歌い続けたい

岬の歌声に衝撃を受け、あおいは自分も歌いたいと思った。立神家を継ぐという安泰な道から外れても実現したい夢を見つけたのだ。

“あれから1年”

バンド人気上昇中

「ワイルドアジュール」のリーダー・園部は抜けたが、あおいとほかのメンバーたちは活動中だ。バンドの名も少しずつ有名になった。

“数年後”のあおい

あおいは超かっこいいロックなお姉さんに成長。ステージの様子から、大規模なライブを成功させるメジャーバンドになったのか!?

キュアマカロン
Cure Macaron
Yukari kotozume
琴爪ゆかり
Character Collection 4
キュアマカロン表情集
キュアマカロン
(声／藤田咲)
琴爪ゆかりが変身するプリキュア。気まぐれだがさびしがりやのゆかりは、自分のために「ねこマカロン」をデコレーションしてくれたり、プリキュアに変身して守ってくれたりもしたいちかの姿を見て、心動かされる。その胸のトキメキが、ゆかりを変身させた。ねことマカロンの特性を持つプリキュアで、相手を翻弄する柔軟性のある動きが特徴。イメージカラーは紫。
アラモードスタイル
大人っぽく上品な印象を与える、大きく開いた肩回りが特徴的。ボリュームのあるロングドレスは、ゴージャス感がある。
基本スタイル
ミニ丈のバルーンスカートや、ピンヒールのニーハイブーツにアンクレットなど大人びていて優雅。
キラキラキラルン！
マカロン・ジュリエンヌ！
にゃ～お☆
クリームエネルギーをマカロン型に成形して、ヨーヨーのようにして相手に飛ばす。「にゃ～お☆」と声を出してねこのマネをすると、ヨーヨーのなかから爪が出てくる。

キャンディロッドやねこマカロンにキスしてみたり、ひざをついて"カメラ目線"でねこのマネをしてみたりといった、相手を挑発するかのようなしぐさが満載だ。

小瓶型から召喚される本体のアニマル・ねこは、キュアマカロンと対比してもかなり巨大だ。鳴き声は「ニャーオ」。

面白いわ……フフフ……。
ゆかり表情集
琴爪ゆかり
（声／藤田咲）
気高く美しく、そして気まぐれな高校２年生。天才肌で、実際になんでもそつなくこなすため満足感を得ることができず、ときめくことがなかった。いちかたちと出会い、刺激を受け、自分も大好きになれる夢を見つけていこうと踏み出していく。動物や妖精、いちかを撫でると、みんながなつくという特技を持つ。好きなスイーツはマカロン。
キラパティの制服
袖口とリボンが紫。キラパティ内では、一歩引いた視点で店をサポートする。
★ハロウィンVer.
ねこが好きなゆかりらしく、ねこ耳と肉球グローブをつけてケットシー（妖精ねこ）に変身した。
KIRAKIRA PATISSERIE
制服
いちご野高校の制服。リボンは紫のものを使用。制服姿のときでもピアスはつけている。
★高校スクールバッグ
冬服
ハイネックのニットワンピースとショートブーツを合わせた、上品なコーディネート。
夏服
Aラインのワンピースのウエストを絞って着こなす。日傘をさしてエレガントな雰囲気。
夏の制服
シンプルな白色のブラウスが清々しい。スカートも、夏仕様で軽やかな色合いになっている。
★小さいころのゆかり
★琴爪しの
（声／天野由梨）
ゆかりの家族
ゆかりの祖母は茶道家。子どものころから、ゆかりに茶道を教えて、ゆかりの自主性に任せてきた。

ファッション
★おでかけ用の帽子
★水着&パーカー
★体操着
★自宅でお茶会
★普段着
★ハートの女王の仮装
★お泊まり用のパジャマ
★冬のコート
▼手袋
★ねこゆかり
ゆかりの大好き
～そして夢～
自分のトキメキを
もっと輝かせたい
ゆかりは物事に熱中してこなかった。なんでもできるので、ときめかないのだ。いちかと出会い、ゆかりは初めて心の底から笑う。
"あれから1年"
留学先でも
マイペース
トキメキは待っていても来ない、それに気づいたゆかりは日本を離れ、コンフェイト公国に留学。写真は楽しそうに見えなくもない。
"数年後"のゆかり
どこかの外国の海辺に立っていたゆかりは、髪をバッサリと切っていた。何をやっているのか、どこにいるのかは一切わからない。トキメキを輝かせることができたのだろうか。
ゆかりのグッズ
★ナタ王子のスイーツ
ゆかりを賭けて、あきらと勝負したナタ王子が、パティシエに作らせた巨大なスイーツ。
★抹茶マカロン
祖母に頼まれて作った抹茶と洋菓子のコラボスイーツ。祖母の友人からも大好評だった。
★ゆかりがゲームでゲットした景品
初めてのクレーンゲームで、ゆかりは簡単に景品を取ってしまう。

強さと愛な
レッツ・ラ・まぜまぜ！
変身
キュアラモード・デコレーション！
チョコレート！
キュアショコラできあがり！
チョコレートでコーティングしたハットのツバをなぞるしぐさが印象的。ラストは大階段で凛々しくポージング。洗練された魅力を放つ変身シーンだ。
キュアショコラ
（声／森なな子）
剣城あきらが変身するプリキュア。妹のみくのためにいちかが作ってくれた「いぬチョコレート」が奪われそうになったとき、大切なチョコレートを守りたいという強い想いが、あきらを変身させた。いぬとチョコレートの特性を持つプリキュアで、すぐれた嗅覚を持ち、クリームエネルギーを板チョコ状にした防御が得意。イメージカラーは赤。

Character Collection 5
キュアショコラ
Cure Chocolat
Akira Kenjo
剣城あきら
キュアショコラ表情集
基本スタイル
基本はショートパンツ。ストライプのブラウスや袖のカフス、マントからは"王子さま"然とした気品のあるかっこよさが漂う。
アラモードスタイル
短いスカート状のパニエを着用。ロングドレスは後ろのほうだけボリュームアップ。足もとは黄色の差し色が入ったニーハイブーツ。
キャンディロッドからクリームエネルギーをチョコレート状にして射出。ドリルのように回転しながら相手を包み込んでいく。
キラキラキラルン!
ショコラ・アロマーゼ!
いぬ
クリスタルアニマル
キュアショコラの分身でもあるアニマル。右のミニサイズでも、やさしい表情が見える。本体を召喚したときの鳴き声は「ワン」。
27

絶対に守る！
剣城あきら
(声／森なな子)
やさしく頼りがいのある高校２年生。ボーイッシュな外見から男性に間違われることも多い。病弱な妹・みくのことを大切に想い、将来はみくと同じ病気の人たちのために働きたいと思っている。高校生同士ということで、ゆかりと行動することが多いが、気まぐれなゆかりに振り回されることもしばしば。好きなスイーツはチョコレート。
あきら表情集
キラパティの制服
接客を担当するあきらは、動きやすさを重視してかパンツスタイル。エプロンもフリルが少なく、丈も長めだ。
KIRAKIRA PATISSERIE
長いマントはドラキュラのイメージなのか。タイや帽子にもかぼちゃの飾りを付けている。
★ハロウィンVer.
制服
いちご野高校の制服。私服はパンツスタイルが多いが、制服のときはスカート姿。リボンは赤。
冬服
シャツにセーターを重ね着する。パンツの色が濃くなり、ブーツで足もとも温かな印象になった。
夏服
ライトブルーのパンツと白いTシャツ、ベストがさわやか。スニーカーも夏仕様。
夏の制服
上着を脱ぐと、スカートの感じがよくわかる。長さは、ゆかりよりもやや短く見える。
あきらのグッズ
CACAO CACAO
★「カカオカカオ」のチョコ
いちかの推薦品。いちご坂商店街のチョコ専門店で購入。
★みくのチョコケース
あきらがみくのためにに作ったチョコとケース。写真シール付き。

あきらの大好き ～そして夢～

大切な人の笑顔を見たい

みくのことが大好きなあきら。子どものころから見ているみくに、ずっと笑顔でいてほしい。その願いがあきらの夢につながった。

"あれから1年"

本命の医大に合格

みくを心配するあきらの想いは、やがては"同じ病気の人たちも笑顔にしたい、研究者になりたい"という具体的な目的になっていく。

"数年後"のあきら

おそらく研修医として実習中のあきらの姿があった。一人前になるにはまだまだ道のりは長そうだが、確実に前へと向かっている。

ファッション

★水着&パーカー

★ゆかりの家でお茶会

★エリシオの世界の服

★お泊まり用のパジャマ

★体操着

★冬のコート

★ハートの王子の仮装

あきらの家族

病弱な妹を看病するため、両親は病院の近くに引っ越し、あきらは祖母の家で暮らしている。

★剣城みく（声／本渡楓）

あきらの妹。長期入院中だが病名は不明。体調がいいと外出許可がおりることもある。

★防寒具

★入院中のパジャマ

★みくのキラパティの制服

外出許可がおりた際に、キラパティの1日看板娘になった。

★剣城トミ（声／宮沢きよこ）

あきら&みくの祖母。いちかの家の隣に住んでいる。

★幼少期のあきらとみく

▶あきら11～12歳

▶みく4歳

あきらは病気がちな妹を、小さいときからずっと見守ってきた。

キュアパルフェ
キラ星シエル
Cure Parfait
Ciel Kirahoshi
Character Collection 6
基本スタイル
豊富な色彩とアシンメントリー（左右非対称）が特徴的なドレス。ペガサスのひづめを彷彿とさせる厚底ブーツが絶妙なアクセント。
キュアパルフェ
（声／水瀬いのり）
キラ星シエルが変身したプリキュア。元はプリキュアに憧れる妖精キラリン。"スイーツは大切な人を想って作る"といういちかの考えに感銘を受けて、闇に取り込まれた弟・ピカリオを想って「ペガサスパフェ」を完成させることでプリキュアとなった。ペガサスとパフェの特性を持ち、空中を飛び回ることが可能。イメージカラーは虹色。
パルフェ・エトワール！
キラキラキラリン！
ジュリオが持っていた闇のロッドが変化したキュアパルフェのアイテム「レインボーリボン」で、エネルギーをリング状にして繰り出し、相手を拘束。
アラモードスタイル
パワーアップバージョンのロングドレスには、さまざまなフルーツをイメージした意匠がてんこ盛りである。
変身
キュアラモード・デコレーション！
パフェ！
キュアパルフェできあがり！
さまざまなフルーツが登場するカラフルな変身。ペガサスの翼で飛びながら、華やかにデコレーションしていく。

夢と希望なレッツ・ラ・まぜまぜ！
キュアパルフェ表情集
合体技④
キュアペコリンも加わり、7人で行う最終合体技。超巨大ケーキを相手にぶつけて、クリスタルアニマルで包む。
プリキュア・ファンタスティックアニマーレ！
スペシャル！
クリスタルアニマル
ペガサス
夢を追い、世界に羽ばたくキュアパルフェのクリスタルアニマルは、空想上の生き物であるペガサスだ。「パタタ」と鳴く。
浄化技
アン・ドゥ・トレビアン！
キラクル・レインボー！
レインボーリボンで繰り出すクリームエネルギーでパフェの器を作り、相手を閉じ込めたらフルーツでデコレーションをして、浄化していく。

シエル表情集
★闇に染まったシエル
キラ星シエル
(声／水瀬いのり)
フランス・パリからやってきた天才パティシエ。いちご山に住む妖精キラリンがプリキュアに憧れ、スイーツの修業をするため人間の姿になっていた。いちご坂で開いたお店は、当初は期間限定の予定だったが、いちかたちと出会い、キラパティも手伝うようになる。「パルフェ！(完璧)」がログセで、つねに高みを目指す。好きなスイーツはパフェ。
パルフェ！
キラパティの制服
★ハロウィンVer.
自分のお店を持ちながら、キラパティにも顔を出していたシエル。いちかたちにスイーツ作りのテクニックを伝授した。
夏の制服
シエルはいちかたちの中学校に転入。タイはシエルのもうひとつのイメージカラー・緑。
冬服
冬のコートの下は、白いブラウスと緑色のふんわり広がったスカート。ブーツも緑色。
シエル・ドゥ・ルーヴ
シエルのお店は行列ができる人気店。パリで修業しただけあって芸術性の高いスイーツを提供。
★制服
★ハロウィンVer.
★スタッフ
★シエルが作るスイーツ
▲アシェットデセール
▶パンケーキ
▲新作スイーツ

シエルの大好き
～そして夢～
パティシエの高みを目指したい
スイーツを熱心に勉強し、世界的パティシエに認められるまでになったシエル。その熱心さが弟を傷つけたことに気づかなかった。
"あれから1年"
スイーツコンテストで連続優勝
全日本
ツコン
弟のリオを闇から取り戻したシエルは、ふたりでスイーツを作ることが楽しくて仕方がない様子。各種コンテストにおいて連勝中だ。
"数年後"のシエルとリオ
大人になったふたり。"みんなに笑顔を伝えたい"との想いでスイーツを究めるシエルの華麗なパフォーマンスは、留まるところを知らない！
★水着&パーカー
★エプロン
ファッション
★サングラス
★冬のコート
★グリフォンの仮装
シエルのグッズ
★手帳
研究熱心なシエルがレシピのアイデアなどをメモする手帳。
★バッグ
いちご山の養蜂場に行ったときに使用。ハチミツを入れるビンが見える。
★お泊まり用のパジャマ
★リオ（ピカリオの人の姿）
姉との才能の差に絶望して、闇に取り込まれた。闇から解放されたあと、シエルのお店を手伝う。
シエルの家族
一緒にスイーツの修業に行ったピカリオは双子の弟。耳と髪形がアシンメトリー。
★キラリン
★ピカリオ

ペコリン
Pekorin
キュアペコリン
Cure Pekorin
Character Collection 7
大好きペコ!
ペコリン
(声/かないみか)
スイーツが大好きでプリキュアに憧れる、いちご山の妖精。語尾に「ペコ」をつけて話す。いちご山でキラキラルの爆発があったとき、スイーツ工房を出現させるバッグを守って長老と逃げてきた。当初は甘えん坊だったが、いちかと出会い、プリキュアの活躍に触れて成長。人間の姿になれる存在となり、ついにはプリキュアにもなった。好きなスイーツはドーナツ。
★ハロウィンVer.
人間Ver.
キュアペコリン
★キラパティバッグ
キラキラキラルン、キラキラル!
キュアドーナツフルー!
"数年後"のペコリン
変身
キュアアラモード・デコレーション!
ドーナツ!
ペコペコとキラキラをレッツ・ラ・まぜまぜ!
キュアペコリンできあがり!
アクションは少ないが、変身の"名乗り"はキュアホイップたちと同じである。特性を表すスイーツはドーナツ。
アイテム
★キラキラルクリーマー
★レインボーリボン
★キャンディロッド
★変身アニマルスイーツ
▲ねこ
▲うさぎ
▲いぬ
▲りす
▲ペガサス
▲らいおん
▲ペコリンドーナツ
★スイーツパクト
スイーツパクトに変身アニマルスイーツをセットし、キラキラルを混ぜ合わせて変身する。ペコリンの変身も、基本の動作は同じだ。
★スイーツキャッスル
いちご坂に住む人々のキラキラルが結集し、プリキュアをパワーアップさせたのがスイーツキャッスル。

Character Collection 8 妖精たち

ピカリオ

(声／皆川純子)

シエルこと妖精キラリンの弟。真面目な性格で、姉とパリへスイーツの修業に行くが、行方がわからなくなっていた。闇に取り込まれていたが、シエルやいちかに救われた。姉を守るためにケガをして長く眠っていたが、復活後は人間の姿になって再びスイーツ作りに励んでいる。

リオ(ピカリオの人の姿)

妖精ピカリオが人間になった姿。黒樹リオに扮したときは、黒色のショートヘア(P.38参照)だったが、本来は水色の長髪。

キラリン

(声／水瀬いのり)

ピカリオの双子の姉。人間の姿ではシエルを名乗る天才パティシエ。スイーツ作りの実力は抜群だが、それゆえにピカリオを追いつめてしまう。

長老

(声／水島裕)

キラキラルの爆発に巻き込まれ、魂だけとなってペコリンと共に逃れてきた。ふだんはキラパティバッグのなかに住んでいる。物知りな賢者だが、ひょうきん。語尾に「ジャバ」をつける。長く行方不明だった身体は最終話にて闇のキラキラルで巨大化。とんだ巨悪になってしまった。

★人の姿

いちご坂の人たちを驚かせないように、人前に出るときは人間の姿に変身することも多かった。

★巨大化した長老の体

地中にめり込んでいた身体は、魂を持たないまま闇のパワーで巨大化。

★ペコリンの仲間の妖精たち

一緒にスイーツを作っていた仲間。キラキラルの爆発で散り散りになっていた。

★妖精の長老たち

妖精はいちご山以外にもいろんなところにいる。「いちご山妖精大会議」には、各山の長老もやってきた。

いちご坂の人たち

Character Collection 9

★ゆかりファンクラブのハンカチ

★ゆかりファンクラブ

★あきらファンクラブ

★男子制服

★男子 夏の制服

いちご野高校

いちご坂の下のほう「下苺坂」には、ゆかり＆あきらが通う高校「いちご野高校」がある。ふたりには、それぞれファンクラブがあるが、主に女性で構成されている。

いちご坂中学校

いちかたちが住む街には上下３つに分けた呼び方があり、46話に登場したバス停などに、その名が見える。いちご山に近い「上苺坂」に、いちかたちが通う中学校がある。男子生徒の制服の着方を見ると、自由な校風なのか。

★数学教師

★国語教師

★校長

★男子 夏の制服

★体操着

いちかのクラスメイト

★和泉わたる（声／虎島貴明）

★中野ひろき（声／金子誠）

★神楽坂りさ（声／渋谷彩乃）

★光岡じゅんこ（声／引坂理絵）

古のプリキュア／ルミエル

いちご山にスイーツを作る妖精が住むように、いちご坂はスイーツと関係が深い。現在では古のプリキュアと呼ばれるルミエルが、100年前に活躍していたのもここ。ルミエルとノワールの関係はそこで始まった。

ルミエル

（声／安野希世乃）

いちご坂で、闇に染まった人々のためにスイーツを作っていた、やさしく心の広い女性。笑顔を失った男（ノワール）のためにスイーツを作る。

転生したルミエル

49話にて登場した少女。少年と言い争いをしているところにやってきた数年後のいちかからスイーツをもらう。

古のプリキュア

ルミエルが変身したプリキュア。いちご坂を闇で覆ったノワールと戦う。その魂は、100年後の戦いにも力を貸す。

中いちご坂町内会

★町内会副会長（声／蓮岳大）

★町内会長（声／堀越富三郎）

街の住人

いちか＆あきらの家は「中いちご坂町内会」に属している。いちご坂の中央部「苺坂」と呼ばれるエリアには商店街があり、スイーツ店などが並んでいる。

いちご坂商店街

★ケーキ屋のお兄さん（声／虎島貴明）

★青果店主（声／西村太佑）

★青果店夫人（声／尾畑美依奈）

★スイーツショップ「シュガー」店主（声／天田益男）

★「シュガー」の娘・日向まりこ（声／藤井ゆきよ）

★店主たち

★アクセサリー店店主（声／中村太亮）

Character Collection 10

ゲストキャラクター

プリキュアの活躍に欠かせないゲストキャラクターもご紹介。

キラキラルを奪う存在
ノワールとしもべたち
Character Collection 11
黒樹リオ
いちかが作るスイーツにはキラキラルが特別多いことに興味を持ったジュリオは、人間に変身し、転校生として、いちかに近づいた。
★着物
いちかたちと、ゆかりの家のお茶会へ行ったリオ。茶道の作法にも、そつなく対応していた。
ジュリオ
（声／皆川純子）
ノワールのしもべ。スイーツを嫌い、妖精のガミー集団に集めさせたキラキラルを闇に染めていた。人間の少年・黒樹リオとして、いちかに接近したこともある。その正体は妖精ピカリオ。姉のキラリンとの才能の差に焦る心のスキをノワールにつけ込まれ、闇に取り込まれた。
ジュリオのロッド
キラキラルを集めて、武器に変化させるアイテム。キャンディロッドと同じように闇のキラキラルを練って使う。
★パワーアップVer.
自身の闇のエネルギーを放出するときに使った。ジュリオの最後の武器。
ジュリオの武器
ロッドに溜めたキラキラルを右記の掛け声で闇に染めて、大小さまざまな武器を作り出した。
★鋤（プードルチョコケーキ×鋤）
★槍（イルカゼリー×槍）
★剣（ヒツジカップケーキ×剣）
★キャンディロッド（マドレーヌ×キャンディロッド）
★ヨーヨー状の武器（シロイルカだいふく×ヨーヨー状の武器）
★弓（フラミンゴチュロス×弓）
キラキラルよ、闇に染まれ！
ノワール・デコレーション！

ビブリー
(声／千葉千恵巳)
ノワールのしもべ。ワガママな性格で、ジュリオの失敗を「ダサッ！」と切り捨てるなど、ほかのしもべへの仲間意識はない。元は、いちご坂でひとりで暮らしていた人間の少女。その孤独につけ込んで近づいてきたノワールの言葉を、自分へのやさしさだと思い込み、ノワールに対して絶対的な忠誠を捧げていた。
ビブリー表情集
★私服
プリキュアの説得でノワールの呪縛から逃れたビブリーは、シエルの店で働くことになった。
★幼少期のビブリー
いちご坂が闇に覆われていた昔には、この街の住人だったビブリー。魔獣ディアブルに追われて絶望していたところを、ノワールによって闇に取り込まれた。
イル
ノワールからもらった人形。口から吸い込んだキラキラルを闇に染めて、そのエネルギーで巨大イルに変貌した。
グレイブ
(声／江川央生)
ノワールのしもべ。ノワールの命令より自分のルールにこだわる傲慢な男で、元は力をかさにのし上がってきた自称「100%の悪人」。しかし横暴が過ぎて孤立していた。キラキラルの回収も荒っぽく、車のクラクションを鳴らして現れては、ごっそり集めようとする。
グレイブ表情集
★巨獣グレイブ
ティアブルカスタムを取り込み、巨獣化した最終形態。グレイブの意思はなくなり暴走するのみ。
★獣人グレイブ
パワーアップしたあと、さらにその闇のエネルギーを体内に取り込んで、獣のような風貌に変化。
★パワーアップVer.
闇のエネルギーを全身にまとっており、その黒い炎を相手へと伸ばして攻撃することができる。
★ディアブルカスタム
グレイブの車に魔獣ディアブルを合体させた改造車。正面にディアブルの顔がついた。
★グレイブの車
巨大なスピーカーを搭載した、シートも豪華なオープンカー。強さの象徴。
★ネンド人形の変装
グレイブの手下たちは「ネン！」としか言わないが、ある程度は意思を持つので変装もできる。
★グレイブの手下
ネンド細工の人形に闇のキラキラルを与えて動かし、"手下"として使っていた。

エリシオ

（声／平川大輔）

ノワールのしもべ。ノワールの意思を仲間に伝えるほか、自らも行動に出た。闇の力を秘めたカードが武器。カードに仲間の力を封じて、メタモルフォーズをしたり、怪物を生み出したりするのに使っていた。その正体は、ノワールが人間だったころの身体に、エリシオという作り物の人格を与えた存在だった。

新エリシオ

エリシオの身体にノワールの意思が戻ったときは黒髪（左ページ参照）になった。だが、体内に残っていたエリシオの人格がノワールから再び肉体を奪い返した状態では髪の色も変化した。

ノワール・メタモルフォーズ

闇の力や仲間たちの力を封じ込めたカードに「ノワール・メタモルフォーズ！」と唱えると、さまざまな姿に変身することが可能。

最終形態

闇のカードに、古のプリキュアであるルミエルと、ノワールの力を吸収して変貌したエリシオの最終形態。

★エリシオの乗り物

最終決戦で巨大化したエリシオが移動に使った乗り物。逆さまにひっくり返ったカップケーキのような形。

ノワールとしもべたち
ディアブル
(声／竹内良太)
ノワールに仕える魔獣。ノワールの闇の力でできているエネルギー体で、ノワールの分身でもある存在。かつてルミエルが戦ったときやビブリーが恐怖におののいたときも、いちご坂を闇に染めようとする姿が見られた。ルミエルの力によって、ノワールと共に長く封印されていた。
最終Ver.
獣人のような形の最終形態。瞬発力も増して、プリキュアに対して格闘戦を挑めるようになった。
Ver.2
エネルギー体が獣状に形成された段階。戦闘能力が向上して、大きな爪で相手を捕まえることもできる。
Ver.1
キラキラルが不足しているため、形状があいまいなまま存在している状態。空を飛ぶことも可能である。
ノワール
(声／塩屋翼)
闇のキラキラルで世界を染めるため、しもべたちにキラキラルを集めさせていた黒幕。その正体は100年前、戦場で身も心も傷つき、いちご坂に流れてきた男。ルミエルの愛情を独占しようとして拒まれ、そのときに感じた深い絶望が、悪意のかたまりとなって肉体から離脱した存在だった。
100年前のノワール
いちご坂に流れ着いたときの姿。ルミエルの温もりとスイーツに救われたが、そのあとに、さらなる愛情を求めすぎた。
転生したノワールとディアブル
49話のラストシーンで、成長したいちかが作ったスイーツに、少年と少女は笑顔を見せた。少年はいぬを連れていた。
エリシオの身体に入ったノワール
かつての自分の身体であるエリシオのなかに、ノワールが戻っていった際には、髪は黒色へと変化した。

Character Collection 12
ノワールのしもべ
悪い妖精と怪物たち
ノワールとそのしもべたちは、さまざまな方法でキラキラルを奪おうとした。それぞれの個性の違いから、使う怪物たちの特性も異なっていた。多種多様な怪物キャラクターたちを紹介する。
プルプル(2話)
ガミー(1話)
ガミー集団
ジュリオにそそのかされ、自分の欲望を満たすためにキラキラルを狙った悪い妖精の一団。ベルトとキラキラルの力で巨大化。ガミーがリーダー格。
★妖精たちの元の姿
元はいちご山に住む妖精。彼らにベルトをくれた謎の仮面の男はジュリオだった。
★謎の仮面の男
もらったベル
マキャロンヌ(5話)
シュックリー(4話)
ホットー(3話)
スポンジン(8話)
フエール(7話)
ビタード(6話)
タルトーン(10話)
クッカクッキー(9話)
10体合体妖精(11話)

巨大イル
ビブリーは人形のイルを使った。イルが吸収したキラキラルを闇に染めることで巨大イルに変貌。プリキュアと戦いを繰り広げた。
イルミツバチ(20話)
イルわたあめ(19話)
イルミルクレープ(18話)
イル暴走(32話)
イルごおり(26話)
イルビブリー(23話)
イルムースケーキ(21話)
闇をまとうネンド兵士(40話)
いちご坂の人々もネンド兵士に変えられた。
グレイブの手下の怪物化
グレイブの手下であるネンド人形が大量のキラキラルを吸収することで、巨大なネンドモンスターに姿を変えて暴れ回った。
巨大スポンジケーキ(28話)
バースデーケーキ(31話)
ホールケーキ+カップケーキ(24話)
ナタ王子のスイーツ(25話)
エリシオの怪物
エリシオは、闇の力を秘めたカードで物体を変化させて、強大な怪物にした。
抹茶マカロン+時計台(29話)
アイスバー+スピーカー(27話)
トランプ兵(30話)
天秤(30話)
パンプキン+クッキー(37話)
みくが閉じ込められた巨大雪だるま(44話)

Guide ガイド

いちかとみんなの出会いから、それぞれの道を歩んでいくエピローグまで、『キラキラ☆プリキュアアラモード』の物語を名シーンと共にプレイバック。いちかたちが作った、動物をモチーフにした「アニマルスイーツ」もチェック！

▲いちご山での妖精同士の争いで爆発が発生。飛び散ったキラキラルがスイーツのような雲になった

第1話 大好きたっぷり！キュアホイップできあがり！

スイーツに宿るキラキラルでプリキュアになっちゃった！

宇佐美いちかはスイーツが大好きな中学2年生。ある日いちかは、1年ぶりに帰国する母親のためにケーキを作ろうとしていた。奮闘するいちかの前に、妖精ペコリンが現れる。いちかはペコリンの指示を受けながら見事にケーキを完成させるが、当の母親が帰国できなくなってしまう。落ち込むいちかの前に、今度はスイーツに宿るパワー「キラキラル」を狙う妖精ガミーが出現。暴れるガミーを止めるためにいちかはケーキを渡そうとするが、母親への〝大好き〟という気持ちをこめて作ったものを手放せない。するとケーキからキラキラルがあふれて「スイーツパクト」が誕生。それを使ってキュアホイップに変身したいちかは、素早い動きでガミーを追い払った。

◀▲一度はガミーにケーキを差し出そうとしたいちかだが、母への想いがつまったケーキは渡せない

▲うさぎの耳でガミーの居場所を追う！
▼ガミーを撃退したと思ったら、今度は枝に引っかかった鞄から謎の声が……!?

アニマルスイーツ うさぎショートケーキ

帰国予定だったお母さんへの〝大好き〟という、今のいちかの気持ちがこめられている。

第2話 小さな天才キュアカスタード！

『スイーツの科学』を愛読する天才がふたり目のプリキュアに

謎の声が聞こえる鞄を開けると、スイーツ工房の建物が出現。声の主は、肉体を失った妖精の長老だった。キラキラルを操り世界を元気にする「伝説のパティシエ・プリキュア」の話を聞いたいちかは、プリキュアになることを快諾する。一方、いちかの同級生の有栖川ひまりは、スイーツ好きで意気投合したいちかとひまりは、一緒にプリンを作ることにする。そこにキラキラルを狙う妖精ブルブルが出現。キュアホイップに変身して立ち向かういちかの姿を見たひまりも「友達をなくしたくない」との想いから、ふたり目のプリキュア・キュアカスタードに変身。キラキラルを取り戻したふたりは、自作のプリンを味わうのだった。

▼ひまりが変身したキュアカスタードは、最初は自分でもコントロールしきれないほど素早く動けた

アニマルスイーツ りすプリン

ふたりで協力してプリンを完成させたとき、ひまりをイメージして、いちかが作ったもの。

◀▶ひまりが愛読する本をいちかも図書館で借りて参考にする。想いが通じたふたりは友達になれた

第2話 STAFF 脚本／田中仁　原画／石川てつや、森島杏一、上野香青、森下勇輝、吉田巨良、北田美弥子、冨士池圭恵、大内智美、野澤隆、佐藤元、楢崎朝子、川元まりこ、森田岳士、上久保聡美、竹田直樹、完甘美由子、松田千鶴、佐藤友子、北野久美子、榛野智加、会津五月、スタジオガッツ、アニタス神戸、渡邊巧大　背景レイアウト／鵜崎博、本間薫　背景／宮本康香、藤原友美、猿谷勝己、戸杉奈津子、チェン・ヤンフェイ、Toei Phils.、ネリット・アクーニャ　CGディレクター／松田範雄　デジタルアーティスト／菊地信明、黒川幸佑、沢野ひいろ、奥納慧、榎本匠一、岡安達也、桃元央、日恵友恵、北村和人、真田竹志、鈴木知美、渡部弘之　演出助手／高戸谷一歩　製作進行／時田隼人　美術／齋藤優　総作画監督／川村敏子　作画監督／石川てつや　演出／宮元宏彰

第1話 STAFF 脚本／田中仁　原画／川村敏子、星川信芳、上野ケン、鈴木理沙、山岡直子、中村真由美、廣中美佳、丸山晶、浦田幸博、斉藤拓也、濱野裕一、松田千鶴、小川亮、上野香青、完甘美由子、生水勇気、楢崎朝子、月乃むあ、上久保聡美、北田美弥子、北野久美子、佐藤友子、稲澤茉莉、梶原俊平、野津美智子、井手陽子、植竹康彦、会津五月、スタジオガッツ、GアンドGディレクション、Toei Phils.、大田謙治、赤田信人、藤井孝博、河野宏之、薑部あい子、馬場亮子、松岡誠、加々美高浩、馬越嘉彦、井野真理恵、渡邊巧大　背景／本間禎章、田中里緑　CGディレクター／児玉徹郎　デジタルアーティスト／たかあき、池田篤史、下崎由加里、林沙樹、松本八希、川端英樹、小林葉、中谷純也、宮澤孝介、海老沢大生　演出助手／豊田百香　製作進行／柿田智子　美術／飯野敏典　総作画監督／川村敏子　作画監督／山岡直子　演出／暮田公平

第1話～第49話 Story（ストーリー）

◀ステージを邪魔されたうえに、友情あふれる大切なアイスを狙われた怒りをこめて、あおいが絶叫

叫べライオン！ キュアジェラート！ 第3話

変身アイテムと繰り出す技は冷え冷えだけど気持ちは灼熱！

バンド活動をする同学年の少女・立神あおいと出会ったいちか&ひまり。ふたりは、コンテスト出場を前にして作詞に行きづまっていたあおいを励まそうと、コンテスト当日に「空のようなアイス」を差し入れる。コンテスト出場を諦めかけていたあおいは、胸に「青い空に響く歌を歌いたい」という想いが蘇り、出場を決意。しかし、演奏開始と同時にアイスのキラキラルを狙う妖精ホットーが現れる。いちか&ひまりは観客が逃げた会場で変身して立ち向かう。ホットーの目的がアイスと知って「私の大切なアイスなんだよ！」と吠えるあおいは、キュアジェラートに変身。ホットー撃退後、青空にあおいの歌声が響き、避難していた観客がコンテスト会場へ戻ってきた。

▲あおいの歌声は、彼女が尊敬するアーティストで、コンテストの審査員である紳あやねにも届いた

アニマルスイーツ
らいおんアイス

あおいを元気にするため、いちかが発案し、ひまりが知恵を絞った空のイメージのアイス。

3人そろって レッツ・ラ・まぜまぜ！ 第4話

シュークリームが膨らまない!? 失敗の連続で意気消沈する3人

洋菓子店の娘・日向まりこにバレエ発表会のチケットをもらったいちかたちは、手作りシュークリームの差し入れを計画。しかし、失敗を繰り返した3人は気落ちして厨房から帰ってしまう。落ち込むいちかに対し、まりこは「うまくいかないときは、気持ちが始まったときを思い出す。想いは女の子の輝く力になる」と助言してくれる。奮起したいちかが厨房に戻ると、ひまり&あおいも再集結。今度は見事にシュークリームを完成させる。だが、それを妖精シュックリーに奪われてしまう。キラキラルで強くなったシュックリー相手に3人は苦戦するものの、想いをひとつに合わせてシュックリーを撃退。まりこは、3人が作ったシュークリームを喜んでくれた。

バレエの発表会への差し入れの品なので、バレエの有名な演目「白鳥の湖」のイメージ。

アニマルスイーツ
スワン シュークリーム

◀▲バレエに出演するまりこにシュークリームを贈ろうとする3人だが、シュー生地がなかなか膨らまない！ 3人は諦めかけたが、別々の場所で成功させたい想いが同時に沸き上がって、協力して完成へとこぎつけた

第4話 STAFF 脚本／大島和彦　原画／デニス・カブラオ、ロメオ・アンニョヌエボ、ポール・ザルディバー、アレン・ジェラルディーノ、ロメル・ブーラ、レスティ・ロケ、ボブ・デラ ペーニャ、マービン・メンドーサ、エド マーチン・クリストモ、レム・バレンシア　背景／デザインオフィス・メカマン、石原信帆、上原里香、田中美紀、山口大悟郎　CGディレクター／松田範雄　デジタルアーティスト／菊地信明、黒川幸佑、淵野ひいろ、黄納懿、榎本匠一、岡安達也、秋元央、日恵友恵、北村和人、真田竹志、鈴木知美、渡部弘之　演出助手／野呂彰芳、高戸谷一歩　製作進行／時田隼人　美術／鈴木祥太　総作画監督／川村敏子　作画監督／フランシス・カネダ、アリス・ナリオ　演出／貝澤幸男

第3話 STAFF 脚本／伊藤睦美　原画／和田直樹、藤井秀德、中澤あこ、小宮山弥生、遠藤香、志賀祐香、榎本勝紀、渡瀬巧大、板岡錦　背景／本間禎章、山下千歌、飯野敏典、田中里緑、陳炯年、Toei Phils.、ルーベン・オレンセ　CGディレクター／児玉徹郎　デジタルアーティスト／たかあき、池田篤史、下崎由加里、深田あんり、林沙樹、松本八希、川端英樹、小林東、中谷純也、宮澤孝介、海老沢大生　製作進行／柿田智子　美術／黄国威　総作画監督／川村敏子　作画監督／高橋晃　絵コンテ／小山賢　演出／古家陽子

きまぐれお姉さまはキュアマカロン！

できすぎちゃってつまらない？ゆかりが見つけた面白いもの

女子高生の琴爪ゆかりは、人々が思わず見とれてしまう美人で「なんでもできる」と評判。だが、彼女自身は何をしても面白くなさそう。そんなゆかりがチャレンジ精神旺盛ないちかを気に入って、いちかの誘いでマカロン作りに挑戦する。しかしマカロンは作るのが難しく、なんでも器用にこなすゆかりでも失敗の連続だ。だが、いちかがデコレーションしたマカロンを贈られたゆかりに笑顔がこぼれる。そこに妖精マキャロンヌが現れ、ゆかりのマカロンを奪おうとする。それをきっぱりと拒否したゆかりはスイーツパクトを得て、4人目のプリキュア・キュアマカロンに変身。ひとりでマキャロンヌを追い払ったゆかりは「面白い」と思えるものを見つけたようだ。

▲勉強ができてスポーツ万能で、雑誌の「街で噂の美人特集」で取り上げられる有名人！

▲祖母の教えで茶道をたしなんでいるゆかりは、調理もできる。メレンゲの作り方も完璧

▲ゆかりは「これ（マカロン）に手を出すなんて1万年早いわよ」と言い放つ

▲「今度は完璧なマカロンを作ってみたいわ」と、遠回しに仲間入りを宣言した

アニマルスイーツ
ねこマカロン

ゆかりが何度作り直してもいまいちなできのマカロンを、いちかがデコレーションする。ゆかりは初めて笑顔を見せた。

第6話

これってラブ!? 華麗なるキュアショコラ！

凛々しいあきらにひと目ぼれ♡ いちかの揺れる想いの行方は!?

隣の家に越してきた高校生の剣城あきらにひと目ぼれしたいちかは、チョコの店を探しているあきらを案内する。チョコはあきらの妹で入院中の剣城みくへの見舞い品。あきらは、案内のおれとして、いちかにもチョコを買ってくれる。しかし、妖精ビタードが、あきらのチョコと街中のチョコのキラキラルを奪ってしまう。そこでいちかは、あきらに買ってもらったチョコを使っていぬのチョコを作る。そこへ再びビタードが襲撃。ビタードと戦うキュアホイップがいちかと知って驚くあきらは「大切なチョコを守りたい」との想いでキュアショコラとなり、ビタードを撃退。いちかはあきらに恋心を伝えようとするが、あきらがじつは女性と知ってショックを受けた。

▶◀いちかは、自宅の塀から転落したところを救ってくれたあきらに熱を上げる

◀あきらの両親は病院のそばに、あきらは高校に近い祖母の家に越したのだった

アニマルスイーツ
いぬチョコレート

大きなハートチョコを成形し直した、みくの見舞い用のチョコ。あきらも湯せんでチョコを溶かすのを手伝った。

◀ボーイッシュなあきらはれっきとした女性。いちかは父に教えられてショックを受ける

第6話 STAFF 脚本／田中仁　原画／赤田信人、星川信芳、藤原未来夫、森島浩一、松田千鶴、大内舞美、河野宏之、上久保聡美、森下勇輝、藤井孝博、北田美弥子、森田岳士、完甘美也子、冨士池圭恵、安田陽子、佐藤友子、月乃むあ、旭プロダクション、和田高明　背景レイアウト／鵜飼博、本間薫　背景／宮本里香、藤原友美、齋藤優、猪谷勝己、チェン・ヤンフェイ、Toei Phils.、ネリット・アクーニャ　CGディレクター／松田範雄　デジタルアーティスト／菊地信明、黒川幸也、刈野ひいろ、奥納基、榎本匠一、岡安達也、秋元央、日塔友恵、北村和人、真田竹志、鈴木知美、渡部弘之　演出助手／高戸谷一歩　製作進行／柿田智子　美術／戸杉奈津子　総作画監督／川村敏子　作画監督／赤田信人　絵コンテ／神谷智大　演出／平山美穂

第5話 STAFF 脚本／坪田文　原画／上野ケン、青山亮、田中伸明、福原恵次、原田節子、廣中美佳、増田誠治、安田陽子、合津五月、西口智也、野津美智子、佐藤元、高橋任治、真中孝之、濱野裕一、佐藤友子、完甘美也子、奥田富美子、小山優貴子、水野友美子、牧野清香、阿久津哲也　背景／山下千歌、西田洛、本間禎章、飯野敏典、陳娟年、Toei Phils.、エルウィン・サアーア　CGディレクター／児玉徹郎　デジタルアーティスト／たかあき、池田篤史、下崎由加里、深田あんり、林沙樹、松本八希、川端英樹、小林康、中谷純也、宮澤孝介、海老沢大生　演出助手／豊田百香　製作進行／野本雄也　美術／田中里緒　総作画監督／川村敏子　作画監督／上野ケン　絵コンテ／黒田成美　演出／中島豊

第7話 ペコリン、ドーナツ作るペコ～！

いちご山のスイーツ工房にペコリンの仲間が戻ってきた

にぎやかにドーナツを作るいちかたちを見た長老は、妖精たちが仲よくスイーツを作っていた、いちご山のスイーツ工房を思い出す。悪い妖精に襲われたときに起きたキラキラルの爆発でペコリンは仲間と離ればなれになり、長老は実体を失ってしまったのだ。いちかは、妖精の仲間に会いたいと悲しむペコリンを励ますために、ペコリンが大好きなドーナツを一緒に作る。それを持っていちご山に向かったいちかとペコリンを妖精フエールが襲撃。フエールは4体に増えるが、陰で見守っていたひまりたちが加勢して撃退。いちかは、ペコリンの仲間が戻ることを期待して、鞄から現れる建物でスイーツ店「キラキラパティスリー（キラパティ）」を開くことを提案した。

▲◀ペコリンは仲間とスイーツを作っていた場所へいちかを案内。そこをフエールが襲撃

▲◀ペコリンたちと悪い妖精の争いで爆発が起き、ペコリンは仲間と離ればなれになった

アニマルスイーツ
ペコリンドーナツ

いちかがペコリンを励ますために作ったもの。ほかの妖精を模したデコレーションもある。

第8話 キラパティオープン…できません！

初めてのお客さまの少女を笑顔にするために急ピッチで開店準備

キラパティの開店準備が始まった。長老は、店の地下室にある「キラキラルポット」に蓄えたキラキラルを使えば家具や装飾具を作ることができると言う。だが、なかなか思うようにうまくいかず、開店は足踏み状態だ。そこへ初めてのお客さまが来店する。友達とのお茶会に持っていくスイーツで悩む女の子・児玉えみるだ。彼女を笑顔にするために、ひまりたちは各自の得意分野で力を合わせて開店準備を進め、いちかは5人の個性をつめこんだスイーツを用意。えみるは大喜びするが、妖精スポンジにキラキラルを奪われる。5人の活躍でキラキラルを無事に取り戻し、ついにキラパティがオープン。店の制服に着替えた5人は、えみると友達を笑顔で迎えた。

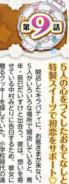
▶▼壁に大穴を開けたり、お店を否定する意見が上がったりと開店目前なのに問題山積み

▶5人が放出したクリームエネルギーはケーキの形になって、妖精スポンジを浄化した

▶えみるを放っておけない5人は、自分の得意なことで助け合い、開店準備を完了させた

◀キラパティの開店準備を通して5人の気持ちがひとつになったことに着想を得て、いちかが作ったスイーツ。好みがバラバラの友達と食べるスイーツを探していたえみるも大満足だった

第9話 キラパティがあなたの恋、叶えます！

5人の心をつくしたおもてなしと特製スイーツで初恋をサポート♡

開店したキラパティに、お客さまが来ない。5人がいろいろな場所で開店していると、青年・辰巳だいすけと出会う。彼は、想いを寄せている中村みどりに告白するため、彼女に贈るクッキーを探していた。小学校時代の遠足でみどりが半分こにしてくれた思い出の品だと聞いた5人は、彼のためにクッキーを作る。完成したクッキーを妖精クッカクッキーに奪われそうになりつつも、プリキュアの助けで取り戻し、辰巳はみどりにプレゼントする。彼を応援するいちかたちは、キラパティ店内にふたりを招待する。戦いの衝撃で割れたクッキーを目にしたみどりに、遠足でクッキーを半分こした思い出が蘇る。ふたりがいい雰囲気になって、5人のおもてなしは大成功。

▼▶5人の活躍でクッキーを取り戻した辰巳の告白を、みどりは「クッキー好き」と勘違い

▲◀店に招待されたふたりはパンダクッキーから遠足の思い出話に花を咲かせるのだった

◀▲▼5人が心をこめて作ったクッキーは、辰巳に愛しいみどりへ告白する勇気を与えた

アニマルスイーツ
パンダクッキー

クッキーは店のメニューにないので、辰巳の遠足の思い出に合わせて作ったオーダーメイド。

第9話 STAFF 脚本／黒須美由紀　原画／青山充
背景／柿ヒロツグ、柿梓、三浦智、飯野敏典、西田凍、田中里緑、陳炯年　CGディレクター／児玉徹郎　デジタルアーティスト／たかあき、池田篤史、下崎由加里、深田あんり、林沙樹、松本八希、川端英樹、小林葉、中谷純也、宮澤孝介、海老沢大生　演出助手／三上雅人、富井ななせ　製作進行／堀越圭文　美術／柿ヒロツグ
総作画監督／川村敏江　作画監督／青山充　演出／小山賢

第8話 STAFF 脚本／坪田文　原画／吉森直子、細置明良、池内直子、江口寛、森亜弥子、仲理沙、小川謙太郎、竹村周、林弘子、小林万理、岡村康平、土方友希、村山ともみ、阿部千恵子、水崎健太、尾藤亮太、水野知己、大下久之、江藤大気、近藤瑞衣、服部聡志、松永真彦、加地真理子、窪田レナ、朱暁明、藤田裕子、中山朋彦、上野歩美、ワンパック、寿門堂、濱野裕一
背景／デザインオフィス・メカマン、高橋英次、石原信明、上原里香、田中美紀
CGディレクター／松田範雄　デジタルアーティスト／菊地信明、黒川幸佑、瀬野ひいろ、奥納基、榎本匠一、岡安達也、秋元央、日隈友恵、北村和人、奥田竹志、鈴木知美、渡部弘之　製作進行／網野雄介
美術／鈴木祥太　総作画監督／川村敏江　作画監督／渡邊慶子　絵コンテ／やしろ鞍　演出／松永真彦

第7話 STAFF 脚本／大則和彦　原画／河野宏之、永島英樹、藤井孝博、渡邊巧大　背景／増田竜太郎、飯野敏典、山下千歌、田中里緑、黄国威、陳炯年、Toei Phils.、ルーベン・オレンセ
CGディレクター／児玉徹郎　デジタルアーティスト／たかあき、池田篤史、下崎由加里、深田あんり、林沙樹、松本八希、川端英樹、小林葉、中谷純也、宮澤孝介、海老沢大生　演出助手／野呂彩芳、高戸谷一歩　製作進行／堀越圭文　美術／いいだりえ
総作画監督／川村敏江　作画監督／河野宏之　演出／佐々木憲世

第10話 ゆかりVSあきら！嵐を呼ぶおつかい！

ゆかり&あきらのファンの忠告「ふたりを巻き込まないで」!?

大繁盛するキラパティは、街の恒例行事「いちご坂スイーツフェスティバル」に参加するため、新作のフルーツタルトを作ることになった。フルーツを買いに出かけたゆかり&あきらは、街で出会った困っている人をそれぞれのやり方で手助けして、互いへの理解を深める。一方、そのころキラパティでは、ふたりのファン軍団が押しかけて「この店はふたりにふさわしくない」とまくし立てていた。いちかたちはふたりが戻ってくると信じてタルト作りを進めるが、妖精タルトーンの襲撃を受ける。ピンチの3人を救ったのは、駆けつけたゆかり&あきら。ふたりが隣街で手に入れたフルーツを乗せたタルトはファン軍団も大満足で、キラパティを認めるのだった。

▶ふたりのファンは「ゆかりは気まぐれ、あきらは同情で来ているだけ」と言う

▲▼3人が苦戦するタルトーンをキュアマカロンとキュアショコラの連携プレーで追い払った

「ゆかりの美しさ」と「あきらのかっこよさ」のてんこ盛りをイメージした新作のスイーツ。

第11話 決戦！プリキュアVSガミー集団！

街の人々の心のキラキラルから「キャンディロッド」が誕生！

「いちご坂スイーツフェスティバル」当日。家ではキラパティの活動を内緒にしていたいちかは、父に冷たい態度を取ってしまう。フェスティバルは盛況。だが、妖精ガミーたちが再び現れる。5人は変身して立ち向かうが、謎の仮面の男が放った「闇の力」によって妖精が合体。そんななか、娘の好物を守ろうと奮闘する父の姿を見て父の想いを感じたキュアホイップは「みんなの想いをめちゃくちゃにしないで！」と絶叫。その言葉に、見守っていた人々の心のキラキラルが反応して「キャンディロッド」が誕生する。それを使った5人が放つ「ワンダフルアラモード」で妖精たちは浄化される。元に戻った街を見下ろす謎の仮面の男は「面白い」とほくそ笑んだ。

▲▶いちかの親離れに大ショックを受ける父だが、いちかのためにショートケーキを購入

▲▼街の人々の心からキラキラルがあふれ出す。プリキュアは集まったキラキラルでキャンディロッドを作った

▲キラキラルを狙う妖精たちが再び現れ、合体してスイーツフェスティバルを襲撃する。いちかたちも苦戦

第12話 敵は…モテモテ転校生!?

転校生として現れた黒樹リオの正体は謎の仮面の男・ジュリオ

街の評判になるプリキュアだが、正体は秘密だ。一方、いちかのクラスに黒樹リオが転校してくる。新作カップケーキを作るいちかは、リオと同級生の神楽坂りさをキラパティに招待。リオは「スイーツ作りは苦手」と言うが、クリームの泡立て方をいちかにアドバイスする。りさと一緒の帰り道、リオは謎の仮面の男・ジュリオという正体を現す。りさのキラキラルを奪った彼は、闇のキラキラルでロッドを変形させ、駆けつけたプリキュアに戦いを挑む。キュアホイップは、リオに教わったクリームの泡立て方で新技の「ホイップ・デコレーション」を編み出す。5人の技でロッドを元に戻されて退散したジュリオは、いちかがプリキュアであることに気づいた。

◀▲リオは仮面の男・ジュリオ。奪ったキラキラルを闇に染めて、ロッドを変形させる

▲ジュリオの攻撃に対抗するため、クリームの泡立て方を取り入れた新たな技を修得！

▲いちかたちに謝罪する妖精たち。彼らは仮面の男にそそのかされて悪事を働いていた

いちかが、たっぷりのクリームを「もこもこ」と表現したりさの言葉をヒントに作り出した。

第10話 STAFF 脚本／伊藤睦美　原画／星川信芳、飯飼秀一、桜原恵次、原田節子、完甘美由子、貫中孝之、山岡直子、田中伸昭、藤井孝博、飯飼一幸、佐藤友子、アート・ベース・パン、旭プロダクション　背景レイアウト／猪崎博、本間薫　背景／宮本里香、藤原友美、猿谷勝己、戸杉奈津子、チェン・ヤンフェイ、Toei Phils.、エルウィン・サデーア　CGディレクター／松田範雄　デジタルアーティスト／菊地信明、黒川幸佑、淵野ひいろ、奥納晶、榎本匠一、岡安達也、秋元舜、日塔友恵、北村和人、真田竹志、鈴木知美、渡部弘之　演出助手／高戸谷一歩　製作進行／野本雄也　美術／齋藤優　総作画監督／川村敏子　作画監督／稲上晃　演出／土田豊

第11話 STAFF 脚本／田中仁　原画／爲我井克美、高橋任治、田中伸昭、松田千鶴、森下勇輝、大内智美、野津美智子、永島英樹、黄中美佳、楢崎智子、佐藤元、増田誠治、小澤和則、志田直俊、完甘美由子、鳥袋奈津希、原田節子、上久保聡美、月乃むあ、富士池圭恵、北田美弥子、旭プロダクション、アート・ベース・パン、Toei Phils.　背景／飯野敏典、田中里緒、山下千歌、西田渚、いいだりえ、陳俐年、Toei Phils.、ネリット・アクーニャ　CGディレクター／松田範雄　デジタルアーティスト／真田竹志、鈴木知美、後藤和史、浦野壮広、渡部弘之　演出助手／古東陽子　製作進行／柿田智子　美術／黄国威　総作画監督／川村敏子　作画監督／爲我井克美　演出／宮元宏彰

第12話 STAFF 脚本／坪田文　原画／星川信芳、清水隆正、完甘美由子、増田誠治、松岡謙、北田美弥子、森島浩一、富士池圭恵、上久保聡美、佐藤友子、濱野裕一、藤井孝博、笹川弥幸、神谷智大、河野宏之　背景／デザインオフィス・メカマン、高橋美次、石原信明、上原里香、田中美紀　CGディレクター／児玉徹郎　デジタルアーティスト／たかあき、池田篤史、下崎由加里、深田あんり、林沙樹、松本八恵、川端美樹、小林東、中谷純也、宮澤孝介、海老沢大生　演出助手／野呂彩芳　製作進行／堀越圭文　美術／鈴木祥太　総作画監督／川村敏子　作画監督／松浦仁美　演出／座古明史

▶ひまりはレポーター、いちかは商店街のマスコットのイチゴン役。あおいは撮影担当

生地の爆発を防ぐために断面が星の形をしているのが特徴のチュロスは、ひまりの自信作。

ムリムリ！ ひまり、まさかのデビュー！ 第13話

気弱なひまりがいちご坂商店街PR動画のレポーターに挑戦！

いちご坂商店街のPR動画のレポーターに選ばれたひまり。物知りだけど気弱な性格のためにうまくレポートができない彼女だったが、スイーツに疑問を抱く少女と母親の会話を耳にして、胸のなかで教えてあげたい気持ちが高まる。ひまりが解説すると、母子に大量のキラキラルが発生。それをジュリオが奪い、闇のキラキラルでロッドを弓に変えて攻撃する。少女の『"大好き"につながる大切な気持ち』を闇に染めたことが許せないひまりは、キュアカスタードに変身して新技「カスタード・イリュージョン」を発動。5人の技でジュリオのロッドを浄化して、撃退する。PR動画の再生回数が増えて少し自信がついたひまりは、レポーターを頑張るのだった。

お嬢さまロックンロール！ 第14話

大企業の社長令嬢だったあおいバンドとキラパティ活動は禁止!?

執事兼保護者代理の水嶌みつよしから、バンドとキラパティの活動を禁じられてしまったあおい。じつは彼女は大企業のお嬢さまで、水嶌は、あおいに必要なのはロックよりも社交界のマナーだと考えていた。自分の想いを理解してもらえず悩むあおいは、いちかたちの助けを借りて、立神家のパーティーの来場客に向けて想いを乗せた歌声を披露。そこにジュリオが現れ、あおいの歌で輝きを増した来場客のキラキラルで攻撃を仕掛けてくる。だが水嶌に自分の想いが届いていたことを知ったキュアジェラートは、新技「ジェラート・シェイク」で撃退。騒動後、テストで学年5位以内をキープすることを条件に、あおいはバンドとキラパティの活動を許してもらった。

◀イルカゼリーを食べた水嶌には、あおいの歌のようにパワフルなキラキラルが残った！

▲▶水嶌に自由な活動を禁止されたことに反発したいあおいは、パーティーで実力行使

◀許可条件の「テストの学年5位以内キープ」はこれまでやってきたことなので、あおいには簡単

あおいの「青空みたいなゼリーを作りたい」というアイデアを聞いていたいちかが形にした。

愛ゆえに！ 怒りのキュアショコラ！ 第15話

あきらが気遣う妹・みくの願いは大好きな姉が笑ってくれること

入院中のみくが、病院から外出許可をもらってキラパティを訪れた。いちかは、あきらのために何かをしたいみくに新作スイーツ作りを手伝ってもらう。みくが作ったのは、あきらとの思い出のプードルをモチーフにしたチョコケーキ。口にしたあきらは、みくを心配する笑顔ではなく、本心からの笑顔を浮かべた。それを喜ぶみくからジュリオが奪ったキラキラルは、姉を思いやる妹の力があり格別に強い。キュアショコラは闇色の泡に閉じ込められるが、チョコケーキにこめられた「あきらの笑顔が見たい」というみくの想いを察知し、新技「ショコラ・アロマーゼ」で形勢逆転する。みくを病院へ送るあきらは、みくに、またスイーツを作ってもらう約束をした。

▶◀ジュリオはみくとあきら両方のキラキラルを奪う予定だったが、妹の分だけで超強力

▶みくが作ったチョコケーキは、あきらがこれまでに食べたことのないおいしさだった

みくが、あきらを笑顔にするために、ちょっぴりいちかに手伝ってもらいながら作ったもの。

第15話 STAFF 脚本／伊藤睦美 原画／青山充、山田まさし 背景／増田竜太郎、田中里緑、飯野敏典、陳佩年、Toei Phils.、ネリット・アクーニャ CGディレクター／児玉徹郎 デジタルアーティスト／たかあき、池田篤史、下崎由加里、深田あんり、林沙樹、松本八希、川端英樹、小林東、中谷純也、宮澤孝介、海老沢大生 製作進行／柿田智子 美術／いいだりえ 作画監督／青山充 絵コンテ／鶴岡ゆうき 演出／古家陽子

第14話 STAFF 脚本／田中仁 原画／川村敦子、田中伸昭、松田千鶴、星川信芳、原田節子、真中孝之、清水隆正、会津五月、齋藤千恵、北田美弥子、野津美智子、上野ケン、板岡錦 背景レイアウト／鶴崎博、本間薫 背景／齋藤優、宮本里香、藤原友美、猿谷勝己、チェン・ヤンフェイ、Toei Phils.、エルウィン・サテーア CGディレクター／松田範雄 デジタルアーティスト／真田竹志、鈴木知美、後藤和史、浦野壮広、渡部弘之 製作進行／堀越圭文 美術／戸杉奈津子 作画監督／上野ケン 演出／三上雅人

第13話 STAFF 脚本／大野和寿 原画／飯島秀一、田中伸昭、アルフレッド・レイエス、ユージン・アイソン、デニス・カブラオ、ポール・ザルディバー、フリッツ・ウラング、ロメル・プーラ、レスティ・ロケ、ボブ・デラ ペーニャ、森田岳士 背景／山下千歌、いいだりえ、黄国威、陳佩年、飯野敏典、Toei Phils.、ルーベン・オレンセ CGディレクター／児玉徹郎 デジタルアーティスト／たかあき、池田篤史、下崎由加里、深田あんり、林沙樹、松本八希、川端英樹、小林東、中谷純也、宮澤孝介、海老沢大生 演出助手／高戸谷一歩 製作進行／野本雄也 美術／田中里緑 作画監督／フランシス・カネダ、アリス・ナリオ 演出／中島豊

第16話 キケンな急接近！ゆかりとリオ！

ジュリオの正体が判明!? ゆかりが仕掛けたトラップ

なぜジュリオはいちかたち5人の関係者を狙うのか？ ジュリオの次の標的は自分だと予測したゆかりは、ある作戦を考える。いちかたち4人とリオをお茶会に招待したゆかりは、お茶会後、リオに姉の話をする。一方、ゆかりのもてなしに感激したいちかはキラパティでお茶会を開催。ファン軍団の忘れ物を届けるゆかりは、彼女たちからキラキラルを奪ったジュリオに拘束されて「周りの人間が姉をかまってばかりでさびしいんだろう」と言葉で責められる。だが、それがゆかりの狙い。姉の話はウソで、ゆかりはリオとジュリオが同一人物であることを確認した。キュアマカロンの新技「マカロン・ジュリエンヌ」と駆けつけた4人の攻撃でジュリオは敗走した。

◀ゆかりは、キラパティの5人の役割や悩みに詳しいリオを警戒して問いただそうとする

◀ゆかりの悩みを聞き出したつもりのリオ。しかし、それこそが彼女の仕掛けた罠だった

▲ゆかりの家の茶室に招かれた4人とリオ。着物はゆかりがそれぞれに合わせて用意したもの

アニマルスイーツ
シロイルカいちごだいふく

いちか＆ゆかりのコラボ企画「海の茶室」用の新作。いちご以外にも4つの違う味を用意。

第17話 最後の実験！変身できないキュアホイップ！

正体がバレる寸前のジュリオがいちかからキラキラルを奪取！

ゆかりはキラパティでひまりたちに、リオとジュリオが同一人物だったことを話した。そのころリオは、母からの荷物を自宅で待ついちかに接近。ひまりたちがいちかの家へ駆けつけたとき、いちかはジュリオにキラキラルを奪われたあとだった。ジュリオは、闇に染めたいちかのキラキラルを使ってプリキュアたちに襲いかかる。一方、キラキラルを失ったいちかは、ペコリンの説得によりクッキーを作り始める。すると、いちかにキラキラルが戻ってくる。戦いに加わるキュアホイップがジュリオを圧倒。5人が繰り出す「ワンダフルアラモード」でジュリオの仮面とロッドが砕け散る。キュアホイップは心を開いて話を聞こうとするが、ジュリオは逃走した。

◀リオは、正体が発覚する前にひとりでいるいちかに近づき、彼女のキラキラルを奪った

▶キラキラルを奪われたいちかはスイーツへの興味も失うが、ペコリンの説得でクッキーを作る

◀▶戦いに敗れたジュリオは「スイーツもお前（いちか）も大嫌いだ」と言って姿を消す

アニマルスイーツ
ウサギクッキー

母からの手作りスイーツのお返しにいちかが作り、キラキラルを取り戻すきっかけになった。

第18話 ウワサの主は強敵ビブリー！

キラパティの悪い噂が広まってお客さまゼロの開店休業状態に

ジュリオだったことがプリキュアにバレたリオは、学校に姿を見せなくなった。それと同時に、キラパティの客足が途絶えてしまう。「キラパティのスイーツを食べると恋人と別れる」といった悪い噂が流れているらしい。いちかは落ち込むが、ほかの4人が自分のできることで店を盛り立てようとしている姿を見て、キラパティを新装開店させる。その後、ゆかりが、噂を流した犯人・ビブリーを発見。彼女はジュリオの仲間でノワールのしもべだという。奪った大量のキラキラルを、巨大化させた人形・イルで、ノワールがいる次元へ運ぼうとするビブリー。5人がキラキラルを取り戻すと、ビブリーは「ノワールさまへの愛は誰にも止めさせない」と言い、去っていった。

▶▼人の噂ほど怖いものはない。悪い噂が広まったキラパティには、客が寄りつかなくなった

▼キリンミルクレープを試食した少年の素直な感想が呼び水となって、お客さまが戻ってきた

◀▲▼ビブリーは人形のイルを使ってキラキラルを奪い取り、ノワールのもとへ運ぼうとする

アニマルスイーツ
キリンミルクレープ

いちかが「キリンのように高く遠くを見る」という想いをこめて作った、新装開店用の新作。

第16話 STAFF 脚本／坪田文　原画／赤田信人、福原恵次、安田陽子、増田誠治、森島浩一、高橋任治、重田あい子、田中沙希、廣中美佳、野澤隆、山岡直子、大内哲美、吉田巨良、梯崎朝子、北田美弥子、完廿美也子、上久保聡美、アート・ベース・パン、清水洋　背景／デザインオフィス・メカマン、石原信明、上原里香、田中美紀　CGディレクター／松田範雄　デジタルアーティスト／真田竹志、鈴木知美、後藤和史、浦野壮広、渡部弘之　演出助手／野呂彩芳　製作進行／野本雄也　美術／鈴木祥太　作画監督／赤田信人　演出／佐々木憲世

第17話 STAFF 脚本／田中仁　原画／河野宏之、藤井孝博、永島英樹　背景／栫衿、栫ヒロツグ、三浦智　CGディレクター／児玉徹郎　デジタルアーティスト／たかあき、池田篤史、下崎由加里、深田あんり、林沙樹、松本八希、川端晃樹、小林愛、中谷純也、宮澤孝介、海老沢大生　演出助手／高戸谷一歩　製作進行／堀越圭文　美術／栫ヒロツグ　作画監督／河野宏之　演出／今千秋

第18話 STAFF 脚本／犬飼和彦　原画／吉森直子、細萱明良、備前克彦、江口亮、加地真理子、仲條沙、小川潔太郎、窪田レナ、林弘子、小林万理、朱皓玥、土方友希、村山ともみ、阿部千恵子、水崎健太、尾鼻亮太、江藤大亮、近藤瑠衣、渡邊慶子、松永真彦、藤田裕子、竹村南、佐藤絵美、重左頼忠、耳浦明彰、諏訪昌夫、浜友里恵、古谷涼香、ワンパック、寿門堂、ビー・アール・エー作画部、河野宏之　背景レイアウト／本間薫、鷲崎博　背景／戸杉奈津子、猪谷勝己、宮本里香、藤原友美、チェン・ヤンフェイ、Toei Phils.、エルウィン・サデーア　CGディレクター／松田範雄　デジタルアーティスト／真田竹志、鈴木知美、後藤和史、浦野壮広、渡部弘之　製作進行／崎野雄介　美術／齋藤優　作画監督／渡邊慶子　絵コンテ／土田豊　演出／松永真彦

第19話 天才パティシエ！キラ星シエル！

なぜ？ パリから来たシエルがプリキュアのことを知っている

パリで活躍する天才パティシエのキラ星シエルが来日し、いちご坂商店街で期間限定のスイーツ店をオープン。シエルが作るスイーツに感動したいちかは、弟子入りを志願する。だが「あなたを表現するスイーツ」という課題の入門テストが全然ダメで、シエルに弟子入りを断られてしまった。しかしいちかは、シエルが隠れた努力を重ねていることを知って奮起する。そこへビブリーが現れて、キラキラルを強奪。変身直後のキュアホイップを見て驚くシエルは、巨大化したイルに吹き飛ばされて気絶する。キュアホイップと駆けつけた4人の活躍でキラキラルは取り戻された。目を覚ましたシエルは「プリキュアは本当にいるんだ」とうれしそうにつぶやくのだった。

▲▶試作品のレシピと感想を細かく記入したシエルの研究ノートを見て、いちかは感動する

▲シエルの店は、店内で食べるために、皿盛りで提供するアシェットデセール専門店だ
▶入門テストでいちかが作ったスイーツは「バランスが壊滅的」という低評価を受ける

第20話 憧れまぜまぜ！いちかとシエル！

シエルの一日密着取材に同行！いちかもパンケーキ作りに挑戦

ひまりがレポーターを務める商店街PR動画で、シエルに一日密着取材をすることになった。いちかたちは、ハチミツを仕入れるためにいちご山へ向かうシエルに同行。養蜂場で最高のハチミツを入手したシエルは、そこでパンケーキを作ることにする。シエルのスイーツを目当てに多くの観客が集まり、いちかもパンケーキ作りに参加。おまけにキラキラルを狙ってビブリーも襲ってくる。プリキュアは、巨大化したイルに捕まったシエルを救出し、ビブリーを追い払う。シエルは、プリキュアと会えて大喜び。一方、いちかがプリキュアだとは知らないシエルは、いちかが作ったごく普通のパンケーキからキラキラルがあふれていることを不思議に思うのだった。

▶▼ハチミツを採取する一家と出会ったいちかとシエルは、パンケーキをごちそうすることにした

◀▲いちかが作ったごく普通のパンケーキが養蜂場の一家を笑顔にすることに驚くシエル

アニマルスイーツ
くまパンケーキ

養蜂場の息子が愛読するくまの絵本をヒントにした、いちかの逸品。シエルの評価は「普通」。

第21話 なんですと～!? 明かされるシエルの正体！

シエルの正体はいちご山の妖精 パリへ修業に行ったキラリン

ある夜、長老の指示でいちご山へ向かったいちかたちの前に、爆発で離ればなれになっていた妖精が大集合。ジュリオに操られていたガミーたちが戻るように伝えてくれたのだ。みんなで作ったスイーツで宴を開いているとシエルが駆けつける。彼女の正体は、いちご山出身の妖精キラリン。パリの修業で人間に変身できるようになったのだ。ビブリーが現れてキラキラルを奪い、さらに自分のキラキラルを注ぎこんでイルをパワーアップさせる。だが、妖精の声援を受けるプリキュアの奮闘で撃退。今度は、キラリンがキュアホイップに弟子入りを志願する。そこにノワールから新たなロッドを授かったジュリオが現れる。キラリンは、ジュリオに何かを感じ取った。

▼伝説のパティシエ・プリキュアを目指すキラリンは、キュアホイップに弟子入りを志願

▶長老が打ち上げた花火を見た妖精たちがいちご山に戻る
▼シエルは妖精キラリンだ！

アニマルスイーツ
ペコリン ムースケーキ

ペコリンたちが力を合わせて作ったもの。長老やほかの妖精を模したデコレーションもある。

第19話 STAFF 脚本／香村純子　原画／星川信芳、原田節子、高橋任治、板岡錦、野津美智子、山岡直子、田中伸昭、上久保聡美、大内哲美、楢崎朝子、北田美弥子、川村敏子　背景／本間皓章、倉本章、神戸あや恵、増田竜太郎、今井美紀　CGディレクター／児玉徹郎　デジタルアーティスト／たかあき、池田篤史、下崎由加里、深田あんり、林沙樹、松本八希、川端美樹、小林東、中谷純也、宮澤孝介、海老沢大生　演出助手／三上雅人、富井ななせ　製作進行／柿田聡子　美術／倉橋隆　作画監督／稲上晃　演出／宮元宏彰

第20話 STAFF 脚本／伊藤睦美　原画／飯島秀一、田中伸昭、清水隆正、宍甘美也子、松田千鶴、丸山匡彦、眞中孝之、冨士池圭恵、佐藤友子、増田誠治、旭プロダクション、アート・ベース・パン　背景／デザインオフィス・メカマン、石原朋帆、上原里香、田中美紀　CGディレクター／松田範雄　デジタルアーティスト／真田竹志、鈴木知美、後藤和史、浦野壮広、渡部弘之　演出助手／野呂彩芳　製作進行／野本雄也　美術／鈴木祥太　作画監督／松浦仁美　演出／中島豊

第21話 STAFF 脚本／大駒和彦　原画／星川信芳、川村敏子、ユージン・アイソン、ジュディ・ゼル・バルトラス、デニス・カブラオ、シーザー・デ レオン、アレン・ジェラルディーノ、ロメル・ブーラ、アルフレッド・レイエス、エド マーチン・クリストモ、マービン・メンドーサ、レジー・マナバット　背景／西田緑、山下千歌、いいだりえ、陳錫年、Toei Phils.、ルーベン・オレンセ　CGディレクター／児玉徹郎　デジタルアーティスト／たかあき、池田篤史、下崎由加里、深田あんり、林沙樹、松本八希、川端美樹、小林東、中谷純也、宮澤孝介、海老沢大生　演出助手／高戸谷一歩　製作進行／堀越圭文　美術／田中里緑、黄国威　作画監督／フランシス・カネダ、アリス・ナリオ　演出／座古明史

▼▶キラリンは、自分の弟だとわかったジュリオを止めようとするが、彼は聞く耳を持たない

▼「前に作ったワッフルのほうがおいしかった」という姉の率直な言葉がピカリオを傷つけた

▲ピカリオを闇に染めた張本人であるノワールが、山の頂上の穴から成り行きを見守っていた

やめてジュリオ! 憎しみのキラキラル! 第22話

憎しみの炎を燃やすジュリオはキラリンの弟・ピカリオだった

プリキュアたちは、憎しみを闇の力に変えて攻撃するジュリオに苦戦。キラリンはジュリオが双子の弟・ピカリオと気づき、ジュリオを静止するが、彼は「姉さんぶるな!」と怒りをぶつける。ジュリオの攻撃でいちご山の山頂に穴が空き、いちかたちは山の空洞にあるテーブル状の台地に転落。ピカリオは、そこで自分の過去を語り始める。パリでの修業中、彼は姉と自分との才能の差に絶望。そんなピカリオにノワールが闇のロッドを与えたのだ。しかし、キュアホイップは彼の心の奥にある「姉への想い」を察知。ジュリオの闇の力は、姉のことが大好きな気持ちの裏返し。キュアホイップが4人の後押しでジュリオの心の闇を晴らすと、彼は妖精の姿に戻った。

▶いちご山内部の空洞には、頂上が緑の平地になったキノコのような大小の岩が3つある

◀緑の平地から伸びる道は空洞の壁面につながり、壁面に開いた穴の中に「祠」があった

翔べ! 虹色ペガサス、キュアパルフェ! 第23話

シエルがノワールのしもべに? 姉を思う弟にキラキラル復活!

闇が晴れてもキラキラルがこもったスイーツを作れないピカリオ。弟を追いつめたことを後悔するシエルは、ノワールによって闇の球体に閉じ込められる。そこに吸い込まれたいちかとピカリオは、絶望するシエルを救うためにワッフルを作成。ピカリオの姉を想う気持ちがキラキラルを生み、それを食べたシエルは希望を取り戻す。3人は球体から脱出するが、ノワールの攻撃から姉をかばったピカリオが倒れる。キラキラルでペガサスパフェを作ったシエルは、スイーツパクトを得てキュアパルフェに変身。ピカリオから託されたロッドは「レインボーリボン」に姿を変え、それを使った技「キラクル・レインボー」でイルと合体していたビフリーを吹き飛ばした。

▶落ち込むシエルに近づき闇のしもべにしようとするノワール
◀姉をかばう弟を矢が貫いた!

▼闇に落ちた弟のスイーツは灰化するが、姉のために作ったワッフルにキラキラルが戻る

アニマルスイーツ ペガサスパフェ

闇の呪縛から逃れたシエルが、キラキラルで作ったフルーツとピカリオのワッフルで作成した。

第23話 STAFF 脚本／田中仁　原画／川村敦子、宍甘美也子、高橋任治、森島浩一、廣中美佳、原田節子、北田美弥子、川口百合恵、永島英樹、丸山匡彦、赤田信人、田中伸昭、森田岳士、板岡錦、小川孝治、松田千鶴、山岡直子、楢崎朝子、会津五月、アート・ベース・パン、スタジオエル　背景／増田竜太郎、本間禎章、田中更緑、山下千歌、黄国威、陳錦年、Toei Phils.、エルウィン・サテーア　CGディレクター／児玉徹郎　デジタルアーティスト／たかあき、池田篤史、下崎由加里、深田安莉、岡田明日菜、小林東、宮澤孝介、中谷純也、坪川尚史、赤瀬平、林沙樹　演出助手／高戸谷一歩　製作進行／野本雄也　美術／いいだりえ　作画監督／川村敦子　演出／暮田公平

第22話 STAFF 脚本／香村純子　原画／青山充　背景レイアウト／鵜崎博　背景／宮本里香、齋藤優、飯野敏典、Toei Phils.、ネリット・アクーニャ　CGディレクター／松田範雄　デジタルアーティスト／岡田竹志、鈴木知美、後藤和史、浦野壮広、渡部弘之　製作進行／柿田智子　美術／戸杉奈津子　作画監督／青山充　絵コンテ／貝澤幸男　演出／古家陽子

第24話 転校生は妖精キラリン!?

転校生のシエルはお腹がすくと妖精キラリンの姿に戻っちゃう

ピカリオはいちご山の空洞の祠で傷を癒すことになり、6人は古のプリキュアから「結晶」を授かった。シエルは、いちかたちをもっとよく知るため、いちかのクラスに転入。数学と運動は完璧だが、国語は苦手。また、お腹がすくと妖精の姿に戻る欠点があった。キラリンを見た生徒が大騒ぎするが、いちかたちの機転でなんとかごまかすことに成功。そんな学校の上空をノワールのしもべのひとり・グレイブが乗る自動車が、キラキラルを奪いながら飛んでいく。いちかたちが立ち向かい、ゆかり&あきらも駆けつける。グレイブが繰り出すネンドモンスターをプリキュアが浄化すると、彼は去っていった。6人は新たな敵との戦いに気を引き締めるのだった。

▲▶空腹で妖精に戻ったキラリンは、いちかたちのお弁当を分けてもらってシエルに戻る

▲祠の祭壇にあるろうそくのオブジェの炎が6色の結晶になり、6人の手に渡る

アニマルスイーツ
コトリカップケーキ

お腹をすかせたシエルがおやつに作ったカップケーキに、いちかがアレンジを加えた。

第25話 電撃結婚!? プリンセスゆかり!

王子にプロポーズされたゆかり 結婚の条件はあきらに勝つこと

来日したコンフェイト公国のナタ王子が、ゆかりを見初める。面白がるゆかりは「王子があきらに勝てたら国へついていく」と宣言。王子とあきらはさまざまな勝負を展開する。最後はスイーツ勝負。あきらに「人の気持ちで遊ぶのはよくない」と注意されたゆかりは反省。あきらと一緒に作ったチョコマカロンを王子へ届けると、王子が特注した巨大スイーツのキラキラルを狙ってノワールのしもべ・エリシオが襲撃する。スイーツパクトを落として変身できないゆかりを守って戦うキュアショコラ。そこにいちかたちが駆けつけて、エリシオを退散させた。ゆかりが王子の求婚を断ると、王子はあきらに「ゆかりを幸せにして。男の約束です」と言い残して帰国した。

▶来日中の王子がゆかりにひと目ぼれ
◀気持ちがぎくしゃくしたふたりは、チョコマカロン作りの共同作業で和解

▶ダンス勝負では、ゆかりを優雅にエスコートしたあきらが勝利。王子はプールに転落した

第26話 夏だ! 海だ! キラパティ漂流記!

キラパティが流れ着いた孤島でさびしさで荒れるビブリーと再会

海の上に開店したキラパティが無人島へ流されてしまった。帰るには、スイーツを作ってキラキラルを溜めなくてはならない。一行は、洞窟で見つけたツララでかきごおりを作る。シエルは、なぜか同じ島にいたビブリーにもかきごおりをあげようとするが、ビブリーは逆上してイルを巨大化させる。するとイルが暴走。ピンチのビブリーをキュアパルフェが助けると、キュアパルフェが古のプリキュアから授かった結晶がペガサスの形になった。プリキュアがイルを元に戻すが、ビブリーはシエルが差し出すかきごおりのキラキラルを奪い去っていく。一行も溜めたキラキラルで気球を作って島を脱出。シエルは、次はビブリーにスイーツを食べてもらおうと心に誓った。

▲▶ビブリーを救ったキュアパルフェが持っていた結晶がペガサスのクリスタルになった

アニマルスイーツ
ペンギンかきごおり

洞窟の天然氷を使った逸品。洋風かきごおり・フラッペとは違う、シエルには初体験の味。

▲海遊びで疲れた一行が昼寝をしている間に浮き輪で海に浮かべたキラパティが流された

第26話 STAFF 脚本／東須美由紀　原画／古森直子、細萱明良、窪田レナ、加地真理子、江口恵、岡村康平、小川潤太郎、仲理沙、林弘子、小林万理、加藤裕一、藤田裕子、諏訪昌夫、佐藤絵美、近藤瑞衣、重左兼忠、阿部千恵子、村山ともみ、村田恵泰、服部暁志、古谷涼香、松永真彦、スタジオワンパック、マウス、濱野裕一　背景レイアウト／髭崎博、本間薫　背景／戸杉奈津子、宮本里香、狼谷勝己、藤原友美、山口美保、Toei Phils.、ルーベン・オレンセ　CGディレクター／松田範雄　デジタルアーティスト／眞田竹志、鈴木知美、浦野壮広、円治裕康、渡部弘之、海老沢大生　製作進行／綿野雄介　美術／齋藤優　作画監督／渡邉慶子　絵コンテ／紅優　演出／松永真彦

第25話 STAFF 脚本／坪田文　原画／河野宏之、永島英樹、藤井孝博　背景／柿梓、柿ヒロツグ、三浦智　CGディレクター／児玉徹郎　デジタルアーティスト／たかあき、池田篤史、下崎由加里、深田安莉、岡田明日菜、小林東、宮澤孝介、中谷純也、坪川尚史、赤瀬平、林沙樹　演出助手／野呂彩芳　製作進行／柿田智子　美術／柿ヒロツグ　作画監督／河野宏之　演出／佐々木憲世

第24話 STAFF 脚本／伊藤睦美　原画／星川信芳、田中伸昭、松田千鶴、野津美智子、清水隆正、楢崎朝子、上久保聡美、安田陽子、大内智美、真中孝之、金田英二、田中沙希、板岡錦、デニス・カブラオ　背景／デザインオフィス・メカマン、石原信明、上原里香、田中美紀　CGディレクター／松田範雄　デジタルアーティスト／眞田竹志、鈴木知美、浦野壮広、円治裕康、渡部弘之、海老沢大生　演出助手／冨井ななせ　製作進行／稲越圭文　美術／鈴木祥太　作画監督／上野ケン　演出／三上雅人

ひまりのスイーツノート

ひまりたちキラパティメンバーが本編で作った大半の「アニマルスイーツ」は実際に作ることができる。そのレシピや完成見本が紹介されたTV本編終了後のミニコーナーの要点をまとめた。

第1話

うさぎショートケーキ

スポンジケーキに、クリームでうさぎの顔をデコレーション。ふわふわのスポンジケーキを作るポイントは、卵をしっかりと泡立てること。デコレーション時は、あらかじめ竹串などでうさぎの顔を下描きしておくと、うまく仕上がるかも。

第2話

りすプリン

アーモンドの耳やクリームのしっぽを付けたプリン。プリンをなめらかに仕上げるコツは、卵白を切るように混ぜ、一度こすこと。

第3話

らいおんアイス

かきごおり用シロップを使った空色のジェラートと、バニラアイスを混ぜてマーブル状にしたボディに、クリームでたてがみを表現。

第4話

スワンシュークリーム

胴体はカスタードクリームとホイップクリームがたっぷりのシュークリーム。首用のシューは折れやすいので多めに作っておこう。

第5話

ねこマカロン

ねこの胴体は紫色のマカロンにピンクのクリームをはさむ。クリームで耳、チョコレートペンで目やひげ、しっぽをデコレーション。

第6話

いぬチョコレート

小屋の部分は、家の形に切ったチョコブラウニーに板チョコの屋根を乗せたもの。いぬの顔はいちごにアーモンドの耳を付けて表現。

第7話

ペコリンドーナツ

ストロベリーチョコでコーティングしたドーナツに、クリームで耳としっぽ、チョコレートペンで顔を描けば、ペコリンそっくり！

第9話

パンダクッキー

クッキーにアイシング（砂糖衣）でパンダの顔をペイント。アイシングがしっかりと固まるまで約1日かけて乾かして、できあがり。

第10話

ハリネズミフルーツタルト

タルトにカスタードクリームとホイップクリームを重ね、ハリネズミのハリに見立てたぶどうやいちご、ブルーベリーを乗せて完成。

第12話

ヒツジカップケーキ

カップケーキにホイップクリームを乗せ、ヒツジの毛はマシュマロで表現。顔やツノは鈴カステラとチョコレートペンで作っている。

第13話

フラミンゴチュロス

目やくちばしを描いたチュロスの身体部分に、ハート型に揚げてチョコレートでコーティングをした羽のチュロスを重ねて乗せる。

第14話

イルカゼリー

青い海のゼリーに白いイルカのゼリーを入れて固めたもの。完成品は調理中と上下逆になるので、白いイルカのゼリーの向きに注意。

第15話

プードルチョコケーキ

チョコスポンジケーキで顔の土台を作り、絞り出したチョコクリームで毛を表現。絞り出し袋の口金は、顔は星口金、耳は丸口金。

映画キラキラ☆プリキュアアラモード パリッと！想い出のミルフィーユ！

メモワールミルフィーユ

翼型に焼いたパイの間にたっぷりのクリームを挟んだ。一番上のパイにはアニマル型の模様が出るように、ピンクの粉糖で飾り付け。

キラリンクッキー

キラリンの顔の耳と前髪は、絞りのアイシング。目の部分など、アイシングに重ねて描くときは、完全に乾くのを待ってから描く。

映画プリキュアドリームスターズ！

モフルンさくらマフィン

マフィンにいちごクリームを塗り、チョコクリームで『魔法つかいプリキュア！』に登場したクマのぬいぐるみ・モフルンの顔を描く。

サクラケーキだいふく

水で溶いた食紅を少しずつ加えて、淡いサクラ色に着色した求肥（だいふく生地）で、いちごやクリーム、スポンジケーキを包む。

第20話

くまパンケーキ

3段のパンケーキ。一番上はホイップバターとチョコレートペンでデコレーションして、下２段は表面にクマの顔を焼き込んである。

第18話

キリンミルクレープ

クレープとクリームを何層にも重ねたケーキ。一番上に乗せるクレープは、焼き目の模様がキリンの柄に近いものにするとベスト。

第17話

ウサギクッキー

「パンダクッキー」や「キラリンクッキー」と同じように、クッキーの表面にアイシングでかわいらしいウサギの顔をデコレーション。

第16話

シロイルカいちごだいふく

だいふくに切れ込みを入れ、いちごを入れる。だいふく生地で作った尾やヒレを接着すれば、いちごをくわえたシロイルカの完成。

第24話

コトリカップケーキ

カップケーキの上に乗せるコトリの部分は、アーモンドを色とりどりの砂糖でコーティングした「ドラジェ」と呼ばれるお菓子を使う。

第23話

ペガサスパフェ

ペガサスの翼はワッフル、頭とたてがみは洋梨とメロンを組み合わせる。動かないように、ようじや短い竹串などで固定するといい。

第21話

ペコリンムースケーキ

ストロベリーヨーグルトムースケーキの上のペコリンは、食用色素で着色したホイップクリーム。ピンク色の濃さの加減に注意する。

第32話

カンガルーカップケーキ

カップケーキのマフィンにマンゴークリームを盛り、ココアクリームとチョコレートペンでカンガルー親子の顔をデコレーション。

第28話

ひよこケーキポップ

スポンジケーキとクリームチーズを混ぜて小さく丸めたものを、黄色やピンク色に着色したホワイトチョコでコーティングしよう。

第27話

クジラグミ

ドーム型とハート型の２種類のグミを作り、ハート型のグミをクジラの尾と両ヒレの形に整え、ドーム型のグミの胴体にくっつける。

第26話

ペンギンかきごおり

かきごおりをペンギンの形に整え、お腹の部分にバニラアイスを付ける。水に砂糖を加えて凍らせると、やわらかい食感の氷になる。

第46話

うさぎのハートケーキ

一番上を飾るうさぎの顔を囲む白いクリームがハート型になっているデコレーションケーキ。ピンク色のクリームはラズベリー味。

第45話

しろくまブッシュドノエル

ガナッシュクリームのロールケーキを丸太に模したクリスマスケーキ。純白のホイップクリームで降り積もった雪としろくまを表現。

第40話

スイーツキャッスル

クッキーで作った壁や屋根でスイーツキャッスルを組み立て、マカロンやチョコレート、アイシングしたクッキーでデコレーション。

第37話

ハムスターパンプキンプリン

中身をくり抜いたかぼちゃを器にしてプリンを作り、かぼちゃで作ったハムスターをトッピング。カラメルソースをかけて食べる。

Interview

【スイーツ監修】福田淳子

デザインそっくりで再現性のあるレシピにすることがとても大変でした

――初めて本作の「アニマルスイーツ」に関するコンセプトを聞いたときの感想を教えてください。

こんな大きなお仕事に携われると知って、まずはものすごくうれしく思いました。でも、同時にアニメを観ている子どもたちの「スイーツ」というもののイメージを変えてしまう可能性がある、とても責任のある仕事だとも思いました。パティシエは女児に人気の職業なので「スイーツ」がテーマになるというのはすごく納得だったのですが、さらに「アニマル」という要素まで加わるということに最初は戸惑うことも多かったです。ですが、やっていくうちにいろんな要素を掛け合わせて「ピタッ」とさせることが楽しくなっていきました。

――アニマルスイーツを考えるうえで大変だったこと、楽しかったことはありますか？

アニマルスイーツのデザインはスタッフと話し合って決めていったのですが、「デザインそっくりにスイーツを作ること」と、実際に作ることができる「再現性のあるレシピにすること」が難しく、とても大変でした。でも難題だからこそ、できあがったときの達成感は大きく、とても楽しくもありました。

――では、とくに福田さんが印象に残っているアニマルスイーツはなんですか？

40話に登場した「スイーツキャッスル」です。「そんなに凝ったものでなくていい」と言われていたのですが、シナリオ、絵コンテを拝見したら、そこにこめられたスタッフ全員の想いがあふれていて「それに見合うものを作らねば！」という使命感が出てきました。すでにデザインはできあがっていたので、それに極力イメージが近いこと、実際にレシピ化（再現）できることに注力して、何度も作り直しました。実際に放送を観て、アニメの世界観や、お話の完成度とピッタリ合っていると思えて、とても感動しました。

――ご自身が考えたアニマルスイーツが"アニメ"という形でTVに登場した際の感想は？

アニマルスイーツは、アニメと実写という違う形で２回登場するので、毎回ドキドキしながら観ていました。「自分が作ったものがTVで全国に放送されるってすごいなあ」と、最後まで、毎回観るたびに思っていました。

――ファンへメッセージをお願いします！

制作に関わってはいましたが、私もファンのひとりとして毎回、放送を観ていました。応援していただいたみなさんの"大好き"の気持ちがたくさん届いて、スタッフたちのモチベーションになっていたと思います。みなさまの心の中のキラキラル＝「何かを大好きという気持ち」が、この先もたくさんあり続けますように。１年間ありがとうございました。

アツ～い ライブバトル! あおいVSミサキ! 第27話

自信喪失のキュアジェラートがフェスのステージを破壊する!?

あおいのバンドがロックフェスに出演した。同じ時間に別ステージで演奏する岬のバンドは大盛況だが、あおいのバンドの観客はわずか。いちかたちは気落ちしたあおいを元気づけるが、グミ作りに失敗したあおいは、さらに落ち込む。そこに現れたエリシオがあおいの挫折感を増幅させて、彼女を操る。キュアジェラートに変身してステージを破壊しようとするあおい。しかし、キュアホイップが「あおいらしくない」と呼びかけると「くやしい気持ちも音楽にぶつける」という彼女らしさを取り戻し、エリシオの支配が解ける。エリシオは退散し、フェスは無事終了する。あおいが失敗作のグミを差し出して再挑戦の意を伝えると、岬は笑顔で握手を交わしてくれた。

▲憧れの岬の前でミーハーに振る舞うあおい
◀あおいたちの観客は仲間と知り合いだけ?

◀▲自分らしさを取り戻したキュアジェラートの結晶がライオンのクリスタルに変化する

アニマルスイーツ
クジラグミ

噛みきれない失敗作。いちかは「ハードでおいしいところがあおいらしい」と好評価。

ふくらめ! ひまりのスイーツ大実験! 第28話

スポンジケーキがおいしそうに膨らむのに一番大事なものは?

シエルに続き、あおいが古のプリキュアから授かった結晶もクリスタルに形を変えた。長老は、あおいたちのキラキラルが結晶の形を変えたのかもしれないと推理する。そんなかキラパティに、ひまりの愛読書『スイーツの科学』の作者・立花ゆうが訪問。彼が出したテストに合格したひまりは、野外ステージの実験イベントで助手を務めることになる。イベントでは、巨大なスポンジケーキ作りに挑戦。型から外すと形が崩れたものの、見事に膨らんだことで観客は拍手喝采。そこにグレイブが現れるが、キュアカスタードのスイーツの知識を活かした仲間への指示で撃退に成功。ちょっぴり自信を持つことができたひまりの結晶は、りすのクリスタルに変わった。

▶立花先生は、スポンジケーキが膨らむのに一番大事なものは「作り手の想い」だと言う

▲自信が持てないひまりは、巨大なスポンジケーキが崩れたのは自分のせいだと思い込む

アニマルスイーツ
ひよこケーキポップ

いちかのアイデアで、崩れた巨大なスポンジケーキを使って作ったもの。立花先生も絶賛。

大ピンチ! 闇に染まったキュアマカロン! 第29話

鏡の中で幼いころの自分に闇の世界へ誘われるゆかりは?

いつも気まぐれで自由奔放なゆかり。だが彼女は、人気者のあきらを見てさびしさを覚えていた。そんなとき祖母に、抹茶を使ったスイーツを頼まれたゆかりは、いちかたちの協力で抹茶マカロンを作成。その帰り道、ゆかりの前にエリシオが立ちはだかり、心を映す鏡の中へ彼女を誘う。そこには友達がいなかった幼いころのゆかりがいて、ゆかりを闇の世界へと誘惑。ゆかりは、自分の心に暗い闇があることを認めつつ「今は仲間という光もある。楽しさは与えられるものでなく、自分で作るものだった」と幼い自分に語りかける。鏡の中から脱出したゆかりの結晶は、ねこのクリスタルに形を変える。それを面白がるゆかりは仲間と共にエリシオを追い払った。

▶▼祖母に抹茶のスイーツを頼まれたゆかりは、仲間に励まされてマカロンを完成させた

◀▲キュアマカロンを鏡に閉じ込めたエリシオは、時計台と抹茶マカロンを合成した怪物でプリキュア5人を攻撃

◀▲鏡の中で幼いころの自分と対話したゆかりは、過去の自分も受け入れ、ひと回り成長した

第29話 STAFF 脚本／坪田文　原画／板岡錦、星川信芳、飯島秀一、原田節子、高橋任治、会津五月、山岡直子、冨士池圭恵　背景／本間禎章、飯野敏典、いいだりえ、増田竜太郎、西田渚、Toei Phils.、エルウィン・サデーア　CGディレクター／児玉徹郎　デジタルアーティスト／たかあき、池田篤史、下崎由加里、深田安莉、岡田明日菜、小林東、宮澤孝介、中谷純也、坪川尚史、赤瀬平、林沙樹　演出助手／野呂彩芳　製作進行／柿田智子　美術／黄国威、田中里緑　作画監督／稲上晃　絵コンテ／やしろ駿　演出／芝田浩樹

第28話 STAFF 脚本／伊藤睦美　原画／青山充　背景／デザインオフィス・メカマン、石原信明、上原里香、田中美紀　CGディレクター／松田範雄　デジタルアーティスト／真田竹志、鈴木知美、浦野壮広、丹治裕康、渡部弘之、海老沢大生　演出助手／冨井ななせ　製作進行／福越圭文　美術／鈴木祥太　作画監督／青山充　演出／中島豊

第27話 STAFF 脚本／香村純子　原画／松浦仁美、星川信芳、柿崎朝子、福原恵次、山下恭、田中伸昭、大内智美、中澤勇一、北田美弥子、石川てつや、野澤陸、冨木由美子、小澤誠、斉藤和也、中川貴樹、会津五月、松田千穂、山岡直子、Toei Phils.　背景／本間禎章、神戸あや恵、山下千歌、牟田いずみ、黄国威、陳焔年、飯野敏典、Toei Phils.、ネリット・アクーニャ　CGディレクター／児玉徹郎　デジタルアーティスト／たかあき、池田篤史、下崎由加里、深田安莉、岡田明日菜、小林東、宮澤孝介、中谷純也、坪川尚史、赤瀬平、林沙樹　演出助手／朝倉舞彩　製作進行／野本雄也　美術／田中里緑　作画監督／赤田信人　演出／宮元宏彰

第30話 狙われた学園祭！ ショコラ・イン・ワンダーランド！

妹ひとりと学園祭に来た客大勢 あきらはどちらを助けるのか？

ゆかり&あきらの高校の学園祭。いちかたちは、みくと校内を見て回る。「後夜祭で手作りクッキーを大切な人に渡すと想いが伝わる」と聞いて、みくもクッキー作りに挑戦。張りきりすぎて体調を崩したみくが心配なあきらは、学園祭実行委員長の仕事が忙しく、みくの世話ができない。そこに現れたエリシオは、捕らえたみくと来場客を天秤にかけ「妹を守るために、みんなを切り捨てろ」という闇の選択を迫る。しかし「誰も犠牲にしない」というキュアショコラの決意で結晶がいぬのクリスタルに変形。みくたちは無事に救われ、トランプの怪物が浄化されるとエリシオは退散。あきらは後夜祭で大勢の大切な人にクッキーを渡す。そんな姉に、みくもクッキーを贈った。

▲トランプの「ハートの女王」の仮装をしているゆかりが、「アリス」の仮装をするみくのクッキー作りをサポートする

▶エリシオの策略で、あきらは妹と客たちの運命を天秤にかける残酷な選択を迫られる

▶いちか一行は、名作「不思議の国のアリス」をモチーフにしたレンタル仮装で学園祭を見学

▼▶学園祭を締めくくる後夜祭。あきら&みくは、お互いを一番大切な相手として、手作りクッキーを渡す

第31話 涙はガマン！ いちか 笑顔の理由(りゆう)！

いちかがいつも笑顔でいるのは お母さんとの約束を守るため

いちかの母が突然、帰国してきた。しかし、日本にいられるのは翌日の昼までだと言う。いちかは母のためにケーキを作るが、失敗。「いつも笑顔でいなさい」という母の教えを守り、母と離れて暮らすさびしさをこらえていたいちか。母の突然の帰国でうれしさとさびしさがごちゃまぜになった不安定ないちかの心ではキラキラルが宿らないのだ。母に抱きしめられて号泣したいちかは心の安定を取り戻し、ケーキ作りに再挑戦。完成したケーキを空港に向かう母に向かう。「みんなを笑顔にしたいから戦う」という彼女の決意で結晶はうさぎのクリスタルに変化。グレイブを撃退したキュアホイップは、母が乗る飛行機を笑顔で見送った。

▲▶一時帰国した母を想ってケーキを作るいちかだが、キラキラルがたりず、膨らまない

◀▲"おかあさん"の胸で泣いてすっきりしたいちかが作ったケーキはキラキラルが山盛り

▶笑顔を守るキュアホイップは、グレイブが繰り出すネンドモンスターによる攻撃をはじき返す

第31話 STAFF 脚本／田中仁　原画／星川信芳、松田千鶴、野津美智子、永島英樹、丸山正原、上久保聡美、佐藤友子、根岡錦、北田美弥子、Toei Phils.　背景／本間禎章、増田竜太郎、山下千歌、田中里緑、牟田いずみ、飯野敏典、黄国威、陳娟年、Toei Phils.、ネリット・アクーニャ　CGディレクター／児玉徹郎　デジタルアーティスト／たかあき、池田篤史、下崎由加里、深田絵莉、岡田明日菜、小林東、宮澤孝介、中谷純也、坪川尚史、赤瀬平、林沙樹　演出助手／富井ななせ　製作進行／堀越圭文　美術／いいたりえ　作画監督／川村敦子　演出／畑野森生

第30話 STAFF 脚本／田中仁　原画／チャールズ ジョセフ・ヴィラヌェーバ、ポール・ザルティバー、フランクリン・トゥマング、ボビー・デ ラ ペーニャ、ジュティ ゼル・バルトラソ、アルフレッド・レイエス、ロメオ・アンニョヌエボ、レジー・マナバット、アレハンドロ・ベレン、フリッツ・ウラング、エド マーチン・クリストモ、デニス・カブラオ、レスティ・ロケ　背景レイアウト／鵜崎博　背景／宮本里香、猿谷勝己、齋藤優、藤原友美、山口美保、チェン・ヤンフェイ、本間禎章、飯野敏典、Toei Phils.、ルーベン・オレンセ　CGディレクター／松田範雄　デジタルアーティスト／眞田竹志、鈴木知美、浦野壮広、丹治利康、渡部弘之、海老沢大生　製作進行／野本雄也　美術／戸杉奈津子　作画監督／フランシス・カネダ、アリス・ナリオ　絵コンテ／小山賢　演出／古賀豪子

第32話 キラッと輝け6つの個性！キラキラルクリーマー！

▼ひとりでノワールに立ち向かうルミエルは、愛用の絞り器を託し、全員を未来へと帰した

古のプリキュア・ルミエルから受け取った想いが新たな力に！

すべての結晶がクリスタルに形を変えたが使い方は不明。そこに現れたビブリーに苦戦するキュアホイップが闇を破る方法を求めると、全員が100年前のいちご坂へ飛ばされる。そこはノワールによって闇に染められた世界。一同は、スイーツで人々を癒し街を守るルミエルと出会う。彼女こそが古のプリキュアだった。一方でビブリーは、自分が闇に染まるきっかけを作ったのはノワールだと知る。ノワールと戦うルミエルに現代へと送り返されたいちかたちは、イルに取り込まれたビブリーと対峙。ビブリーを助けたい6人の想いが新アイテム「キラキラルクリーマー」と「クリスタルアニマル」を生む。イルは浄化され、ビブリーは闇のしもべから解放された。

▶ルミエルは「クリスタルは6人の個性の輝き、それが目覚めようとしている」と述べる

アニマルスイーツ
カンガルーカップケーキ

ルミエル作のケーキに、街とそれを守るルミエルを母子に見立て、いちかがデコレーション。

第33話 スイーツがキケン!? 復活、闇のアニマル！

争いの元凶となるスイーツは必要のない食べ物なのか？

公園にいる人々が突然ケンカを始める。近くにあるキラキラルを闇に変え、人々の心を荒れさせる魔獣ディアブルの仕業だ。古のプリキュアの封印から蘇ったばかりで不完全な状態のディアブルは姿を消したが、100年前を思い出したビブリーは闇の力に怯える。いちかたちは「ノワールが狙うスイーツは存在しないほうがいい？」と悩む。するとクリスタルアニマルが、どこかへ走り去る。6人は街中を探すが、クリスタルアニマルはキラパティで待っていた。6人は「スイーツがあったから、みんなと出会えた」という想いを新たにする。封印された恨みを晴らすために、再びディアブルが姿を現す。しかし、プリキュアとクリスタルアニマルの活躍で撃退した。

▲▶ディアブルがもたらした邪悪な雰囲気に、クリスタルアニマルたちは震え上がってしまう

▲▶6人は、姿を消したクリスタルアニマルを探しながら、スイーツについて想いをめぐらす

◀6人のプリキュアとそれぞれのパートナーのクリスタルアニマルは心がつながっている

第33話 STAFF 脚本／伊藤睦美　原画／河野宏之、永島英樹、藤井孝博　背景／柿坪、柿ヒロツグ、三浦哲、牟田いずみ、飯野敏弘　CGディレクター／児玉徹郎　デジタルアーティスト／たかあき、池田篤史、下崎由加里、深田佳莉、岡田明日菜、小林東、宮澤孝介、中谷純也、坪川尚史、赤瀬平、林沙樹　演出助手／野呂彩芳　製作進行／野本雄也　美術／柿ヒロツグ　作画監督／河野宏之　演出／角銅博之

第32話 STAFF 脚本／香村純子　原画／田中伸明、完甘美也子、大内雅美、清水隆正、星川信芳、原田節子、真中孝之、廣中美佳、北田美弥子、野津美智子、永島英樹、松田千鶴、デニス・カブラオ　背景／デザインオフィス・メカマン、石原信明、上原里香、田中美紀　CGディレクター／松田範雄　デジタルアーティスト／宮本美貴、海老沢大生、真田竹志、鈴木拓美、浦野壮広、丹治裕康、渡部弘之　演出助手／朝倉舞彩　製作進行／柿田彩子　美術／鈴木祥太　作画監督／上野ケン　絵コンテ／貝澤幸男　演出／三上雅人

第34話 小さな大決闘！ ねこゆかりVS妖精キラリン！

ゆかりとクリスタルアニマルが頭をぶつけて心が入れ替わった

ノワールの世界で力を蓄えるディアブルが、いちご山に分身を放った。その影響で、妖精とねこの水飲み場をめぐるケンカが勃発。同じころ、散歩中のゆかりと彼女のねこのクリスタルアニマルがぶつかり、両方の心が入れ替わってしまう。ねこの体にゆかりの心が入ったねこゆかりは、妖精のリーダー・キラリンに決闘を申し込み、自分が悪者になることで妖精とねこを仲直りさせようとする。しかし、わざと崖から転落したねこゆかりを妖精とねこが力を合わせて助けたことで両者は和解。ディアブルの分身との戦いのなかで、ゆかりと彼女のねこのクリスタルアニマルは元に戻る。ディアブルの分身を浄化した6人は妖精とねこたちにスイーツを振る舞うのだった。

▲▼ゆかりはいちご坂をひとり占めしようとする悪役を演じ、キラリンに倒されることで妖精とねこを仲直りさせようとした

▲キュアマカロンとキュアパルフェの連携プレーで3体の分身ディアブルの動きを封じて撃退

▲ねこのクリスタルアニマルの心が入っているゆかりねこは、煮干しを見つけて食べてしまう

第35話 デコボコぴったり！ ひまりとあおい！

気丈なあおいと気弱なひまり 共通点は「シュークリーム」？

菓子メーカーの新作発表会に招待されたあおいに同行したひまりは、お嬢さまのあおいと平凡な自分との違いに落ち込む。さらにディアブルが闇を放って人々の心を荒らし、会場はメチャメチャになる。その罪を被って客の悪口を浴びるあおいに心を痛めたひまりは「あおいちゃんはかっこいい女の子」と熱弁を振るう。そこに襲来したディアブルがキュアカスタードを捕らえて彼女をあざけると、今度はキュアジェラートが「ひまりの一生懸命なところが好きなんだ」と吠える。ふたりは、駆けつけた4人と協力してディアブルを撃退。いちかに「ふたりはシュークリームのように好きなものがつまっているところが似てる」と言われ、あおい&ひまりに笑みがこぼれた。

▼あおいにとって、ひまりは「必死になって助ける価値がある、一生懸命なところが大好きな友達」なのだ

▶ひまりから見たあおいは「好きなことをやるために一生懸命頑張っている、かっこいい女の子」だという

▲ひまりは「令嬢のあおいと一般人の自分がどうして友達なのか」と卑屈な気持ちになる

第36話 いちかとあきら！ いちご坂大運動会！

町内会対抗いちご坂大運動会でプリキュア仲間同士が大激突！

いちご坂で町内会対抗の大運動会が開催される。いちかとあきらは、チーム「中いちご坂」のメンバー。みくの見舞いで風邪がうつったあきらは、世話になっている近所の人へのお返しとして精いっぱい頑張る。しかし、いぬのクリスタルアニマルがぐったりしているのを見たいちかは、あきらの不調を察知。あきらを休ませて自分たちが頑張る。そこへ獣人形態にパワーアップしたディアブルが襲撃。体の一部を闇に染められて自由を奪われたプリキュアたちだったが、気力を振り絞ってディアブルを撃退する。運動会はチーム「中いちご坂」が優勝。ところが、今度はいちかに風邪がうつる。あきらに看病してもらういちかは、余計に熱が上がってしまうのだった。

◀▼あきらといぬのクリスタルアニマルが発熱する。両者の体調はつながっているのだ

◀ダウンしたあきらの分までいちかたちが奮闘したチーム「中いちご坂」が見事に優勝

▲闇に入って強く生まれ変わったディアブルは、これまでの四つ足の獣から、二足歩行する獣人形態に進化

第36話 STAFF 脚本／香村純子　原画／青山充
背景／デザインオフィス・メカマン、石原信明、上原里香、田中美紀、山口大悟郎、牟田いずみ、飯野敏典　CGディレクター／松田範雄
デジタルアーティスト／宮本美貴、海老沢大生、真田竹志、鈴木知美、浦野壮広、丹治裕康、渡部弘之　演出助手／朝倉舞彩
製作進行／柄田智子　美術／鈴木祥太　作画監督／青山充
演出／中島豊

第35話 STAFF 脚本／吉成郁子　原画／星川信芳、藤原未来夫、松田千鶴、高橋佳治、森島浩一、植崎朝子、佐藤友子、真中孝之、富士池圭恵、児甘美也子　背景／本間禎章、神戸あや恵、山下千歌、陳綱年、Toei Phils.、ルーベン・オレンセ　CGディレクター／児玉徹郎
デジタルアーティスト／たかあき、池田篤史、下崎由加里、深田俊莉、岡田明日菜、小林東、宮澤孝介、中谷尚也、坪川尚史、赤瀬平、林沙樹
演出助手／嵐井ななせ　製作進行／堀越圭文　美術／田中里緑
作画監督／赤田信人　演出／佐々木憲世

第34話 STAFF 脚本／森江美咲　原画／吉森直子、細萱明良、窪田レナ、加地真理子、江口亮、岡村康平、小川達太郎、仲理沙、藤田裕子、小林万理、加藤禎一、浦島美紀、諏訪昌夫、佐藤絵美、近藤瑞衣、重左輔忠、阿部千恵子、村山ともみ、村田惠泰、水野知己、古谷涼香、森登弥子、尾藤亮太、大森理恵、松永真彦、渡邊慶子、スタジオワンパック　背景レイアウト／鷲崎博、本間章
背景／戸杉奈津子、宮本里香、猿谷勝己、藤原友美、山口美保、チェン・ヤンフェイ、Toei Phils.、エルウィン・サテーア　CGディレクター／松田範雄　デジタルアーティスト／宮本美貴、海老沢大生、真田竹志、鈴木知美、浦野壮広、丹治裕康、渡部弘之　製作進行／綺野雄介　美術／齋藤優
作画監督／渡邊慶子　絵コンテ／今千秋　演出／松永真彦

第37話 サリュー！シエル、フランスへ去るぅ〜!?

▼▶ソレーヌは、天才パティシエのジャン＝ピエール・ジルベルスタインのもとで修業中だったシエルの才能を見出した人物

▼シエルにとってキラパティは、自分にはない発想や発見と出会え、そして新たな挑戦ができる、かけがえのない場所だ

アニマルスイーツ ハムスターパンプキンプリン

シエルといちかのコラボ。ハムスターは、小さいがみんなやさしいいちご坂の街をイメージ。

超一流パティシエのシエルにはキラパティよりパリが似合う？

ハロウィンのコラボイベントとして、シエルの店の庭でキラパティをオープン。そこへ以前シエルが働いていたパリの店のオーナー・ソレーヌが訪れる。彼女の目的は「世界パティシエコンテスト」に招かれたシエルをパリへ連れ戻すこと。それを知ったいちかたちは、シエルが自分たちと一緒にいることが彼女の夢につながるのか不安に思う。だが、シエルの答えは「自分を向上させてくれる仲間がいるキラパティで、パティシエとしてもっと高みへ羽ばたいてみせる」だった。シエルの本心を知ったいちかたちは、エリシオが繰り出すモンスターを追い払う。ソレーヌはシエルをパリに連れ戻すことは諦め、キラパティとしてコンテストへ参加することを要請した。

第38話 ペコリン 人間になっちゃったペコ〜！

ペコリンの「初めてのおつかい」全力でプリキュアを守るペコ！

いちご山の妖精の家に泊まってルミエルの夢を見たペコリンが目覚めると、なんと人間の女の子になっていた。大喜びするペコリンは、いちかたちのおつかいへ向かう。いちかたちが陰で見守るなか、ペコリンは初めてのおつかいを成功させる。いちご山でキラパティをオープンしたペコリンは、ドーナツを妖精や動物たちにも振る舞う。そこにディアブルを合体させた改造車に乗ったグレイブが出現。その前に立ちふさがってプリキュアを守ったペコリンは、一気に力を使ったことで妖精の姿に戻ってしまう。ペコリンが放出したキラキラルを使ったプリキュアの反撃でグレイブは退散。ペコリンは変身できなくなったが、いちかたちに感謝されてうれしかった。

◀▼ペコリンを包む光は、グレイブの車から伸びるガス状のディアブルの影を打ち消す

▲▶おつかいするペコリンは、財布を入れたポシェットを落とすハプニングを乗り越えた

第39話 しょんな〜！プリキュアの敵はいちご坂!?

いちご坂の人々がネンド兵士に戦えないプリキュアが大ピンチ

いちご山で、各地の妖精が集まってノワールの脅威について話し合う「いちご山妖精大会議」が開かれた。闇に怯える妖精たちは、希望の光であるプリキュアにキラキラルがあふれるスイーツの作り方を教わることにする。そんななか、いちご坂商店街にグレイブが現れ、街の人々をネンド兵士に仕立てる。それを知ったプリキュアは、ネンド兵士と戦えない。さらに、パワーアップしたグレイブには浄化技が効かず、プリキュアは大苦戦。ネンド兵士が、妖精たちに異変を知らせるピブリーを追って、いちご山へ押し寄せる。そのとき、古のプリキュアの祠から光があふれ……。商店街でプリキュアを苦しめるグレイブを光弾が襲う。放ったのは、目覚めたリオだった。

▲ネンド兵士のお面が割れると青果店主のおじさんの姿が現れ、プリキュアはビックリ

▲▶◀▼グレイブのネンド兵士の正体は、いちご坂の人々!? プリキュアは手が出せない

◀古のプリキュアの祠にある祭壇で傷を癒すために眠っていたピカリオ＝リオが目覚めた

▲妖精の長老陣がプリキュアにスイーツ作りの教えを請う

第37話 STAFF 脚本／村山功　原画／松浦仁美、星川信芳、稲原慶次、会津五月、川村敦子、清水隆正、野津美智子、神谷智大、廣中美佳、小澤誠、貴中孝之、北田美弥子、児甘美也子、大内絵美　背景／本間禎章、神戸あや恵、飯野敏典、牟田いずみ、田中里緑、いいだりえ、山下千歌、Toei Phils.、エルウィン・サテーア　CGディレクター／児玉徹郎　デジタルアーティスト／たかあき、池田篤史、下崎由加里、深田安莉、岡田明日菜、小林東、宮澤孝介、中谷純也、坪川尚史、赤瀬千、林沙樹　演出助手／野呂彩芳　製作進行／野本雄也　美術／黄国威　作画監督／松浦仁美　演出／宮元宏彰

第38話 STAFF 脚本／大岡和彦　原画／アルフレッド・レイエス、デニス・カブラオ、マービン・メンドーサ、レム・バレンシア、アレン・ジェラルディーノ、ロメオ・アンニョヌエボ、ロベルト・バーナード、エド マーチン・クリストモ、フランクリン・タマング、ボビー・デラ ベーニャ　背景レイアウト／鷺崎博　背景／宮本里香、猿谷勝己、齋藤優、藤原友美、石島朋佳、チェン・ヤンフェイ、本間薫、Toei Phils.、ネリット・アクーニャ　CGディレクター／松田範雄　デジタルアーティスト／宮本美貴、海老沢大生、眞田竹志、鈴木知美、浦野壮広、丹治裕康、渡部弘之　演出助手／冨井ななせ　製作進行／堀越圭文　美術／戸杉奈津子　作画監督／フランシス・カネダ、アリス・ナリオ　演出／芝田浩樹

第39話 STAFF 脚本／田中仁　原画／星野守、高橋任治、原田節子、田中伸明、山岡直子、北田美弥子、芹田明雄　背景／牟田いずみ、田中里緑、神戸あや恵、本間禎章、黄国威、陳翊年、Toei Phils.、ルーベン・オレンセ　CGディレクター／児玉徹郎　デジタルアーティスト／たかあき、池田篤史、下崎由加里、深田安莉、岡田明日菜、小林東、宮澤孝介、中谷純也、坪川尚史、赤瀬平、林沙樹　製作進行／柿田智子　美術／いいだりえ　作画監督／稲上晃　絵コンテ／紅優　演出／古賀豪子

レッツ・ラ・おきがえ！スイーツキャッスルできあがり！ 第40話

妖精と動物の活躍でピンチ脱出 アラモードスタイルにチェンジ

　プリキュアたちは、人々を元に戻すため、商店街でスイーツを作ってキラキラルを生み出そうとする。リオとビブリーが囮になって時間稼ぎをするが、グレイブに気づかれ、材料を闇に染められてしまう。グレイブの攻撃でリオのロッドは砕け、プリキュアも倒れる。そのピンチを救ったのは、妖精と動物たち。彼らが協力して作ったスイーツのキラキラルで闇が払われ、人々は元に戻る。グレイブはディアブルと合体して巨獣に姿を変えるが、街にあふれるキラキラルから生まれた「スイーツキャッスル」で衣装替えのパワーアップを果たしたプリキュアが新たな技を放ち撃破。戦いを見守っていたエリシオは、倒れたグレイブたちをカードに吸収して去っていった。

▶グレイブの猛攻撃でリオが倒れ、プリキュアとクリスタルアニマルも動けなくなった

アラモードスタイル

▲6人は、キラキラルクリーマーにスイーツキャッスルをセットすることでフォームチェンジする！

アニマルスイーツ スイーツキャッスル

6人が戦闘中にキラキラルで作った。いちご坂の人々の想いであり、6人の新たな力になる。

◀グレイブとディアブルの車が合体した巨獣。巨大だが、プリキュアの新たな技で撃破！

プリキュア・ファンタスティックアニマーレ

夢はキラ☆ピカ無限大！ 第41話

強盗の濡れ衣を着せられるリオ シエルの願いは「ずっと一緒」

　リオが目覚めたことで、シエルは大喜び。ところが、商店街の人々が彼女の店に押しかけて「深夜、リオにすべての店のスイーツが襲われた」と苦情を訴える。リオの偽者がキラキラルを奪ったらしい。リオは、ノワールのしもべだった自分が疑われるのは当然として、シエルに迷惑をかけないために街を出て行こうとする。だが、リオが「またスイーツを作りたい」と思っているのは明らかだ。シエルは「罪は一緒に背負う。ふたりなら乗り越えられる」と説得し、リオも納得する。商店街を荒らしていたのは、エリシオが操るネンド人形だった。プリキュアの攻撃を浴びたエリシオは退散。リオは、謝罪する商店街の人々に手製のワッフルを振る舞うのだった。

▶▼本気を出したエリシオは、カードに吸収した闇のしもべたちの力を使い攻撃してくる

◀▲商店街の人々に振る舞うワッフルは、リオのさまざまな想いがつまった大切なスイーツだ

第41話 STAFF 脚本／香村純子　原画／飯飼秀一、大内照美、田中伸明、鴨居和彦、上久保聡美、星川信芳、丸山宏彦、堤舞、吉見京子、森田岳士、藤原舞、伊藤弘樹、山田菜都美、藤原未来夫、完甘美也子　背景／柳林、柳ヒロツグ、三浦智　CGディレクター／児玉徹郎　デジタルアーティスト／たかあき、池田篤史、下崎由加里、深田安莉、岡田明日菜、小林東、宮澤孝介、中谷純也　演出助手／野呂彩芳　製作進行／野本雄也　美術／柳ヒロツグ　作画監督／上野ケン　演出／角銅博之

第40話 STAFF 脚本／田中仁　原画／河野宏之、藤井孝博、永島英樹、藤原未来夫、丸山宏彦、完甘美也子　背景／デザインオフィス・メカマン、石原信明、上原里香、山口大悟郎、飯野敏典　CGディレクター／松田範雄　デジタルアーティスト／宮本美貴、海老沢大生、坪川尚史、赤瀬平、林沙樹　演出助手／朝倉舞彩　製作進行／黒澤拓世　美術／鈴木祥太　作画監督／河野宏之　演出／垣野森生

第42話 歌えWOW！あおいラストソング！

現在のバンドでの演奏はラスト 音楽活動はこれからも続ける！

あおいのバンドのリーダーが家庭の都合で脱退することになる。彼がいないとバンドは続けられない。悩むあおいを励ますために、いちかたちはパジャマパーティーを企画する。そこで「音楽を続けたい」という自分の気持ちを再確認したあおいは、新曲を作り、岬のバンドとの対バン（共演）ライブで演奏する。そこにエリシオが現れ、観客をネンド兵士に変え、バンド仲間とプリキュア5人を封印。さらにキュアジェラートの声を奪ってしまう。しかし、夢を諦めないキュアジェラートが心の中で歌い続けると、彼女を封印するケースが砕け、ほかの5人も封印から解放される。エリシオは退散し、あおいのバンドはリーダーと一緒のラストライブを再開するのだった。

▶◀▼いちかの「大好きな気持ちは消せない」という言葉が、あおいのやる気に火をつける

▼会場には、あおいの両親と水嶋も、彼女のバンドの最後の演奏を聴くために駆けつけた

▶◀手品師姿のエリシオに声を消されるキュアジェラートは、心の声で封印を破壊する！

第43話 かくし味は勇気です！ひまりの未来レシピ！

スイーツが大好きな気持ちと少しの勇気があれば前へ進める

引っ込み思案な自分を変えたいと思っていたひまりは、同級生の勧めでスイーツ番組のアシスタントオーディションに挑戦。選考する番組スタッフの前でスイーツについて熱く語るひまりだが、スタッフの反応は冷ややか。自分が変われたと思っていたひまりは大ショック。そんなひまりを闇に染めようとするエリシオは、彼女が今までに作ったスイーツのレシピを書き込んできたノートを燃やしてしまう。ひまりの心に孤独だったころの記憶が蘇るが、キュアカスタードは「スイーツが大好きな気持ちと少しの勇気があれば前へ進める」と拘束を破り、仲間と協力してエリシオを退散させる。ひまりは、自分が「スイーツと、それが好きな自分が大好き」だと再確認した。

▲ひまりは、審査員に「泡を立てるマネをするだけでいい」と言われて落ち込む

◀▲ひまりの心を闇に染めようとするエリシオは、彼女の大切なノートを燃やしてしまう

▶オーディション参加者と勘違いされたキュアカスタードは、泡を立てるマネではなく、きっちり実演した

▲映画監督姿のエリシオは、ひまりの辛い過去を映画にして観せることで彼女を苦しめる

第43話 STAFF 脚本／伊藤睦美　原画／吉森直子、細居明良、深田レナ、加地真理子、江口亮、岡村康平、小川峻太郎、仲理沙、藤田裕子、小林万理、加藤裕一、矢木正之、諏訪昌夫、佐藤絵美、近藤瑞衣、重左麟忠、阿部千恵子、村田恵泰、水野知己、古谷涼香、森亜弥子、尾鼻亮太、大森理恵、松永真原、渡邉慶子、青木香菜、昌山愛、スタジオワンパック　背景／陳明年、黄国威、田中里緑、山下千歌、飯野敏和、神戸あや恵、Toei Phils.、ネリット・アクーニャ　CGディレクター／児玉徹郎　デジタルアーティスト／たかあき、池田篤史、下﨑由加里、深田安莉、岡田明日菜、小林東、宮澤孝介、中谷純也　製作進行／綾野雄介　美術／本間禎章　作画監督／渡邉慶子　絵コンテ／やしろ賢　演出／松永真原

第42話 STAFF 脚本／吉成郁子　原画／川村敦子、板岡錦、星川信芳、完甘美也子、会津五月、藤原舞、あおいゆうき、伊藤弘樹、高橋任治、廣中美佳、藤原未来夫、山田菜都美、上久保聡美、永島英樹、北田美弥子、松田千鶴、増井直子、冨士池圭恵　背景レイアウト／詰崎博、本間薫　背景／宮本里香、猪谷暢己、藤原友美、齋藤優、石島明佳、チェン・ヤンフェイ、Toei Phils.、エルウィン・サデーア、半田いずみ、飯野敏典　CGディレクター／松田範雄　デジタルアーティスト／宮本美貴、海老沢大生、井川尚史、赤瀬平、林沙樹　演出助手／高戸谷一歩　製作進行／柿田智子　美術／戸杉奈津子　総作画監督／川村敦子　作画監督／板岡錦　演出／三上雅人

▲▶エリシオは「あなたは姉の未来を奪おうとしている」と脅迫。みくを精神的に追いつめる

雪に秘めた想い！愛をさけべ、あきら！ 第44話

お互いを気遣うあきら&みくがやさしさにつけ込まれてピンチ

あきらの将来の夢は研究者になって、みくの病気を治すこと。だが、姉の重荷になりたくないみくは猛反対。みくの想いにつけ込むエリシオは彼女をノワールの世界へ引き込んでしまう。病院から姿を消したみくを探すあきらも誘い込まれ、雪だるまに閉じ込められたみくと対面。みくの「姉を縛りつける自分はいないほうがいい」という心の闇で雪だるまが巨大化し、キュアショコラを吸収する。エリシオは「姉妹そろって闇の中で暮らしては？」と誘うが、みくの病気を治すというキュアショコラの決意は堅い。仲間と協力して、みくと共にノワールの世界から脱出。あきらは、病院に戻ったみくに、以前に約束した「いぬの雪だるま」を作ることを改めて約束した。

▲さびしさという心の闇を抱えるあきら。だが、そのさびしさこそ彼女の強さであり、愛の源

▲▶病院の近くで出張カマクラパティスリーが開店。見舞いの品はホワイトチョコのトリュフ

さよならゆかり！トキメキ☆スイーツクリスマス！ 第45話

クリスマスパーティーの挨拶でゆかりがビックリ仰天の発表！

ゆかりの発案で、キラパティでクリスマスパーティーを開催することになる。ゆかりは、マカロン作りを完璧にするため、改めてシエルに手ほどきを受ける。無数のマカロンで店内を聖夜の雪景色へと飾りつけたゆかりは、パーティーのあとの挨拶で驚きの発言をする。なんと、スイーツの勉強をするため、コンフエイト公国へ留学するというのだ。悲しいけれど、ゆかりを応援するいちかたち。そこへエリシオが現れる。単独で攻撃するキュアマカロンの「どんなに離れても心はずっと一緒にいる」という言葉どおり、プリキュアたちは心をひとつにしてエリシオを追いつめていく。戦闘に使うカードを使いきったエリシオは、ボロボロの状態でノワールの元へ戻った。

▲完璧なマカロン作りの特訓を受けるゆかり
▼夜空の部分の装飾は全部マカロンなのだ！

▼エリシオの最後のカードを使った変身も、キュアマカロンによって武器を粉砕されてしまう！

▼ゆかりが作ったマカロンは完璧でおいしいのに、いちかたちの目から涙があふれてくる

ゆかりが店内装飾した雪景色をヒントに、いちかがデコレーションしたクリスマススイーツ。

第45話 STAFF 脚本／坪田文　原画／田中仲昭、清水隆正、松田千鶴、嶋崎朝子、真中孝之、森島浩一、高橋任治、星川信芳、村上直紀、原田節子、冨士池圭恵　背景／デザインオフィス・メカマン、田中美紀、石原信明、上原里香　CGディレクター／児玉徹郎　デジタルアーティスト／たかあき、池田篤史、下崎由加里、深田安莉、岡田明日菜、小林実、宮澤孝介、中谷純也　演出助手／朝倉舞彩　製作進行／黒澤拓世　美術／鈴木祥太　作画監督／赤田信人　演出／佐々木憲世

第44話 STAFF 脚本／田中仁　原画／青山充　背景／神戸あや惠、田中里緑、牟田いずみ、飯野敏典、本間禎章、山下千歌　CGディレクター／松田範雄　デジタルアーティスト／宮本美貴、海老沢大生、坪川尚史、赤瀬平、林沙樹　演出助手／富井ななせ　製作進行／野本雄也　美術／いいだりえ　作画監督／青山充　演出／中島豊

ノワール大決戦！笑顔の消えたバースデー！ 第46話

▼ノワールの仮面の下の素顔はエリシオと同じだった。ふたりの外見の違いは毛色だけだ

▼100年前にノワールの願いをルミエルが断ったことが、現在に続く争いの発端だった

スイーツをめぐる戦いの始まりは“大好き”という想いのもつれ!?

キラパティでいちかの誕生日会が開かれる。そこにエリシオを吸収して本来の姿に戻ったノワールが現れる。ノワールは、100年前のルミエルとの戦いで体を捨て、悪意だけの存在になった。抜け殻の体にエリシオという作り物の心を与えて、闇の力を蓄えさせたのだ。そもそもノワールとルミエルが戦うことになったのは「私だけにスイーツを作れ」というノワールの願いをルミエルが断ったから。“大好き”という想いのもつれが原因だ。魂のかけらで復活したルミエルは、ノワールの笑顔を取り戻してほしいとキュアホイップたちに力と想いを託す。ところが、突如ノワールからエリシオが分離。ノワールとルミエルをカードに取り込み、空っぽの世界を誕生させた。

◀▲ノワールから分離したエリシオは、戦いを終わらせるため“想い”をなくしてしまう

アニマルスイーツ
うさぎのハートケーキ

いちか自身も制作を手伝ったケーキ。誕生日会の本番では、14本のろうそくが立てられた。

大好きをとりもどせ！キュアペコリンできあがり！ 第47話

すべての感情が消された世界でペコリンが奇跡の変身で大奮闘

空っぽの世界には「“大好き”という気持ち」がない。“大好き”から始まる怒りや憎しみといった気持ちも奪われ、人々は一切の感情をなくした。いちかたちもプリキュアであったことを忘れ、変身アニマルスイーツとクリスタルアニマルを捨ててしまう。世界が空っぽになる寸前にキュアホイップによってキラパティバッグへ入れられて無事だったペコリンと長老は、キラキラルがあふれるドーナツを食べさせて、いちかたちを元に戻そうと奮闘。ペコリンは強い想いから人間の姿になり、なんとプリキュアに変身。その姿を見たいちかたちにスイーツの思い出と感情が蘇る。“大好き”を取り戻すために変身したプリキュアたちの前に再びエリシオが現れた。

▲感情を失った人々は目の光も失い、服もキラキラルを失ったスイーツと同じ灰色だ

▶絶体絶命のペコリンだが、決して諦めない気持ちがプリキュアの変身アイテムを生んだ

アニマルスイーツ
ペコリンドーナツ

いちかたちを元に戻すために作ったもの。焼却されかけて、大量のキラキラルを放出した。

▲▶変身アニマルスイーツとクリスタルアニマルを取り戻したプリキュアたちの前にエリシオが降臨！

第47話 STAFF 脚本／大内珠帆　原画／飯島秀一、宍甘美也子、永島英樹、廣中美佳、会津五月、増井直子、大内智美、北田美莎子、清水隆正、上久保聡美、藤原未来夫、伊藤弘樹、芹田明雄、藤原勇　背景レイアウト／本間薫、鶴崎博　背景／戸杉奈津子、宮本里香、猿谷勝己、藤原友美、チェン・ヤンフェイ、Toei Phils.、ネリット・アクーニャ　CGディレクター／児玉徹郎　デジタルアーティスト／たかあき、池田篤史、下崎由加里、深田安莉、岡田明日菜、小林東、宮澤孝介、中谷純也　製作進行／柿田智子　美術／齋藤優　作画監督／稲上晃　絵コンテ／芝田浩樹　演出／古家陽子

第46話 STAFF 脚本／田中仁　原画／星川信芳、レジー・マナバット、ジュディ ゼル・バルトラソ、シーザー・デ レオ、エド マーチン・クリストモ、ボビー・テラ ペーニャ、アーノルド・デルモンテ、ノエル・アンニョヌエボ、テニス・カブラオ、レスティ・ロケ、ユージン・アイソン　背景／本間咲華、黄国威、山下千歌、飯野敏典、Toei Phils.、ネリット・アクーニャ　CGディレクター／松田範雄　デジタルアーティスト／宮本美貴、海老沢大生、坪川尚史、赤瀬平、林沙樹　演出助手／野呂彩芳　製作進行／尾沢賢太、別所秀俊　美術／田中里緑　作画監督／フランシス・カネダ、アリス・ナリオ　演出／宮元宏彰

プリキュア・ファンタスティックアニマーレ！スペシャル！

▶エリシオは、想いによって傷つけ合う人間を哀れみ、共に「無」に帰ろうとしている

アニマルスイーツ
アニマルプラネットスイーツ

キュアホイップのアイデアで、表面はさまざまなアニマル型の飾りで埋めつくされている。

▲ルミエルとノワールの力をまとって戦うエリシオは、地球を体内の無の空間へ吸収する

▶エリシオは、バラバラの生き物がつながる未来が来るのを期待して待つことにするのだった……

第48話 さいごの戦い！世界まるごとレッツ・ラ・まぜまぜ！

地球ごとすべてが消えかけて世界はプリキュアに託された

プリキュアとエリシオの攻防でキラキラルが降り注ぎ、人々に感情が戻った。"大好き"から発展した戦いを繰り返したくないエリシオは彼の体内に地球を吸収。心がないエリシオの中ではキラキラルも何もかもが「無」に帰るというのだ。だが、じつはエリシオにも心があった。ルミエルとノワール、ふたりの想いのキラキラルから彼の心が生まれていた。「人々の心は"大好き"でつながれる」と言うキュアホイップに感化されたエリシオは、彼女に未来を託す。プリキュアがすべての人のキラキラルで「アニマルプラネットスイーツ」を作ると、地球はいちかの誕生日の時に戻る。キラパティでは、騒動を覚えていない人々がいちかの誕生日会の再開を待っていた。

第49話 大好きの先へ！ホイップ・ステップ・ジャーンプ！

放っておかれた長老の身体が闇の力で巨大化して襲い来る！

1年後。それぞれの夢に向かって歩んでいくみんながそろって集まることが難しくなり、メンバー全員によるキラパティの活動を終了することになった。いちかはエリシオと約束した「世界のみんなをつなげる」という夢を抱いてはいるものの、キラパティを続けたい想いとの板挟みに苦しんでいた。そこへ、長老の魂と分離していた身体が闇の力で巨大化して現れる。いちかに夢を諦めてほしくないペコリンは、妖精たちと一緒に立ち向かう。謎のプリキュア・キュアエールの加勢で長老は元の姿に戻り、騒動は解決。みんな一緒に戦っていることを再確認したいちかは、世界へ飛び出すことを決意。長老とペコリンはキラパティバッグを贈り、いちかを送り出した。

▲数年後のキラパティのメンバー。いちかは外国でキラパティをオープン！

▲いちかは、世界に飛び出したい想いとキラパティを続けたい想いがぶつかり、どうしていいかわからない

▲『HUGっと！プリキュア』の野乃はな&はぐたんと、はなが変身するキュアエール

第49話 STAFF 脚本／田中仁　原画／井野真理恵、仲敷沙織、内田陽子、島袋奈津希、重部あい子、万怡、山内遼、西位輝実、松尾優、いとうまりこ、完甘美也子、仲條久美、馬場充子、金城美保、増井直子、神谷智大、会津五月、松田千鶴、大内智美、冨士池圭恵、Toei Phils.　背景／本間禎章、山下千歌、田中里緑、美国威、佐藤美幸、Toei Phils.、ルーベン・オレンセ　CGディレクター／児玉徹郎　デジタルアーティスト／たかあき、池田篤史、下崎由加里、深田樹莉、岡田明日菜、小林東、宮澤孝介、中谷純也　演出助手／高戸谷一歩　製作進行／野本雄也　美術／飯野敏典　作画監督／井野真理恵　演出／貝澤幸男

第48話 STAFF 脚本／田中仁　原画／河野宏之、松田千鶴、板岡錦、原田節子、藤井孝博、星川信芳、志田直俊、野津美智子、丸山匡彦、高橋任治、田中伸昭、仲條久美、斉藤拓也、森田岳士、橋本敬史、完甘美也子、会津五月、大内智美、Toei Phils.　背景／デザインオフィス・メカマン、田中美紀、石原信明、上原里香、岸田いずみ　CGディレクター／松田範雄　デジタルアーティスト／宮本美貴、海老沢大生、坪川尚史、赤瀬宇、林沙樹　演出助手／冨井ななせ　製作進行／黒澤拓哉　美術／鈴木祥太　作画監督／川村敏子　演出／暮田公平

オープニング Opening

第1話～第23話

「SHINE!! キラキラ☆プリキュアアラモード」

リズミカルな楽曲に乗せて、いちかたちの日常とプリキュアの姿が描かれていった。5話から10話までは『映画プリキュアドリームスターズ！』の、36話から39話までは『映画キラキラ☆プリキュアアラモード パリッと！想い出のミルフィーユ！』の本編映像が使用されている。

第24話～第49話

キラリンの姿は1話の時点からあったが、24話以降は変身後のキュアパルフェの姿も登場した。

Interview

【OP アーティスト】駒形友梨

『プリキュア』らしいかわいさと明るさがつまった曲

――主題歌もオーディションで決まったとうかがいました。

『GO！プリンセスプリキュア』のOPテーマ「Miracle Go！プリセスプリキュア」が課題曲でした。パワーがあってすごく難しい曲でしたが、練習をしていったのでオーディション本番では、とても楽しく歌えました。結果をマネージャーから教えてもらったときは、ちょうど体調を崩して病院に行った帰りだったんです。頭がめちゃくちゃ痛かったのも忘れて、家族に喜びを伝えたのを覚えています（笑）。

――実際にOPテーマを聴いたときの感想は？

歌詞を見なくても、メロディーだけで『プリキュア』のOPテーマだとわかるような"らしさ"があるなと感じました。女の子たちが喜んで、一緒に歌ってくれそうなかわいい曲でした。私はこれまで個人名義で歌ったことがなかったんですが、私らしさを出すよりも『キラキラ☆プリキュアアラモード』（以下『プリアラ』）の世界観に寄り添えるように表現していきたいなと思いました。なので、これまで歌ったことがないくらいかわいい感じを出していこうと思ったんです。そうしたら、音楽プロデューサーの方から「そんなにかわいくしなくていいよ」って言われたのは覚えています（笑）。私がこれまで歌ってきたキャラクターソングとはテイストが全然、違っていたので、家族や友達に聴いてもらったら「本当に友梨ちゃんが歌っているの？」とビックリしていました。キャラクターソングとは違う、作品の表現の仕方を学べた気がしています。

――ほかにレコーディングで印象的だったことは？

「プリプロ」という仮レコーディングのとき、作詞の大森祥子さんやプロデューサーの方と話し合いながら、現場で歌詞が変わっていくのが新鮮でした。ラスサビの前に隙間を作ってセリフを入れてみようという提案もあって「できあがり！」というセリフはプリプロで決まったんです。ただ、ライブなどで歌うときに最初にいただいた歌詞が頭に浮かんでしまうので、それを打ち消すのには苦労しました。

――CDのリリースイベントなどもたくさんありましたよね。ファンの方と接してみて、いかがでしたか？

小さなお子さんがたくさん来てくれるイベントは初めてだったので、すごくいい経験ができました。MCのときはわかりやすい言葉を選んだほうがいいとか、OPじゃなくて「始まりの歌」って言うんだとか……。握手会ではどう応対したらいいのかわからなくて戸惑ったのですが、一緒にイベントに参加した宮本佳那子さんは経験者だったので、宮本さんにいろいろ教えていただきました。

――『プリアラ』はOPテーマだけでなく、挿入歌に関しても印象的なものがたくさんありましたね。

いちかのお当番回である17話で流れた「勇気が君を待ってる」は、すごく熱い青春ソングで、ドラマチックな素敵な曲です。でも、この曲はキーが高くて歌うのが大変なんです。「キーを上げたい」って言ったのは自分なんですが（笑）。歌としては、強い敵が現れて苦戦しているところに使われると聞いていたので、そのシーンをイメージしながら歌いました。必死に歌う私の歌と、敵に立ち向かうプリキュアの気持ちとがリンクして響いてくれるんじゃないかなと思います。

――『映画キラキラ☆プリキュアアラモード パリッと！想い出のミルフィーユ！』のEDテーマ「トレビアンサンブル!!」では、宮本佳那子さんともデュエットをされました。

ずっと宮本さんと一緒に歌いたいと思っていたので、すごくうれしかったです。この曲は歌っているだけで、すごく楽しくなれる曲なんです。レコーディングも早く終わるくらい気持ちが乗っていて、ラジオ番組で宮本さんと一緒に生で歌えたときは、本当に感動しました。

――43話では、駒形さんがオーディション参加者のゆり役で出演されていましたね。

本人役で出演させていただいて、イラストもかわいくて、ウエストも細く描いていただいて、本当にありがとうございます。アフレコでは「もうちょっとテンションを上げてください」と言われたのが印象的で、私のふだんのテンションだと『プリキュア』の世界には低すぎるんだなって改めて感じました（笑）。

――それでは最後に、改めて主題歌アーティストとして『プリアラ』に参加した感想を教えてください。

『プリアラ』に限らず、『プリキュア』シリーズの歌は、どの曲も気持ちが明るくなるものばかりだなと思います。私はちょっと根が暗いタイプなのですが、それでも『プリキュア』の歌を聴くと自然に心が上向きになります。『プリアラ』のOPテーマを歌えて、取材やイベントなどにたくさん参加できて度胸がついたし、成長もできたと思っています。『プリアラ』を通して、いただいたたくさんの愛情を、みなさんに返していけるように頑張っていきたいです。どうかみなさん、いつまでも『プリアラ』を愛していってください。1年間ありがとうございました。

Profile 【こまがた・ゆり】8月25日生まれ。東京都出身。

「レッツ・ラ・クッキン☆ショータイム」

映像は、近年のシリーズ同様にフルCGで製作された。キュアホイップをはじめとする5人のプリキュアたちが生き生きと踊る姿を観ることができる。ソロで踊るシーンでは、背景にいちご坂の風景やお店の中の映像を盛り込み、街の雰囲気もCGで楽しめる。

Interview

【EDアーティスト】宮本佳那子

――2007年放送の『Yes！プリキュア5』で、初めてご本人のお名前でプリキュアたちと共に『プリキュア』シリーズのEDテーマを担当された宮本さん。久しぶりに『プリキュア』のEDテーマをご担当されて､いかがでしたか？

当時はプリキュアに対する憧れがすごく強かったですね。でも今回、EDテーマを歌わせていただけることになって、友達が成長していくような、そんな目線でプリキュアたちを見るようになっていた自分が新鮮でした。

――前期EDテーマ「レッツ･ラ･クッキン☆ショータイム」を歌ってみた感想はどうでしたか？

私はこれまでかわいい系の曲が多くて、ノリノリでパワフルな曲は歌ったことがなかったので、猛練習しなきゃと思いました。実際のレコーディングでは、冒頭をレガートにしたほうがいいのかスタッカートのほうがいいのかとか、サビに向かう部分はビブラートをかけたほうがいいかとか、いろいろな相談をしながら歌ったんです。こういう技術的な話は『Yes！プリキュア5』のころにはできなかったことだったので、自分自身の成長を感じることができました。とにかく音楽が求めることを表現したいと思っていたので、レコーディングでは曲の盛り上がりや、聴いてもらいたい歌詞をきちんと伝えられるようにするなど、いろいろなことを考えながら歌いました。

――「レッツ・ラ・クッキン☆ショータイム」は、歌詞における言葉遊びが多彩で面白いですよね。

「スイーツーワン」みたいなダジャレっぽいワードも入っていて、すごく楽しい曲ですよね。ED映像でもプリキュアのみんなが踊るので、泡立て器を持ったような振り付けも楽しかったです。

――後期EDテーマ「シュビドゥビ☆スイーツタイム」は、歌ってみていかがでしたか？

ラップ調のメロディーがあったり、キャラクターの名前が入っていたりと、こちらもすごく面白い曲だなと感じました。自分ではあまり歌ったことのない曲調でもあって、大きな挑戦をさせてもらっていたと思います。私は小学生のころから「歌詞が聞こえるように歌う」ということを重視している先生に歌を習ってきたので、ここまで言葉がつめ込まれた歌を、歌詞をわかりやすく歌うにはどうしたらいいんだろうと、こちらの曲でも試行錯誤がありました。キーが私にとっては低かったので、レコーディング当日に全音上げてもらったのもよく覚えています。でも、レコーディングが終わっても実際に歌うときはどうしたらいいのか、わけがわからなくなっていたんですが（笑）、イベントなど実際にステージで歌ってみたら、お客さんのコール＆レスポンスがすごく盛り上がって、だんだんとこの曲の楽しみ方がわかりました。

――OPテーマを歌った駒形友梨さんは、イベントなどでの振る舞いは、宮本さんをお手本にしたと言っていました。

またまたー（笑）。友梨ちゃんとは以前からお付き合いがあって、できる子なのを知っているので何も問題はなかったと思います。私は友梨ちゃんの歌を舞台袖で緊張しながら聴いているのが、すごく好きだったんです。一緒に戦っているような気持ちになれて、すごく心強かったです。遠方のイベントに参加したときは、一緒にお風呂に入ったりしたのもなつかしいです。

――そんな駒形さんとは、『映画キラキラ☆プリキュアアラモード パリッと！想い出のミルフィーユ！』のEDテーマ「トレビアンサンブル!!」でデュエットをしましたね。

この曲は私が先にレコーディングをしたので、どういうテンションで歌おうか、どういう表現をしようか、声が合わさったらどんな仕上がりになるのかを模索しながら歌った記憶があります。実際に聴いてみると"友梨ちゃんがこう歌うなら私もこう歌いたかった"みたいな想いもわいてきましたが、それでもすごく素敵な機会をいただけたと思っています。1回ラジオで声を合わせて歌うことができたのが、本当にうれしかったです。

――これまで数々の『プリキュア』のテーマソングを歌ってきた宮本さんが考える､『プリキュア』の歌の魅力とは？

まっすぐなパワーがあることです。アニメソングって、何かしら伝えたい想いがあって作られていることが多いと思うんです。すごくメッセージ性が強くて、大事なことをストレートに表現していて、自分でも歌詞のワードを引用したくなることもたくさんあります。それから、明るくて楽しい。『プリキュア』を愛する人たちが『プリキュア』のために作っている、それが素敵だと思います。

――では最後に、読者にメッセージをお願いします。

久しぶりに大好きな『プリキュア』の歌を歌えて、本当にうれしかったです。いろんな場所で行えたイベントで、素敵な思い出がたくさんできた1年でした。『プリキュア』は1年で代が替わりますが、この『プリアラ』もほかのシリーズと同様に永遠に不滅ですから､これからもずっと『プリアラ』を愛して、大好きでいてくれたらうれしいです。

Profile【みやもと・かなこ】11月4日生まれ。茨城県出身。

エンディング Ending 第23話〜第49話

「シュビドゥビ☆スイーツタイム」

後期のED映像にはキュアパルフェも登場。前期ED映像が昼ならば、後期ED映像は夜といったイメージである。37話と38話は映画『パリッと！想い出のミルフィーユ！』の本編映像と同作のEDテーマ「トレビアンサンプル!!」を使用した。

アイキャッチ Eye Catch

番組のAパートとBパートの間に挿入されるアイキャッチは、全部で3種類。いちかとペコリンが歯磨きをしたり、ドーナツを食べたり、5人とペコリンでサンドイッチを作って食べたりする、コミカルでキュートな映像だった。

Interview

【EDテーマ振り付け】

振付稼業 air:man

みんなが踊りたくなる振り付けを心がけました

──『プリキュア』の振り付けを担当する際に、どういった点を心がけましたか？　ほかのアーティストと『プリキュア』とで振り付けを考える際に違った点はありますか？

毎週、観ても飽きないように、少しハードルを上げつつも、みんなが踊りたくなる振り付けを心がけて、振り付けさせていただきました。ほかのアーティストと異なる点は「じつはないです！」が答えになってしまいます。たくさんの方々に観ていただけるように、毎回、曲のイメージやキャラクター、もしくはアーティストの方のイメージを考えつつ振り付けているため、『プリキュア』もほかのアーティストの方も同じです。

──前期EDテーマ「レッツ・ラ・クッキン☆ショータイム」、後期EDテーマ「シュビドゥビ☆スイーツタイム」における、それぞれの振り付けのポイントをお聞かせください。

前期EDテーマ「レッツ・ラ・クッキン☆ショータイム」は、冒頭のお尻をキュートかつかっこよく振るところと、頭の上に腕でハートを作るところがポイント。後期EDテーマ「シュビドゥビ☆スイーツタイム」は、それぞれのキャラクターの個性を活かした振り付けが盛りだくさんなのがポイント。

──また、前期と後期のそれぞれのダンスを踊る際のコツなどがありましたら、ぜひ教えてください。

前期は、歌詞をしっかりと取り入れた振り付けになっているので、歌詞を覚えて元気よく踊ってみてください。後期は、それぞれのキャラクターになりきって、かわいく踊ったり、かっこよく踊ったりと、キャラクターを想像して踊ってみてください。

Profile 「動くものならなんでも振り付けます！」という業界初の振り付けユニット。CMなど多数の振り付けを担当する。

Movie Guide

『キラキラ☆プリキュアアラモード』の映画での活躍をチェックしよう！

それぞれの個性を活かし、映画でも大活躍を見せてくれた『キラキラ☆プリキュアアラモード』。彼女たちの2017年春、秋映画での活動や最新映画での新しいプリキュアとの出会いを確認してみよう。

▲シズクは身を挺して鴉天狗からサクラを守ろうとする

2017年3月18日に公開された『映画プリキュアドリームスターズ！』は、歴代のプリキュアが勢ぞろいした『プリキュアオールスターズ』シリーズから大きなリニューアルがほどこされて、『キラキラ☆プリキュアアラモード』を含めた3世代のプリキュアの共演となった。

ある日、夢のなかで謎の少女と出会った女子中学生・宇佐美いちかは、その女の子・サクラと現実世界で遭遇。「世界中のキレイなもの」を狙う鴉天狗に襲われて、大切な友達の狐・シズクと離ればなれになってしまったというサクラのために、一緒にシズクを探すことになるのだ。その途中で『Go！プリンセスプリキュア』『魔法つかいプリキュア！』たちと出会い、シズクを助け出し、鴉天狗をこらしめるために協力していく……。

本作はCGがふんだんに使われており、セルとCGとがマッチした不思議な映像美を堪能できる。世代を超えたプリキュア同士のやりとりも楽しく、全員に見せ場が設けられており、新たな『プリキュア』映画の始まりにふさわしい作品に仕上がっている。この映画を観れば、友達の大切さや、力を合わせることの素晴らしさを改めて感じることができるだろう。

▲鴉天狗の手下である赤狗、黄狗に襲われかけたサクラの前に、キュアホイップが現れる

▲キュアカスタードたち4人も、全力でキュアホイップをサポートする

◀プリキュアたちは、自分たちがかつて戦った敵と対峙することになるが……!?

▲どんなに困難な戦いでも、プリキュアたちは絶対に負けない！

▲巨大な敵に、プリキュア全員で立ち向かっていく

http://www.precure-dreamstars.com/
● 2017年3月18日公開
■STAFF　原作／東堂いづみ　監督・キャラクターデザイン／宮本浩史　脚本／坪田文
オリジナルキャラクターデザイン／中谷友紀子、宮本絵美子、井野真理恵
総作画監督／中谷友紀子　演出／佐藤宏幸、村上貴之　美術監督／倉橋隆　音楽／林ゆうき
CGディレクター／鄭載薫　CGアニメーションスーパーバイザー／金井弘樹
色彩設計／澤田豊二　撮影監督／中村俊介、高橋賢司　製作担当／澤守洸
CGプロデューサー／野島淳志　アニメーション制作／東映アニメーション
OPテーマ／北川理恵「桜MISSION ～プリキュアリレーション～」
EDテーマ／木村佳乃「君を呼ぶ場所」
■CAST　宇佐美いちか（キュアホイップ）／美山加恋
有栖川ひまり（キュアカスタード）／福原遥　立神あおい（キュアジェラート）／村中知
琴爪ゆかり（キュアマカロン）／藤田咲　剣城あきら（キュアショコラ）／森なな子
ペコリン／かないみか　朝日奈みらい（キュアミラクル）／高橋李依
十六夜リコ（キュアマジカル）／堀江由衣　花海ことは（キュアフェリーチェ）／早見沙織
モフルン／齋藤彩夏　春野はるか（キュアフローラ）／嶋村侑
海藤みなみ（キュアマーメイド）／浅野真澄　天ノ川きらら（キュアトゥインクル）／山村響
紅城トワ（キュアスカーレット）／沢城みゆき　パフ／東山奈央　アロマ／古城門志帆
サクラ／阿澄佳奈　シズク／木村佳乃　鴉天狗／山里亮太（南海キャンディーズ）
赤狗、黄狗／関町知弘、田所仁（ライス）　ほか

TVシリーズの途中からプリキュアの仲間入りをしたキラ星シエルにとっては映画初登場となった本作。かつてパリでスイーツ修業をしていたというシエルにスポットを当てて、天才パティシエと呼ばれるシエルの過去に何があったのかをていねいに描いていくエピソードだった。

いちかたちキラパティのメンバーは、「世界スイーツコンテスト」に出場するために開催地のパリへと向かう。ところが、天才パティシエのはずのシエルがスランプに陥ってしまい、スイーツ作りは失敗の連続。そればかりか、プリキュアに変身しようとしてもうまくいかず、衣装はキュアパルフェなのに、体はキラリン……といった状態になってしまう。シエルはそんな苦境にもめげずに、スイーツ作りの師匠であるジャン=ピエール・ジルベルスタインと共に作った、想い出のミルフィーユを再現しようとするのだが、お化けの少女・クックの力によって街にスイーツモンスターが出現する――。

TVシリーズ登場時には、自分の実力に絶対的な誇りを持っていたシエルだが、いちかと出会い、交流したことで、想いをこめてスイーツを作ることの大切さを知った。本作では、そんなシエルがジャン=ピエールにその想いを訴えるシーンもあり、シエルといちかたちの絆を感じることもできた。スイーツ作りができずに落ち込むシエルを励ましたいちかたちと、それに応えて奮闘したシエル。誰かを大切に想うことの素晴らしさを、本作から感じ取ることができるに違いない。

▲見知らぬパリに行っても、キラパティのメンバーと一緒だから安心

▶プリキュアたちはクックの力によって、ふだんとは違うアニマルに変身させられてしまう

▶プリキュアたちはクックの魂を救うため、スーパープリキュアになって戦っていく!

http://www.precure-movie.com/
●2017年10月28日公開
■STAFF　原作／東堂いづみ　監督／土田豊　脚本／村山功
キャラクターデザイン・総作画監督／爲我井克美　作画監督／大田和寛　音楽／林ゆうき
美術監督／倉橋隆　色彩設計／竹澤聡　撮影監督／高橋賢司　製作担当／澤守洸
アニメーション制作／東映アニメーション
OPテーマ／駒形友梨「SHINE!! キラキラ☆プリキュアアラモード」
EDテーマ／駒形友梨&宮本佳那子「トレビアンサンブル!!」
挿入歌／キュアホイップ、キュアカスタード、キュアジェラート、
キュアマカロン、キュアショコラ、キュアパルフェ「メモワール・ミルフィーユ」
■CAST　宇佐美いちか(キュアホイップ)／美山加恋
有栖川ひまり(キュアカスタード)／福原遥　立神あおい(キュアジェラート)／村中知
琴爪ゆかり(キュアマカロン)／藤田咲　剣城あきら(キュアショコラ)／森なな子
キラ星シエル(キュアパルフェ、キラリン)／水瀬いのり
ペコリン／かないみか　クック／悠木碧
ジャン=ピエール・ジルベルスタイン／尾上松也　ほか

▼いちかの左がジャン=ピエール。その左のクックは、元パティシエのお化けの少女だ

12人のプリキュアたちがウソから世界を守る！

▲ウソバーッカは、自分の目的の遂行を邪魔する相手をウソで翻弄する

▲台車ごと転げそうになるはなのピンチを、いちかたちが救う！

▲今回もミラクルライトは健在。劇場で振って、プリキュアを応援しよう

©2018 映画プリキュアスーパースターズ！製作委員会
http://www.precure-superstars.com/

映画プリキュアスーパースターズ！ SUPER STARS

●2018年3月17日公開
■STAFF　原作／東堂いづみ　監督／池田洋子　脚本／米村正二
オリジナルキャラクターデザイン／宮本絵美子、井野真理恵、川村敏江
キャラクターデザイン・総作画監督／香川久　作画監督／爲我井克美、小松こずえ　音楽／林ゆうき　美術監督／渡辺佳人
色彩設計／竹澤聡　撮影監督／五十嵐慎一
アニメーション制作／東映アニメーション
OPテーマ／北川理恵「明日笑顔になあれ！」
EDテーマ／宮本佳那子「七色の世界」
■CAST　野乃はな（キュアエール）／引坂理絵
薬師寺さあや（キュアアンジュ）／本泉莉奈
輝木ほまれ（キュアエトワール）／小倉唯　はぐたん／多田このみ
ハリハム・ハリー／野田順子　宇佐美いちか（キュアホイップ）／美山加恋
有栖川ひまり（キュアカスタード）／福原遥
立神あおい（キュアジェラート）／村中知　琴爪ゆかり（キュアマカロン）／藤田咲
剣城あきら（キュアショコラ）／森なな子　キラ星シエル（キュアパルフェ）／水瀬いのり
ペコリン／かないみか　朝日奈みらい（キュアミラクル）／高橋李依
十六夜リコ（キュアマジカル）／堀江由衣
花海ことは（キュアフェリーチェ）／早見沙織　モフルン／齋藤彩夏　ほか

▼はなは戦いの最中に、幼いころに出会った少年・クローバーとの約束を思い出す

昨年の『映画プリキュアドリームスターズ！』に続き、3世代のプリキュアが登場する新作『映画プリキュアスーパースターズ！』。現在放送中である『HUGっと！プリキュア』と、『魔法つかいプリキュア！』『キラキラ☆プリキュアアラモード』の合計12人のプリキュアたちが登場する豪華な1作となっている。

『HUGっと！プリキュア』の主人公・野乃はなは、ある日、自分のもとにやってきた謎の赤ちゃん・はぐたんを連れてお花畑デビューをしようとしていた。ところが突然、怪物・ウソバーッカが現れ、世界中をウソばかりにしようと暴れ回る。はなはキュアエールに変身してウソバーッカと戦うが、戦いの最中に、一緒にプリキュアとして戦っている薬師寺さあや&輝木ほまれと離ればなれになってしまう。敵がほかのプリキュアを狙っていると知り、以前に出会ったことのあるキュアホイップたちのことを思い出したはなは、キュアホイップたちを探しに行くのだが……。はなと再会したいちかたちが、大っぴらに「プリキュアだ」と宣言できないため、困惑する姿が面白い。その後、はなたちは『魔法つかいプリキュア！』のプリキュアたちとも出会うことになるのだが、その出会いのシーンにも注目だ。『プリアラ』TVシリーズの49話で描かれたいちかとはなの出会いをきっかけに話が展開していく本作。これまで別世界として描かれてきた各シリーズが、より強くつながって描かれており、新たな「プリキュア」ワールドを堪能できる作品だ。

いちかが生まれたことを喜んでくれてうれしかった

試行錯誤しながら表現した〝いちかの声〟

――1年間、お疲れさまでした！　まずは『キラキラ☆プリキュアアラモード』（以下『プリアラ』）の放送が終わったあとの率直な感想を教えてください。

　ずっと終わるという意識がなくて、アフレコ中は永遠に続きそうな気がしていました。でも『プリキュア』の放送は1年と決まっているので、やっぱり終わるんだなってさびしくなっています。ただ『プリキュア』というシリーズが続くかぎり、私たちもプリキュアでいられるので、今は『HUGっと！プリキュア』のみなさんに頑張ってほしいという想いでいっぱいです。

――プリキュア役は毎年オーディションで決まっていますが、オーディションではいちか／キュアホイップ（以下「ホイップ」）役以外にも受けられましたか？

　ちょっと記憶が曖昧ですが、ひまり／キュアカスタード（以下「カスタード」）とあおい／キュアジェラート（以下「ジェラート」）、それからキラリンも受けたと思います。オーディションのときは、いちか／ホイップはうさぎがモチーフということもあり、ピンクが基調ですごくかわいい女の子だなと思っていたんです。私は声質が低いほうなので、いちか／ホイップはイメージと違うだろうなと。見た目に合わせて、かわいい声を作っていったら「ふだんのままで演じてみてください」と言われたので、これは終わったなと思っていましたから、いちか／ホイップに決まったと連絡があったときは、とにかく驚きました。

――実際にアフレコが始まって、いちかへの印象は変わりましたか？

　キャラクター表（設定）で見ていたときは、かわいくて元気にあふれていて、みんなから愛される王道のヒロインだと思っていたんです。でも、お話が進んでいくと、みんなからツッコミを入れられるほどに、ものすごくボケが多かったですね（笑）。そういう部分が見えてきて、私としては演じやすくなりました。その一方で、いちかはすごく考える子だし、我慢強くて、変に大人になっちゃっている子だなとも感じました。

――そんないちかについて共感できるところはありましたか？

　かなりありました。いちかはお母さんが家にいないぶん、ひとりでさびしさを我慢して明るく頑張ってきたんだと思うんです。私も子どものころからお仕事をさせていただいていることもあって、大人の方と接する機会も多く「すごく落ち着いているし大人だね」と言われることも多いんですね。でも自分のなかで我慢していることもあるし、いっぱいいっぱいになることもある。一生懸命頑張っているいちかには、すごく共感できました。

――いちかを演じるにあたっては、どんなことを心がけましたか？

　じつは、最初の玩具の声を録ったときや、アフレコが始まってしばらくの間は、「声優歴も浅い自分が主役に選んでもらえた理由はなんだろう」って、ずっと考えていました。最初のころは、ホイップに近づきたくて声をかわいく作っていたら、音響の方に「福原遥ちゃんと声が似ている」って言われたんですね。もともと私は本番になると緊張してしまって弱気になるのでカスタードに似ていて、はるちゃん（福原遥）は本番に強いタイプなのでホイップに似ていたんです。意識はしていなかったけど、はるちゃんの性格をマネようとした結果、カスタードに似ちゃったんだろうなと。私自身は声優という職業は、キャラクターらしい声を考えて出すのが大事だと思っていたんですが、水島裕さんから「声優はキャラクターの魅力を伝えることがお仕事で、キャラクターっぽい声を出すんじゃなくて、キャラクターの心でお芝居をしなきゃ」とアドバイスをいただいて。ほかにも、スタッフの方から「声をわざと作らずに、美山加恋ができるキュアホイップをやってほしい。それができるから選んだんです」と言っていただけて、私はいちかの見た目を表現するのではなくて、いろいろ抱えている心の中を表現するために選んでもらえたのかなって思えるようになりました。だから、なるべく声を作らずに臨んだつもりです。

プレッシャーがあった座長としての立場

――『プリキュア』シリーズは、長きにわたって人気の作品です。その最新シリーズの主役に決まったとき、実際にプレッシャーは感じましたか？

　決まったときは「イエ～イ！」という感じでした（笑）。ただ、その1週間後くらいには玩具の声録りがあると聞いたときは「えっ!?」とただ驚いて。脚本も何もない状態で声を録らなきゃいけないんだ……と。それから2017年春に公開された『映画プリキュアドリームスターズ！』（以下『ドリームスターズ！』）のCGパートのプレスコ（セリフを先行して収録する手法）をするということで、どうやればいいのかという戸惑いが生まれました。人気のシリーズであるというプレッシャーよりも、今までのアフレコとは全然違ったスタートをすることに慌てていました。しかも、いちか／ホイップは『プリアラ』の座長であり、みんなを引っ張っていく存在なのに、私がこんなことで大丈夫なのかな……学生時代に学級委員くらいはやっておけばよかったな……って思いました（笑）。

――シリーズに対するプレッシャーというよりも、座長を務めるということでの緊張感のほうが強かった感じですか？

　緊張……していたのかなぁ……。はるちゃんは私の高校の後輩で、お互いに子

役出身でもあるので、すごく親近感があって。また、かないみかさんとは以前から知り合いで、舞台を観に来てくださったこともあったので、安心感はありました。みんなも「加恋が座長だから」「座長の意見を尊重するから」って、いつも私の意見を聞いてくれていたからこそ座長になれたんだろうなと思っています。それから、『ドリームスターズ！』のときに『魔法つかいプリキュア！』の朝日奈みらい／キュアミラクル役の高橋李依さんに『プリキュア』の主役についてうかがうことができましたし、『Go！プリンセスプリキュア』の春野はるか／キュアフローラ役の嶋村侑さんともごはんに行ったときにお話ができたんですね。でも、ふたりとも全然意見が違って、作品が違えばチームの雰囲気も違うし、やり方も違うんだと学ぶことができました。本当に、周りの方がいてくださったおかげで、座長として1年間やれたんだと思っています。

——1年間のシリーズを通して、とくに印象的だったエピソードは？

1話でケーキをガミーに奪われそうになったときに一度、諦めちゃったいちかは、49話まで終わってみると、すごく新鮮ですね。あれはプリキュアになる前のいちかだからこそのエピソードだと思います。どんどんお母さんとの記憶を思い出して、「〝大好き〟をお母さんに伝えたい」と自覚してプリキュアになっていく姿も、すごく好きです。それから、48話も好きです。「〝大好き〟はいっぱいあるから、たくさんすれ違ったり、衝突したりすることもある……でも違う〝大好き〟でつながれる」っていうセリフがあるんです。〝大好き〟という気持ちがあるから、バラバラでもつながることができるというのは『プリアラ』のテーマでもあるので、1年間いちかが見てきた世界を改めて感じることができました。あと、48話の収録がちょうど私の誕生日のころで。話のラストで大勢のキャラクターが「いちかちゃん、お誕生日おめでとう」と言うのですが、それをサプライズでキャストのみなさんが「加恋、誕生日おめでとう」と言ってくれたんです。本当にうれしくて、そういう意味でも印象深いエピソードでした。それから、11話の「いちご坂スイーツフェスティバル」で、お父さんがケーキを守って必死に戦ってくれる姿を見て「ちゃんと大好きだよ」って素直な気持ちを言えるいちかもいいし、31話でお母さんが家に帰ってきたときに、初めてお母さんの前で泣けたところも好きです。お母さんが言ってくれた「私が笑顔でいれば、みんなも笑ってくれる」という言葉をずっと守って頑張ってきていた姿も素敵だし、その週のアフレコが終わったあとは想いを吐き出せて、次週からのアフレコが清々しくなったのを覚えています（笑）。

いちかには「ありがとう」と伝えたい……

——ほかのキャラクターへの印象は？

ひまりん（ひまり）は、一番ブレていない子だと思います。最初から頑張りやさんだし、自分を成長させたいと思っていた。お当番回のたびに一歩ずつ階段をのぼって、自分自身で成長をしていった、強い子だなと思います。あおちゃん（あおい）は、すごく繊細な子だなという印象ですね。ボーイッシュだけれど、女の子らしいかわいらしさもあって。それから叫ぶ、吠えるシーンがすごくかっこいい！　熱さはあるけど冷静で、1年通して一番かっこよかったです。ゆかりさんは、一番面白い人。自分のことばっかり考えているし、ひとりで生きていけるとか言っておきながら、周りに助けを求めちゃうところは『構ってほしいんじゃん』っていじりたくなります（笑）。プリキュアでありながらウソをつくというのも、すごく新しいなと思っていました。あきらさんは、長女だからこそ抱え込むこともあるし、責任感が強いんですよね。周りに合わせるタイプだから、ゆかりさんからも「あなたはどう思っているの？」ってツッコまれるし。やさしすぎるし、天然だし……。〝天然人たらし〟ですよね。どこか一歩踏み込めないオーラがあるところも不思議な存在だなと思っていました。シエルは、パティシエの経験値が高くて、プロ意識も強い。でも、普通の女の子として見ると、ピカリオとの姉弟のやりとりがすごくかわいい。23話でピカリオの苦しみを知って「パティシエの夢を捨てる。プリキュアも目指さない」って宣言しちゃうのは、すごくピュアな心の表れなんだなと思っています。ピカリオがいるからシエルは頑張れるし、ふたりはひとつだなと思ったので、シエルを褒めるときはピカリオも褒めたいです。

——プリキュアたちと一緒に頑張ってきたペコリンにも、ひと言お願いします。

「プリキュアになるという夢がかなったね！　おめでとう!!」。ペコリンもいちかたちをずっと見てきて、誰かのために戦うとか、大好きなものは心の中にあるとか、そういうことが自然と身についていったのかなと思います。プリキュアたちが過ごしてきた1年間を、しっかりと受けとめてくれた存在だったんだなと思うと、ものすごく大切な存在ですね。スイーツ作りもひそかに上手になったし、誰かの役に立ちたいという想いを人間の姿になっても持っていてくれて、本当にいい子に育ったなと感じています。

——最終話を終えた今、いちか／ホイップに声をかけてあげるとしたら、なんと言ってあげたいですか？

う〜ん……難しいですね。いちかは完璧だからなぁ。この1年間、いちかにいっぱい元気づけられてきたし、いろいろなことをいっぱい教えてもらいました。だから何か言うとしたら「ありがとう」だけですね。

——では最後に、1年間『プリアラ』を応援してくれたファンに向けて、メッセージをお願いします。

『プリアラ』はイベントやライブがたくさんあって、直接お会いできて、応援してくれる方が本当にいるんだと思えたことが勇気になりました。1年間「来週も頑張ろう」とか「今日は1日楽しく過ごせる気がする」とか、そんなことを思うきっかけになっていたら本当にうれしいです。声優歴の浅い私がいちかをやることに驚いた方も多いと思いますが、「いちかを演じてくれてありがとう」といったお声もたくさんいただけて、そして何より、みなさんがいちか自身を愛してくれたこと、いちかが生まれたのを喜んでくれたことが本当に幸せでした。悩んだときはプリキュアたちのことを思い出して、それがみなさんの元気や〝大好き〟の源になってくれたらいいなと思います。応援ありがとうございました！

美山加恋から プリキュアのみんなへ

福原遥さま

はるちゃんがいて本当に心強かったです。はるちゃんはアフレコが終わるたびに「あのシーンがめっちゃいい！」って逐一、感想をくれて、純粋に私と一緒にいることを喜んでくれて、楽しんでくれて、それが本当にありがたかった。私も現場にはるちゃんがいるだけですごく励まされたし、はるちゃんがお仕事を楽しく頑張っている姿を見て、私も楽しもうと思えました。はるちゃん、本当にありがとう！

村中知さま

知ちゃんのことは、本当にリスペクトしています。知ちゃんのお芝居は、キャラクターによって本当に変わるんです。あおちゃんになったときの、心の訴えのお芝居が、すごく心に響きました。知ちゃんのお芝居を見て、声を出すときの表現、叫び、想いの乗せ方を学ばせてもらいました。その一方で、プライベートでは社交的で、みんなの個性を引き出してくれたと思います。

藤田咲さま

咲さんは現場のことも、役のことも、ひとつひとつ考えてくれて、最初に「加恋が座長だから」って言ってくれて、そのおかげで私はいろいろなことにチャレンジできたし、真ん中にいていいんだと思えました。『ドリームスターズ！』の試写会のあと「加恋がホイップでよかった」って泣きながら言ってくれた言葉で、1年頑張れました。近くにいてくれて、ありがとうございます！

森なな子さま

なな子さんは、意外とトラブルメーカーでした（笑）。でも、みんなを包み込んでくれるやさしさがあって、さりげなく先輩後輩のしきたりなどもきちんと教えてくださって、現場での過ごし方を学びました。かっこいいけど、すごく繊細で、周りのことを気にかけてくれて……。咲さんの〝嫁〟なので、私がなな子さんをあんまり褒めるのもなんですが（笑）、すごく素敵な憧れの女性です。みんなのことを考えてくれて、ありがとうございます。

水瀬いのりさま

いのりちゃんのことは、もともと声優さんとしても大好きで、歌も上手だし、完璧な人だと思っていました。実際に会ってもやっぱり完璧で、お芝居もなんでもできちゃうんですよね。お姉さん的な部分が多くて、すごく頼らせてもらいました。6人の意見をさらっとまとめられるのも、いのりちゃんだからこそ。その一方で、ギャグが秀逸でした（笑）。いつもアフレコ現場を盛り上げてくれて、本当にありがたかったです。

福原遥

Profile

【ふくはら・はるか】8月28日生まれ。埼玉県出身。主なアニメの出演作品は「恋は雨上がりのように」（西田ユイ役）、「なめこ～せかいのともだち～」（なめこ役）など。ラジオ「福原遥のVOICEステーション～フクステ～」などにも出演。声優にとどまらず、女優としてドラマなどでも活躍中。

キュアカスタード★有栖川ひまり

放送が終わっても忘れてほしくない存在です

声優としての憧れだった「プリキュア」

――1年間の放送が終わって、今の率直な感想を教えてください。

終わった実感が全然ないんです。お正月で放送がお休みだったときの感覚が続いているような感じです。もともと私は、さびしくなるのがほかの人よりも遅い傾向があるので、きっとだいぶ時間が経ったら落ち込むんだろうなと思っています。

――オーディションのときの思い出は？

オーディションを受けられるというお話をいただいたときに、まず「受けていいの!?」という驚きがありました。私は『ふたりはプリキュア』を観て育ったし、子どものころは七夕の短冊に『プリキュアになりたい』って書いたこともあるんです。「そんな小さなころの夢が、こんなに近くにあるのか」って、受けられるだけで夢のように幸せでした。オーディションでは、受けさせていただける役は全部受けたのですが、あまりにも緊張しすぎて頭が真っ白になっていて、当時のひまり／カスタードへの印象も「すごくおとなしくて、かわいい子」くらいしかありませんでした。

――子どものころから憧れていたプリキュアになれると決まったときの喜びは、すごいものだったんでしょうね。

「本当ですか!?」って驚き続けていた気がします。「決まった」と連絡をいただいたあとに、すぐ玩具の声録りがあったのですが、そのときもまだ実感がなかったですね。声優を始めて間がなかったので、『プリキュア』は私がこれから憧れる、目指す場所なんだと思っていたんです。それなのに、こんなにすぐなっていいのかなって、ずっと夢を見ている気持ちでした。やるからには全力でやりたいと思っていましたが、とにかく実感がわくまで時間がかかりました。

――ちなみに、「本当にプリキュアになったんだ」と実感したのは、いつごろだったのでしょうか？

放送を観てからです。放送前にアフレコは始まっていますが、放送が始まるまでは無我夢中でした。オンエアでひまり／カスタードから私の声が出ているのを観て聴いて、「本当にプリキュアになってる！」と感じることができました。

――放送が始まってからは、ひまりにどんな印象を持ちましたか？

おとなしくて、自分に自信がなくて、殻を破れない子だなという印象です。演じるにあたっては、自信がない感じを出していけたらと考えていました。でも、あんまり「ひまりはこういう子だから、こういう声にしよう」とは固めなかったんです。物語を経てひまりも成長していくだろうし、自分も一緒に成長していけるようにできたらいいなと思っていました。でも、スイーツに対して語るときはすごく熱くなるので、そこはふだんと変えたいなと思って演じていました。

――スタッフの方からの指示で、記憶に残っていることはありますか？

最初のころ、私がアドリブでちょっとだけぶっ飛んだような、おとなしくない息づかいを入れたことがあるんです。でも、「それはちょっと違うかな」とスタッフの方から指示をいただいたのは、すごくよく覚えています。今、振り返ると放送当初はこんなぶっ飛んだことはできなかったですが、49話まで終わってのひまりだったらOKだったかもしれません。

――演じていくうちに、ひまりのどんなところがとくに変わったと思いますか？

最初はスイーツについて語れない、語っちゃダメだと思っていたのが、仲間と出会って殻が破れて、スイーツについて力説できるようになったところは大きな変化ですよね。話していくうちにどんどん元気になっていくので、自分でもこれでいいのかなとか、どのくらいやっていいのかなとか考えながら、でも楽しく演じさせてもらえました。最初のころは行きすぎていないか心配でしたが、話が進むにつれてギャグ顔をするようにもなったので、私個人としても楽しく、声をセーブせずに演じようと思っていました。

――そのくらい思い入れがあると、43話でひまりのスイーツノートがなくなったときはショックだったのでは？

悲しかったです！　あんなに大事にしていたものがなくなってしまって……。あのときは、演者というよりは、ひまりの親みたいな目線になってしまいました（笑）。でも、なくなったからこそ、新しいひまりになれるんだなと。

アフレコ現場はスイーツがいっぱい

――「プリキュア」は変身の掛け声や決め技など、ほかのキャストと声を合わせる場面も多いですよね。

最初は不安しかなくて、過去の作品を観て勉強もしたんですが、それでも不安でいっぱいでした。でも、時間が経つにつれて、舞台挨拶などでみんなで決めゼリフの声を合わせることが増えて、次第に慣れていきました。無音のなかで息を合わせるところは何回やっても鳥肌が立つんです。これは、『プリキュア』ならではだなと思っています。

――ほかのキャラクターについての印象を教えてください。

いちかちゃんは、みんなをまとめようとしていないのに自然とまとめられるところが素敵です。自然と場を盛り上げて、みんなの心をひとつにできるし、何もしなくても周りに自然と人が集まってくるところもさすがだなと思います。あおいちゃんは……すごくみんなの心を見ているイメージ。「空気が読める」というとちょっとニュアンスが違うかもしれませんが、人の感情の機微に敏感な子なんだなという印象です。ゆかりさんは親です（笑）。ひょうひょうとしているように見えて、ちゃんと支えてくれてありがとうって伝えたくなります。ペコリンのこともめちゃくちゃかわいがっているところがいいなって思います。あきらさんは、まっすぐ。愛が直接伝わってくる人です。

――ゆかりの愛が曲がってくるとしたら、あきらはストレートですよね。

そうなんです。ドーンとくるから安心できるんだろうなと思います。あきらさんは愛にあふれた人なので、その愛に触れて、みんながほのぼのできるんだと思います。シエルさんは、みんなに刺激をくれる存在であり、憧れの存在でもあります。いつも先頭に立ってくれて、みんなの「頑張ろう」という気持ちを奮い立たせてくれる。すごくかっこいいです。

――みんなを支えてくれた妖精たちへの印象はいかがですか？

ただただかわいかったです（笑）。か

わいくて「いつも癒しをありがとう」という気持ちでいっぱいです。

——ペコリンがプリキュアになるという驚きのエピソードもありました。

もともと噂では聞いていたんですが、「本当になるよ」と聞いたときは、やっぱり驚きました。実際にプリキュアになったペコリンのイラストを見せていただいたら、かわいさもあどけなさもあって、すごく素敵で。じつはアフレコ現場では「リオくんがなるんじゃ？」なんていう噂もあったんです（笑）。みんながそれだけ次の話を楽しみにしていたということがわかりますよね。

——シリーズを通して印象的だったエピソードを教えてください。

13話で、ひまりがいちご坂商店街のPR動画のレポーターになる回が好きです。辛いお話も胸にグッとくるんですけど、このお話は楽しさが伝わってきて、ホッとして観ていられる回でもあって。人前に出るのが苦手で自信がなかったひまりが、人前に出る楽しさを知って、みんなからの応援で自信を持てたというところが素敵だなと思いました。

——それでは、アフレコ現場で印象的だった出来事はありますか？

スイーツ監修の福田淳子先生が、よくスイーツを持って現場に来てくださったんです。休憩中にいただいたスイーツを食べたり持ち帰ったりするのも楽しかったですね。ただ、カロリー的に悩ましいところでもありました（笑）。

——スイーツは食べたいけど、食べすぎると困るし……という悩みどころですね。

そうなんです！「今日は絶対食べないぞ」と思ってアフレコに行っても「食べる？」って聞かれたら「はい！」って即答しちゃう（笑）。だから、途中からはアフレコのときは食べていい日と決めました。それから、行事が多かったのも思い出深いです。（藤田）咲さんが率先して動いてくださって、みんなのお誕生日などを休憩中にお祝いしたりして……。なんだか“青春している”感じがして、毎週、思い出が増えていく現場でした。

“大好き”がつまっているのが『プリキュア』の魅力

——『プリアラ』は、本編中で各キャラクターソングが流れたり、キャストがファンの前でライブをしたりと、シリーズ初の試みが多くありました。

2017年10月に行われた単独ライブ『キラキラ☆プリキュアアラモードLIVE2017 スウィート☆デコレーション』では、本当にプリキュアになれた気分でした。以前、池袋でやったイベントを咲さんと見に行ったことがあるんです。子どもたちにとってのプリキュアはステージにいて「プリキュア、頑張れ～」とか「プリキュア、大好き～」とか喜んでいる顔を見て本当に感動して。そのときに、この作品に関わることができて本当にうれしいと心の底から思いました。そんなシーンを見ていたので、私にとってプリキュアがステージに立つというのは、私たちが立つことではなかったのですが、ライブのときには自分が人前でカスタードになることができて、ちょっとうれしかったです。衣装もプリキュアに近い雰囲気の衣装を作っていただいたので、カスタードになれた気がしました。

——秋の『映画キラキラ☆プリキュアアラモード パリッと！想い出のミルフィーユ！』（以下『秋映画』）の思い出は？

『プリアラ』がメインになっての映画を、みんなと一緒にやれたことがうれしかった。私としては、TVシリーズと変わらない収録をした感覚です。それまでの間に半年以上、一緒にアフレコをしてきて、みんながひとつになっていたので、映画という形で表すことができたのは、本当によかったなと。

——秋映画でとくに印象的なシーンは？

TVシリーズとは違うアニマルになったことです！あそこは本当にぶっ飛んでいて、みんなアドリブを入れまくっていたんですよ。あおちゃん（あおい）のナマケモノとか、あきらさんのザリガニとか、笑いをこらえながら収録していて（笑）。今までかっこよかったあきらさんのギャップとか、いろいろなものが観られたのが楽しかったですね。

——『プリキュア』シリーズに1年間、携わってみて、これだけ長く愛される理由はどこにあると感じましたか？

スタッフの方もキャストも、みんな『プリキュア』を誰よりも大好きなことだと思います。その“大好き”な気持ちが作品を観る人たちにトキメキを与えていると思うんです。ひとつひとつ、ていねいに時間をかけて、みんなでいろいろなことを考えて作り上げていく。キラキラが止まらなくなるのもわかるなと。

——最終話を迎えて、改めてひまり／カスタードにひと言、言うとしたら？

「そのままでいいんだよ」と言いたいです。でも、最終話まで観ると、ひまりは私よりもしっかりしているし、すごく芯が通っていることがわかるので、もう大丈夫だとも思います。私自身も「変わりたい」「私らしさってなんだろう」って思っていましたが、ひまりと一緒に過ごしてきて変わらなくてもいいんだって思えるようになりました。ひまりがこれからもキラキラしていてくれたらいいですね。

——では最後に、1年間応援してくれたファンへメッセージをお願いします。

まずは応援していただいてありがとうございました、ですね。ひまりちゃんとしても、声優・福原遥としても成長させていただけた1年だと思います。『プリキュア』を観ている方は、心がキラキラしていて人間的に素晴らしい方ばかりだと、イベントやライブなども通じて知ることができました。みなさんの応援がなければ私たちもこんなに輝けなかったと思います。放送は終わりますが、忘れてほしくないので、これからも応援よろしくお願いします！今まで支えてくださって、ありがとうございました。

福原遥からプリキュアのみんなへ

美山加恋さま

加恋ちゃんと私は子役時代から活動していたという共通点があることもあって、最初からとても話しやすかったです。私は声優としてもわからないことだらけだったので、とにかく加恋ちゃんを見習おう、ついていこうと思っていました。年齢は同じくらいなのに、頼りにならなくてごめんなさい。最初から不安も出さずにしっかりと引っ張っていってくれて心から感謝しています。本当にありがとう。

村中知さま

私は舞台挨拶やイベントになると、すごく緊張してしまうタイプなんです。でも、知さんがいつも面白いことを言ってくれたり、その場を盛り上げようとしてくださったりして、その姿を見ると緊張が解けていました。アフレコ現場でも同じで、それが私にとってもすごくうれしいことでした。いい意味で、みんなの緊張を一気に取り去ってくれる。それを意識せずに自然にできる知さんはすごいなと思っています。

藤田咲さま

咲さんは、最初からみんなをきちんと見てくれていました。意見を出したり、企画をしたり……咲さんが率先してやってくださったところは見習いたいし、尊敬しています。ゆかりさんのお当番回では、スタッフのみなさんと熱心に話をしていたことをすごくよく覚えていて、その姿に刺激をもらえました。私は咲さんとゆかりさんはそっくりで、完璧だと思っています！　咲さんと役の話や自分の想いの話をするのがうれしかったです。

森なな子さま

なな子さんには、たくさん相談に乗ってもらいました。アフレコの帰り道が一緒になることが多かったのですが、「はるちゃん、大丈夫？」とか「何かあったら、すぐに言ってね」とか、お姉ちゃんみたいな感じで声をかけて気遣ってくださって。私は自分から「ごはんに行こう」ってなかなか誘えないタイプなので、なな子さんが誘ってくれたのが、すごくうれしかったです。なな子さんが現場にいるだけで落ち着くし、ずっと隣に座っていたいです。

水瀬いのりさま

いのりちゃんは、アフレコで一緒になったときから「こんな人になりたい！」と思った憧れの存在です。最後まで堂々としている姿が、とてもかっこよかったです。でも、プライベートになると憧れよりも親近感のほうが勝るんです。オフのときに会うことも多くて、笑いのツボも一緒で（笑）。ライブの舞台裏でもふたりで笑い合っていたのが、すごくいい思い出です。プライベートでは近く、お仕事では憧れの存在でいてください。

Cast Interview 3

Tomo Muranaka

村中知

Profile

【むらなか・とも】12月15日生まれ。茨城県出身。主なアニメの出演作品は『アイドルマスター シンデレラガールズ劇場』（大和亜季役）、『フューチャーカード バディファイトDDD』（太陽の竜 バルドラゴン役、超太陽竜 バルソレイユ役）、『ワールドトリガー』（空閑遊真役）など。

キュアジェラート★立神あおい

あおいは私にとって"マブダチ"のような存在

あおいのイメージはいちかとあきらの中間

――1年間の放送が終わっての率直な感想を教えてください。

意外と終わった感覚はないですね。最後の打ち上げでアニメーターの方たちと会ったりして、終わったんだなと自覚はしているんですけど、まだ収録中くらいの精神状態です。

――オーディションは、あおい／ジェラートのみを受けたのでしょうか？

いちか／ホイップも受けました。実際にオーディションの段階では、どちらに対してもしっくりきたという感覚がなかったんです。ただそれでも、猪突猛進で強気、ロックが好きなイメージが強いあおいのほうが、自分の性格的に合う気はしました。

――ちなみに、オーディションの段階ですでにあおいがお嬢さまだということは知っていましたか？

資料に書いてありましたね。オーディション用の台本にはお嬢さまっぽいセリフがあったわけではなかったので、本編でも登場するなら相当なギャップだなぁと思ったのは覚えています。でも演じるにあたって困ることは、とくになかったです。じつは、私の両親も私をおしとやかな子に育てたかったらしいんですが、DNA的におしとやかにするというのが組み込まれていなかったのか、今のように育ったので（笑）、きっとあおいもそういう子なんだろうなと思って、すごくすんなり入り込むことができました。

――そのオーディションを経て、あおい／ジェラート役に決まったという連絡があったときはどうでしたか？

「受かったの？　マジ!?」っていう感じでした。これまで等身大の14歳は演じたことがなかったので、まずオーディション時の役作りはあれで大丈夫だったのかと思って。オーディションでは叫ぶシーンが多かっただけに、叫んだだけで終わっちゃった気がしていて。だからこそ寝耳に水じゃないけど、夢なんじゃないかと混乱していました。

――その状態のなかで、玩具の声録りに臨まれたんですね。

そうなんですよ。玩具の声録りは、TVアニメのアフレコ前なので、台本もないし、設定も箇条書きだし、ふわふわした状態だったので、これでいいのかなと不安になりながら録ったことを覚えています。今、聴くと、変身バンクの音声は自分だと違うなって思う部分もあるんですが、つかんでいたニュアンスはほぼ同じだったので、それはよかったです。

――あおいを演じるにあたっては、どういったことを心がけましたか？

今回はプリキュアが6人になるということで、自分が思うあおい像だけで演じるのは独りよがりすぎるかなと、まず考えました。自分が感じた印象や設定を読んで思ったことは軸にしつつも、周りの人たちの声やしゃべり方のクセは気にしました。個人的に、あおいはボーイッシュなわけではなく、いちかとあきらの中間くらいのイメージなんです。ですからボーイッシュになりすぎず、女の子っぽくなりすぎない、そのバランスは取っていました。アフレコのたびに考えながら収録していて、途中から私のなかでのあおいのイメージは固まってきたんですが、じつは台本に書かれているあおいの口調は、シナリオを担当された方それぞれの個性が出ていて、語尾のニュアンスがちょっと違っていたりしていたのが、あおいをとらえる難しさを物語っていた気がしますね。あおいって基本的にお嬢さまだから、あまり汚い言葉は使わないと思うんです。かといって、きれいすぎるとあおいらしくない。そのあたりは、つどスタッフの方と相談しながら、みんなで作っていきました。

――当初は、いちかたちと一緒に突っ走るようなキャラクターなのかと思っていましたが、どちらかというとツッコミ側のキャラクターになりましたね。

私、最初のころは「あおいは頭がいい」って知らなかったんですよ（笑）。でも、お話が進んでいくにつれて、それが明らかになり、プリキュアの人数が増えるにつれてツッコミ役になり……。じつはプリキュア6人のなかでは、かなりの常識人なんですよね。もちろん、もともとお嬢さまとして叩き込まれたこともあるんでしょうが、みんなと過ごしていく過程で成長して、確実に将来はいい令嬢になるんだろうなと思える子になりましたね。ロックの道は最初こそつまずいたけれど、最終的に両親もあおいのやることを認めてくれて、理解もあって、素敵な家庭に生まれたねと思いました。

――あおいはバンド活動をしているということで、歌うシーンも多かったですね。

私自身、ロックばかり聴くので、苦手な気持ちはなく、「あおいとしてロックを歌えるなんてラッキー」くらいの気持ちでした。変身バンクでの歌、バンドとしての持ち歌もたくさん流していただけて、難しい言葉がまだわからないであろう子どもたちにも、お話の盛り上がりを歌で知らせることができたのが、すごくうれしかったです。

共感できるところばかりのあおいのお当番回

――シリーズを通して印象に残っているエピソードを教えてください。

自分のお当番回はもちろん思い入れがありますが、シエルがやってきた19話や、シエルが初めて変身した23話は「これでプリキュアが6人そろって最終形態になるんだ」みたいなワクワクした気持ちになったことを覚えています。同じ意味で、これから1年が始まるんだと感じることができた1話も印象深いですね。じつは

1話にも（水瀬）いのりちゃんが出演していたんですよ。クレジットはされていないし、街の誰か役でしたが、そのときにのちのちプリキュアとして合流すると知っていたので、6人そろうまでは何か欠けているピースがあるような気がしていたんです。それがシエルの登場でようやく完成した感じでしたね。起爆剤が投入された回でもあるし、新しいグッズも出るし、心機一転の回でした。

——あおいのお当番回についても、ぜひ語っていただけますか？

あおいのお当番回って、共感できるポイントが多くて、客観的に観ても「ずるいな」って思います（笑）。あおいとゆかりさんは同じように内面で迷っている部分が大きかったですが、ゆかりさんがひとりで悩んで刺激を受けて、ひとりで解決していくというのに対して、あおいは本能のままに悩んで泣き叫んで、みんなの言葉に励まされてギターをかき鳴らす、みたいなタイプなんですよ。ある意味、子どもにもわかりやすかったのがずるいなって。全部のお当番回に歌も入っていたし、お気に入りのエピソードをどれかひとつを選べと言われても難しいくらい、どの話も思い出深いです。

——物語が終わって、ほかのキャラクターにはどんな印象を持っていますか？

いちかは最後まで変わっていないかな。人を信じることができて、偏見もなくオープンに接している。大人にはマネできないピュアさのある愛すべき"おバカ"な子だなと思っています。長所を伸ばして、最終的には包容力のある世界を包むキャラクターになったけど、それも最初のころからの延長線上で、何かが激変したタイプではないですね。激変したのはひまりです。熱を込めて語ったら相手に引かれたことがトラウマになっている子だし、自分と正反対のあおいや、お姫さまみたいなゆかり、王子さまみたいなあきらと付き合うようになって、自分の個性で悩んだこともあると思うんです。でも、みんなの言葉に刺激を受けて自信が持てるようになりましたよね。とはいえ、その片鱗は最初のころからあったんですよ。あおいをたしなめてくれるのって、ひまりですから。シュールなツッコミができるようにもなって、変化がわかりやすかったですね。ゆかりに関しては、最初は、ゆかりの「楽しいことがひとつもない」っていう気持ちもわかるなと思っていたんです。でも、最終的には得体の知れない人物になりました（笑）。（藤田）咲さんがゆかりの心の中に揺れ動く繊細な女の気持ちを緻密に考えているのを見て、さらによくわからなくなっていって。私としては「はっきり言ってくれない？」って言いたいくらいです。そういう意味でも、あきらがいてくれて本当によかったと思っています。あきらは「プリンス現る」みたいな感じで登場しましたが、過保護なまでに妹の面倒を見ているのは自分の心を守るためのような面もあって「普通の女子高生じゃん、かわいい」って思うようになりました。自分が最初に受けた印象から一番変化したのは、あきらですね。ただ、ゆかりにいいように扱われているので、そこはみくちゃんに体力をつけてもらって「お姉ちゃん、しっかりして！」って言ってほしいところです（笑）。シエルは人の心に揺れない、完璧なパティシエという印象でした。脇目も振らず猪突猛進に頑張ってきたから、人の心に疎いのかなと。でも、いちかの情熱に触れて、人の心を学んで、秋映画でジャン＝ピエールに「仲間と心が大切」と教える姿を見て、人間に近づいたんだなと感動しましたね。

——妖精といえば、ペコリンもプリキュアになりましたしね。

やんちゃで手のかかる妹が、まさかプリキュアになるとは……と。妖精のなかでも年下で、スイーツ作りもうまくできなかった子が頑張って人間になり、プリキュアになった姿は本当に感動しました。「みんなの大好きを奪っちゃダメペコ」とか、キラパティやスイーツへの想いが蓄積された叫びを聞いたときは、「さすが、かない（みか）さん」と思いました。

バラバラなことこそ「プリアラ」の魅力

——最終話まで終わった今、あおい／ジェラートに声をかけるとしたら、なんと言ってあげたいですか？

何か言うより、その後どうなったのかを聞いてみたいです。49話のラストで、"岬さんナイズ"されたあおいが出てきましたが、バンドメンバーはどうなっているのかを知りたいですね。それから、芸能の道について私とあおいのふたりで、ぜひ語り合いたい。私はこの1年、年齢は違えど、あおいと共に育って、成長してきた気持ちがあるんです。だから、あおいにお姉さんぶって声をかけることができないんです。それは"マブダチ"だからなのかもしれませんね。

——アフレコ現場での思い出もありましたら教えてください。

プリキュア役の5人は絵のとらえ方、尺のとらえ方、力の入れ方、何もかもが違うので、シエルが入るまでは5人そろえて言うセリフが全然合わなくて、少しハラハラしていました（笑）。今にして思うとセリフがバラバラだったのも、それぞれの個性の表れだったのかなと思えます。でもシエルが入ってからはピッタリ声が合うようになったんですよ。声が合ったときには、シエルこそが欠けていたピースだったんだなと改めて感じました。

——そんなバラバラさは「プリアラ」の魅力でもありますよね。

バラバラな個性に「アニマル」と「スイーツ」と「色」という要素を入れ込んだのが最高だったと思います。個性がバラバラなら誰かひとりくらい共感できる人がいるだろうし、ライオンは興味がなくてもジェラートは好きとか、赤は好きじゃないけど、いぬは好きとか、どこかが誰かに刺さるポイントだったと思うんです。バラバラだからこそ、多くの人に愛されるポイントも作れたんじゃないかな。

——改めて、1年間応援してくれたファンへメッセージをお願いします。

まずは1年間応援してくれてありがとうございます。人数が多くてグッズも多く、キャラクターソングCDも1枚ずつ出て、コレクターのみなさまには大変お世話になりました（笑）。物語が進むにつれて一心同体のような気持ちであおいといられたし、みんなとの絆を紡いでいけて、それをみなさんに観てもらえたことが自分の自信であり自負になりました。これから先も「プリキュア」を応援していただきつつ、また改めて一から観直して、新しい発見もしてもらえたらと思います。これからも「プリキュア」を、よろしくお願いします。

村中知から プリキュアのみんなへ

美山加恋さま

頼りがいのある座長でした。加恋ちゃんが座長で本当によかったです。プリキュア6人の個性はバラバラだし、先輩たちもまとめなければいけないというなかで、20歳とは思えないぐらい人の心をつかむ力を持っていて、人の言葉に惑わされず、自分で感じて自分で答えを出せるタイプの人だったと思っています。最初のころは支えなきゃって思っていたけど、途中からは「必要なかった！」と思うようになりました（笑）。おかげで自由にいられました。

福原遥さま

遥ちゃんは、そのままでいいと思います。こんなにトゲがない人間っているんだろうかと思うくらい、仕事に対する姿勢も、プライベートでごはんに行くときの感じも、お芝居そのものにもトゲがなくて。本人は「もっとこうなりたい」「ああなりたい」って感じていると思いますが、その魅力的で愛される人間性はとっても貴重なので、そのままの自分を大切にしてほしいなと思います。そのままのあなたが好き！

藤田咲さま

こんなにガチ勢……あ、いえ、収集家だと思いませんでした（笑）。仕事にストイックで、少しでも疑問に思ったことはスタッフの方に聞いていく姿を見て、グレーな状態を鵜呑みにせず白黒はっきりさせるタイプだから、クールでグッズとかは必要最低限しかいらないタイプと思いきや……とんでもなかったです。鬼のように隅から隅まで「プリアラ」グッズを買いあさっている姿が、すごく印象に残っています。ゆかりと共通点がなくて大変だと言っていましたが、咲さんは完璧なゆかりでした。

森なな子さま

なな子は宝塚出身ということもあって、サバサバした凛々しいタイプかと思いきや、自分の意志を曲げないタイプではあるけど、あきらと同じようにやさしい人なんだなと、アフレコスタジオで隣に座りながら思っていました。最初にいた5人のプリキュアのなかでは、「プリアラ」が始まる前に共演したことがある唯一の人で、「知ちゃんがいてくれてよかった」と言われたときは、じつはうれしくて鼻の下が伸びっぱなしでした（笑）。

水瀬いのりさま

いのりちゃんとも共演経験があったけど、これまであまり話す機会がなく、突然ギャグを言ってきて、キョトンとすることがたびたびありました（笑）。でも、実際に1年間共演してみて、私とはふざけ度合いの方向性は違えど、一緒にふざけていい子なんだと把握できた気がします。淡々とふざけるいのりちゃんと、全力でふざける私の相性は、けっこうよかったんじゃないかな。1年間、一緒にできて楽しかったです。

“わからない”ところこそゆかりの最大の魅力

藤田咲

Profile
【ふじた・さき】10月19日生まれ。東京都出身。主なアニメの出演作品は『WORKING!!』シリーズ（伊波まひる役）、『カードキャプターさくらクリアカード編』（佐々木利佳役）、『進撃の巨人』シリーズ（ユミル役）など。

キュアマカロン★琴爪ゆかり

気まぐれすぎて
つかめないゆかり像

――放送が終わった実感はありますか？

全然ないですね。春の映画も決まっていますし、まだ「幸せな時間をありがとう」みたいな感じです。

――オーディションでは、ゆかり／キュアマカロン（以下「マカロン」）役のみ受けられたのでしょうか？

そうです。オーディションのときは、5人のプリキュアのなかに高校生がふたりいて、あきらは「母性的」みたいなことが書いてあったんですね。であれば、ゆかりはあきらのやさしさとかぶらないお姉さんのほうがいいのかなという印象がありました。キーワードは「ねこと気まぐれ」。人を翻弄するようないろんな面が見えていいのかなと思ったので、それを考えながら心がけて受けた記憶があります。実際、オーディションでも「もうちょっと気まぐれな感じでやってみてください」と言っていただいたので、〝気まぐれ〟はゆかりのアイデンティティーなんだなと感じて、何を考えているのかよくわからなかったり、ミステリアスで放っておけなかったりする感じでいいんだなと思いました。ゆかり／マカロン役が決まったあと、神木優プロデューサーから、「マカロンを受けていただいた方のなかで、一番印象が強かった」と言われたんですね。玩具の声録りのときも「強くなりすぎないように」と指示をいただいていたので、アフレコの段階でも、それはつねに意識していました。

――ゆかりはシリーズを通して、なかなか本心が見えませんでしたよね。

私のなかでは16話が転換点でした。16話まで私もスタッフのみなさんも、どれが正解のゆかりなのか〝彼女の深層心理はゆかりにしかわからない〟みたいな感じで描かれていたと思うんです。でも、16話の収録の前日に貝澤さん（貝澤幸男SD）から、ゆかりの16話での立ち居振る舞いや描写についての資料をいただいたのですが、そこには25話で明らかになるようなゆかりの行動や言動の真相が書いてありました。自分を守るためにウソをついてしまい、ジュリオを傷つけてしまったと。事前に台本をいただいて、16話の演技プランを決めていたんですが、ちょっとお芝居の方向性を考えなければいけないなと思うようになって、女児向けアニメのキャラクターというよりは、「琴爪ゆかりとはなんであるか」を演じていったほうが魅力的になるのではないかと考えていくことにしました。内心で〝ゆかりはこう思っている〟というのをちゃんと把握したうえで外面はこう見えるようにする、みたいな感じですね。それがみなさんから「いい」と言っていただけたのはうれしかったです。

――ゆかりを演じるにあたって、SDおふたりとかなり綿密な打ち合わせをしていたとうかがいました。

ゆかりの内面をちゃんと把握していないといけない意識があったので、お話し合いはさせていただきました。ゆかりってほんと〝女性〟なんです。監督や演出家の方は男性だし、私は私で、どちらかと言うと、さっぱりしすぎているというか男性的な考えをしてしまうので、最初からゆかりの女子の部分が理解できなくて……。スタッフの方と「女の子は難しいね」みたいに話していたら、（美山）加恋とか（森）なな子は「ゆかりのこの行動、わかるー」って言っていたり（笑）。私は、ゆかりよりあきらの気持ちや行動のほうがわかるなって思っていました。博愛で、他人のために動くほうが楽しいので。ですが実際にゆかりを演じていると、意外とワガママに見える振る舞いも仲間が受け入れてくれるとかわいいんだなって思えるようになって。「女の子ってちょっと楽しいかも」と思うようになりました（笑）。

――ゆかりと似ている点が見つかった？

私は演じると役に寄っちゃうので、一概に似ているかと言われると難しいですが、実際にゆかりを演じて、周りの人たちに甘やかされて、許されていることが気持ちいいという感覚はわかってきたので、似ている部分はあるのかもしれないなと思うようになりました。楽しいですよ、琴爪ゆかり（笑）。

――そんな気ままなゆかりですが、最終的には自分で動いて夢を見つけました。

自分で動いたという部分に気づいていただけたら、彼女の成長がきっとわかっていただけているはずです。彼女自身、周りからの完璧というイメージをなぞって生きてきた部分があると思うんです。何しろ、なぞることができるくらい完璧な人なので。でも、いちかたちと出会って、スイーツが好きとか、茶道が好きとか、わからせてくれたのは大きかった。弱い部分があったということをさらけ出させてくれたあきらの存在も大きかったですね。みんなが支えてくれる、甘えられる空間がキラパティにはあって、ゆかりもやさしさをもってみんなに接していたけど、見えにくい部分もあったんです。46話で、あおいに対してバスの中で「かっこいい」と言ったシーンを観るとわかるように、意外とちゃんとメンバーを見ているんですよね。そんな彼女の心の動きを表現できていたらうれしいです。

キラパティの人々が
ゆかりを成長させた

――ゆかりにとってキラパティメンバーの存在はかなり大きいと思いますが、なかでもあきらの存在は特別に見えました。

あきらは博愛の人なので何をしても許してくれるし、ゆかりと同じ高校生なので同じ目線で向き合えているんでしょうね。ゆかりにとって10話までのあきらって他人のなかのひとりでしかないと思うんです。一緒にプリキュアになった同い年の人。でも、名前を呼ぼうと思った相手でもあるし、そこから弱さを見せられるまでになった。人前で泣けなかったゆかりが「この人だったら弱音を言ってもいいかも」っていう隙間が生まれたわけですもんね。本当に、あきらには「一緒にプリキュアになってくれてありがとう」っていう気持ちです。「見せてよ、ゆかりの気持ち、全部受け止めるから」って言ってくれるし、言ったらちゃんと返してくれるのもわかったし、それはゆかりにとってすごくありがたかったことだと思います。そういう意味では、いちかの存在もすごく大きいんです。45話でギュッとしてもらえたことが、ゆかりの大きな一歩を進めるための行動になったので。

――驚きつつも、ちょっと安心もできたシーンかなと思います。

あの抱擁で、キラパティの人たちと物理的に距離ができても、ずっと一緒だと

確かめられたと思うんです。だからこそ、ゆかりも普通の女の子ですから、不安があれば出ていかなかったと思うんですよね。だからこそ、一緒にいてくれる、外に足を踏み出すきっかけをくれたふたりには、心からありがとうと伝えたいです。

——ひまり、あおい、シエルについては、どんな印象を持っていますか?

ひまりは引っ込み思案だけど、好きなことに対して一生懸命だし、スイーツが好きな女の子ということは確立されていて、じつは強い子なんだと思っていました。好きなこともやりたいことも決まっている子は、多少揺らいでも強いんですよ。一番揺らがない、心やさしいいい子なので、人見知りだからこそ共感できるところもあって、すごく好きだなと思いました。あおちゃん（あおい）は苦労人ですよね。自由奔放な子かと思っていたら、すごく常識人。ロックと常識ってかけ離れていると思っていたので、そのふたつを担うキャラクターだったのが、とても面白かったです。ロックなのに気まぐれなゆかりにツッコむのは、あおちゃんなんだなって（笑）。「好き勝手やっているゆかりに憧れてくれてもいいのにな」って思っていました。キラパティでも一緒にサボるんじゃなくて「手伝いなよ」って言ってくれる不思議な子。歌っている姿も、できないって泣く姿も素敵でした。シエルは、妖精から人間、人間からプリキュアになったスーパーガール。「パルフェ」の名のとおり、完璧な子ですよね。最初に出てきたときはひとりで敵を倒せるくらいの力を持っていたので、キラパティのメンバーと一緒にいて成長させてあげられることはあるのかなと思っていたんです。でも、ピカリオとの確執やドラマがあって、キラパティのメンバーと一緒にいるからこそ成長できていったところが素敵でした。キラリンのかわいさもキャッチーだし、愛されキャラですよね。

——では、ペコリンたちについては?

ペコリンはぽっちゃり系なところが、すごくプリティー。プリキュアが6人に増えても、長老がいるにしても重要な妖精役をひとりで担ってきたので、すごく大切な存在です。きっと女児のみなさんはペコリンと同じ視点でプリキュアたちを見ていたんじゃないかな。旅立つときにも背中を押して応援してくれて。成長した素敵な存在です。

6人での変身バンクが本当にうれしかった

——シリーズを通して印象的だったエピソードを教えてください。

45話はゆかりの最後のお当番回ということもあって印象的です。ゆかりのお当番回って、自己解決してしまうことが多くて、参加されているキャストもそれほど多くなかったんですね。でも、45話はたくさんのキャストの方がいらしたことに感激しました。ゆかり的には29話で自分の気持ちと向き合う話は終わっていたので、最後のお当番回をどうするんだろうと思っていたんです。それが旅立ちだった。「心は一緒にいるの」というセリフが、ゆかりの集大成なんだと思うと感慨深くて。ずっと単独の変身バンクだったのが、6人での変身だったのもうれしかったです。45話は、台本をいただいたときから泣いてしまったんですね。メソメソするのはゆかりじゃないと思っていたので当日は不安でしたが、実際は強い心でセリフが言えました。「留学先はコンフェイト公国です」というセリフも「サプライズ、お届け」みたいな軽い感じと言われていたけど、それも言えたし。ただ、戦いのシーンでみんなのセリフに気持ちがつまっていると感じたら、キュアジェラートが攻撃したあとのセリフでグッときて、そこだけ声が揺らいじゃったんですね。のちのちの打ち上げで録音担当の林奈緒美さんに「気づいていました」って言われて。でも、それでOKを出してもらえたということは、それがゆかりだと認めてもらえたんだなと思って、うれしかったです。

——今、ゆかり／マカロンに声をかけるとしたら、なんと言いたいですか?

言おうと思えばいっぱいあるけど、聞いてくれるかな（笑）。ゆかりとは1年間一緒に走って、お互いに高め合ってきた関係だと思っているので「ありがとう」は伝えたいかな。ゆかりの心と対峙していたときは幸せだったし、自分を成長させてくれたこともうれしかったです。あ、ちなみに、あきらにはゆかりのことを〝よろしくしたい〟んです！ ワガママも受け入れてくれるし、あんないい人に早い段階で出会えてよかったと思うので、ゆかり本人にも「直接『よろしく』って伝えたほうがいい」って言いたいです。

——ゆかり&あきらは名コンビでしたね。

そうですね。私となな子の間に絆が生まれたというか、距離が近くなったと感じたのが、ライブのリハーサルのとき、振り付けの練習中だったんです。それ以降、お互いに芝居のときの空気も明らかに変わって。お芝居で距離が近くなることは多いのですが、ライブのリハ終わりで関係性を築けるという経験は今までなかったので、すごく面白かったです。

——では最後に、1年間応援してくれたファンへメッセージをお願いします。

私自身が幸せな時間をいただいた作品なので、みなさんも同じように「プリアラ」を観て幸せな気持ちでいてくれたらうれしいです。プリキュアたちもおのおのの道に進んで、数年後の自分を見せてくれましたし、いつか観てくださっていた方が悩んだりくじけたりしたときに、「プリキュアたちは素敵に成長したんだから、あそこを目指して頑張ろう」と思ってくれる人がひとりでもいたら幸せですね。「プリキュア」シリーズが続いていくかぎり、私たちはプリキュアでいられるので、ずっと応援していってほしいなと。ひと区切りするけど、映画とかでも会えるし、ずっと愛してほしいです。1年間、応援ありがとうございました。

藤田咲からプリキュアのみんなへ

美山加恋さま

1年間そばで見てきて、強い子だと思ったことも、年ごろの女の子だなと思ったこともありました。子役のころから一線で頑張ってきた先輩だし、尊敬できる部分も多く、一緒の作品で強い絆を持ったキャラクターを演じることができて感謝しています。いちかがゆかりのことを尊敬している気持ちが、加恋の演技からも伝わってきました。役に向き合う姿勢、立ち姿、学ぶところがたくさんありました。これからもずっと仲よくしてください。

福原遥さま

はるちゃんは、きっとみんなも同じことを言うと思うけど、ムードメーカーであり、ずっと変わらないでいてほしいです。彼女も勉強家だし、努力家で、好奇心旺盛な部分もあって、素直でまっすぐというところは人として尊敬しています。みんなを引き込む力を持っているし、みんなを幸せにする、癒しのオーラを持っている子だとも思っています。どうか変わらずに、そのまま成長していってください。

村中知さま

知は、あおいとかぶっているところがすごくあるなと思っています。個人的には、歌を歌っている姿がすごく好きだし、お芝居に向き合っているところも好き。考え方はしっかりしている一方で、そういう部分を見せないようにしているのに、それがこぼれ落ちてくるところが愛おしいです（笑）。愛されて生きてきた子だと伝わってくるいい子なので、一緒にいると居心地がいいです。今後も、お芝居だけでなく歌も届けていってほしいです。

森なな子さま

あきらに伝えたいことはたくさんあるんだけど、なな子には……歌を歌うときは、やっぱり尊敬します。「愛とときめきのマカロナージュ」で振り付け後に距離感をつかめたのは、なな子の歌劇をやってきた経験、ステージに立っていた経験からなのかなとも感じました。掛け合いの歌で感情をこめると、どう返ってくるのかを教わりました。歌に色気があるし、人としてもとても魅力的なので、変わらずみんなを魅了していってください。

水瀬いのりさま

いのりちゃんは、見た目の印象と実際とでギャップがあるんです。普通に話をしていて、たまにちょっと黒いことをいう感じなのが、個人的にはすごくかわいいなと思っています。たぶん、ファンの人もそういういのりちゃんの魅力をわかっていると思うし、私もそんないのりちゃんのファンです。話していて茶々を入れてくれると心が近づいた気がして「よしっ！」となるし（笑）、ちょっかいをかけていきたいので仲よくしてください。

Cast Interview 5

森なな子

Profile
【もり・ななこ】2月13日生まれ。福岡県出身。主なアニメの出演作品は「メガロボクス」（白都ゆき子役）、「サクラクエスト」（アンジェリカ役）、「クロスアンジュ 天使と竜の輪舞」（ヒカル役、ナーガ役）など。

キュアショコラ★剣城あきら

あきらは最初から最後までずっと"母性"の人でした

思っていたよりも ノリがよかったあきら

――まずは、本作の放送が終わっての率直な感想を教えてください。

（最終話の）アフレコの前日も当日も実感がなくて、いつもどおりでした。咲姉（藤田）はウルッとしていましたが、（取材時が）最終話のオンエア前ということもあり、オンエアを観るまでは終わった実感はわかないんじゃないかなと。

――オーディションの思い出は？

最初のオーディションでは、全キャラクター分の台本をいただいていたのでチェックはしていましたが、スタジオでのオーディションはあきら／キュアショコラ（以下「ショコラ」）だけ受けさせていただきました。あきらは6人のなかで一番かっこいい系だし、私もどちらかというと、かっこいいとかさわやかな役をやりたいと思っていたので、キャラクターのイラストを見て、ますますやりたいという想いが強くなりました。そのときは、いただいたセリフもお姉さん的な感じでしたし、見た目も大人っぽかったので、完璧で、聖人君子的なスキのない人なのかなと思っていました。

――あきら／ショコラ役に決まったと連絡を受けたときは、いかがでしたか？

自分ではオーディションは手応えがなくて、やけくそで当時上映していた『シン・ゴジラ』を観に行ったんです（笑）。携帯電話の電源を切っていて、映画が終わったあとにマネージャーから連絡が来ていたことに気づきました。決まったと聞いてめちゃくちゃ元気になって、興奮しすぎて赤信号を渡りそうになったのを覚えています（笑）。

――完璧で聖人君子的という印象は、アフレコが始まって変わりましたか？

違うかも、と思ったのは『ドリームスターズ！』です。TVシリーズでまだ登場していなくて、変身も映画のほうが先くらいのタイミングでのアフレコだったんです。『Go！プリンセスプリキュア』の七瀬(ななせ)ゆいちゃんに"壁ドン"をしたり、ゆかりと一緒に絡んでいたり、お調子者というか面白い人なのかなと感じるようになりました。実際にTVシリーズに登場したときは、無自覚にノリのいい人なんだと。意図してではなく、素でノっちゃうんだと腑に落ちましたし、最初に思っていたよりも人間らしさがある人なんだなという印象でした。

――そんなあきらを演じるにあたって心がけていたことは？

見た目はたしかにかっこいいですが、"イケボ"でやろうとかは考えませんでした。作り込まずにアフレコに臨んで、ゆかりと絡んでいたら自然と"天然人たらし"になっていった感じです（笑）。

――あきらはやさしい人ですが、自分のなかにある悩みに向き合っていなかった、ちょっと複雑なタイプですよね。

ゆかりが自分とずっと向き合っていた人だとすれば、あきらは自分と向き合ったのは物語の最後のほうでしたね。正直、自分の気持ちを後回しにしがちな人なので、ちょっと危ういなと思っていました。ただ私は、あきらは変化したけど土台は変わっていないと思うんです。自分の夢を見つけて進めるようにはなったけれど、根本は変わらず"母性"の人であるなと思っています。

――ゆかりに対する態度も、本当に母性たっぷりだったなと思います。

器が大きくないと「見せてよ、ゆかりの気持ち」とか言えないですよね。45話では「きれいだよ、ゆかり」とか、さらっと言っちゃうし。25話は私も台本を見て驚きましたが、隣で（村中）知ちゃんが「何、言ってんだ」ってツッコミを入れてくれていたのが記憶に残っていますね（笑）。ツッコミ待ちみたいなことをよく言うなとも思っていました。

――あきらを語るにあたっては、どうしてもゆかりが外せませんよね。

ゆかりとの関係は、バランスが取れていたこともあって、すごく目に入るんですよね。オーディションのときは、高校生組でロングヘアとショートカットの子たちという認識でしたが、まさかここまで仲よくなるとは思わなかった。私は、ゆかりがいなければ、あきらは成立しないと思っています。

――いろんな面で大人っぽく見えた高校生組は、本編を楽しんで観ていた子どもたちにも憧れの存在だったようですよ。

「キャー！」って喜んでくれるのは大人の方が多い印象なので、本当に子どもたちに人気があったのなら、うれしいです。あきらもゆかりも、女の子が憧れるには大人びていると思うんです。とくに、あきらは女の子の好きな「ピンク」「うさぎ」「ふわふわ」な要素もないですし。1年を通しても子どもに人気がある自信はありませんでしたが、イベントやライブでショコラの格好をしている子を見かけて、すごくうれしかったですね。

ゆかり以上に 本音を見せないあきら

――あきら以外のキャラクターについては、今どんな印象がありますか？

まずは、あきらといったら、ゆかりですよね（笑）。私としては、リアルにゆかりみたいな人がそばにいたら戸惑いつつも楽しいだろうなと思います。自分が知らないことをたくさん知っていそうだし、あきらにだけは本音を言ってくれるからかわいいし、そばにいたらいいなと。大変でしょうけど（笑）。でも、本心を自分にだけ見せてくれたらうれしくなっちゃいますよね。そういう意味でも、ずるいなって思います。ただ、ゆかりを客観的に見ると、自分にはウソをつけないから、一番苦しい人だったんじゃないかな。見ていて痛々しいところもあったし、

そのぶん一番成長したとも思います。とても興味深い女の子ですね。あおいちゃんは、私個人としては一番共感できる部分が多かったです。27話で岬さんとライブ対決をしたときの、お客さんがいない気持ちは私も経験があるので、泣きそうになりました。でも、最後は自分の道を見つけてくれたので、いち視聴者としてホッとしました。いちかは元気で単純な子かと思ったら、そうではなく、意外と大人でした。ほかのキャラクターよりも相手の感情を読み取るのが上手。誰かの異変に最初に気づくのはいちかだし、そういう意味では、一番予想を裏切られたキャラクターですね。ひまりは強くなったと思います。（福原）遥ちゃんの演技もそうですが、意志が強くなった。心配な部分もたくさんあったけど、しっかりした子になったなと思います。それからシエル。6人目のプリキュアは、カードでいえばジョーカー的なポジションなので、いのりちゃんがどう演じるのか、すごく楽しみでした。思ったとおりドンピシャで、一番応援したくなるキャラクターになりました。「幸せになってよかったね」ってピカリオ役の皆川純子さんとも話していました。

——「プリキュア」といえば妖精が欠かせない存在かと思います。本作ではペコリンもプリキュアになりました。そんな妖精たちの印象はいかがでしたか？

ペコリン、長老と出会わないと「プリアラ」は始まらないですから、なくてはならない存在ですよね。キュアペコリンになった姿を見て、本当に泣きそうになりました。ガミーもめちゃくちゃいいやつだし、それ以外の敵もビブリーも、みんながいないと、この話は成立しないから、本当にみんな魅力的でなくてはならない存在だなと感じました。

——一番印象に残っているエピソードは？

やっぱり25話ですね。ゆかり&あきらがメインの回だったし、ナタ王子というとんでもないキャラも出てきて面白かった（笑）。あんなに完璧で人を寄せつけないゆかりが、あきらにだけ涙も本音も見せてくれるというのはドキドキしましたし、一番濃い話数でした。あの話数がないと高校生チームは語れないですね。

あきらのお当番回だったら……36話です。大運動会で風邪をひいて具合が悪くなっちゃうんですが、「心細いときがあった」って心情を吐露するシーンがあるんです。引っ越してきた隣のかっこいいお姉さんみたいな感じだったのに、じつはあきらも不安だったんだというのを知って、15歳で家を出て寮に入った自分の心境にも近いところがあるなと改めて感じました。それを経ていちかたち5人が一生懸命に頑張ってくれる姿を見てトミばあちゃんに言ったセリフ「いちご坂に来てよかった」に、一番感情移入できました。

——あきらは、ゆかり以上に弱いところを見せていないんですよね。

そうなんです。みくのことで怒ったりはするけれど、自分を出していないんですよね。なので、あのセリフがあってよかったです。周りを意識して我慢しているわけじゃなくて、素で弱い部分を出してないだけなので、36話があって、あきらの輪郭が自分のなかで、よりはっきりしました。

観る人を成長させてくれる「プリキュア」という作品

——「プリアラ」は、CDのリリースイベントやライブなど、これまで以上に多岐にわたる展開がありました。

イベントは、観に来てくれる人のキャラクターのイメージを壊さないようにと考えると「失敗できない」と緊張していたけど、リリースイベントを行ってから緊張もだいぶ解けて、どのイベントもライブも楽しかったです。ライブといえば、「愛とときめきのマカロナージュ」を咲姉と一緒に歌えたのは本当によかった。振り付け確認を1日やった日があったんですが、その後のアフレコで自分とキャラクターのリンク感が強くなったのを感じたんです。咲姉も同じように感じていたみたいで、このプロセスがあったから、より役作りが深くなった気がしました。

——アフレコ現場での思い出は？

遥ちゃんが自分のクシャミにぶっ倒れたことですね（笑）。たしか、抜き録りか何かのときだったかな。クシャミをしたかと思ったら、後ろに倒れてしまって。見ていたキャストもスタッフもみんなビックリですよ。あとにも先にも、あんな子は出てこないと思います（笑）。イベントごともすごく多い現場で、そのなかでも、収録で高校の卒業式に行けなかった遥ちゃんのために、水島裕さんが校長先生みたいになってプチ卒業式をやったことが印象に残っています。とても愛のあふれた現場でした。

——1年間「プリアラ」に携わって、「プリキュア」シリーズのどんなところが長く愛されている理由だと感じましたか？

「魔法」とか「プリンセス」とか、「プリアラ」なら「スイーツ」と「アニマル」など、どのシリーズにも、テーマは違えど女の子の〝大好き〟がつまっていること。それから、観ていて一緒に成長できることでしょうか。主人公だからといって無敵ではないし、落ち込むこともあるけど、それでも頑張る姿は、日本の女の子だけでなく、大人たちにも観て面白いと思ってもらえると思います。ちなみに私は、「プリアラ」に影響されてサファリパークに行くようになりました。動物を見る楽しさを教えてもらった気がします。

——1年間の放送が終わった今、あきらにひと言、伝えるとしたら？

「やっと自分の目標を見つけられてよかったね」と言いたいです。49話では研究者の夢に向かって頑張っている姿が描かれていて、現実的には夢がかなうのはこれからですし、生半可な努力でなれるものではないですが、「みくみたいな子や病気で困っている人を助けるために、体に気をつけて頑張ってください」という気持ちでいます。

——では最後に、1年間応援してくれたファンへメッセージをお願いします。

1年間応援していただいてありがとうございます。25話で、あきらがゆかりを助けようとして「大好きだから」って、「それ以外に理由なんてない」って言うんですね。私はそのセリフが心にとても刺さりました。大人になると好きなものを素直に好きと言えなくなることも多いと思います。でも、そんなときやちょっと苦しくなったときは、あきらのセリフや、「プリアラ」で描かれた〝大好き〟を貫く気持ちと勇気を思い出してほしいなと思います。それから、「好き」に理由はいらないです。好きなものは好きという気持ちを大事にして、これからもプリキュアを応援してくれたらうれしいです。

森なな子から プリキュアのみんなへ

美山加恋さま

まずは１年間お疲れさまでした。私より年下だけど、しっかりしていて、毎回偉い、すごいと驚かされることばかりでした。１話ではいちか以外のキャラクターはひと言くらいしかセリフがなかったので、そのときにたくさん話していた加恋ちゃんの背中をよく覚えています。いちかが、ホイップが、加恋ちゃんでよかった。加恋ちゃんと一緒にできて光栄だったし、体調も崩さずに最後までやり遂げたことを尊敬します。舞台でもマイク前でも、また一緒に芝居をやりたいです。

福原遥さま

はるちゃんは本当にかわいくて、毎週癒してもらっていました。はるちゃんのお芝居は型にハマらなくて、毎回どんな演技をしてくるのか、予想ができなくて、それがすごく面白かった。マネしてできることではないので、毎回発見させられることばかりでした。声優以外にも女優として映画やドラマでの活動も忙しいと思いますが、体に気をつけて。ずっと応援しつつ、またご一緒できる機会を楽しみにしています。

村中知さま

私は吹き替えの仕事が多いんですが、知ちゃんとは何作か一緒にやらせてもらっていて、プリキュアメンバーのなかでは一番付き合いが長く、キャストが発表になったとき知っている知ちゃんがいたことが、心強かったです。私が支離滅裂でくだらないことを突然に言い出しても、いつも凝りもせずに受けとめてくれてありがとう。アニメだけではなく、吹き替えでもまたご一緒したいです。一緒にバカをやってくれたらなと思います。

藤田咲さま

咲姉とのことは語りきれないです。咲姉がいなければ、あきらはできなかった。印象に残ったエピソードはゆかりとのものが多いですし、台本を事前にいただいて演技で悩んでいたときも、テストに入って咲姉がいてくれるだけで、悩んでいたことがウソのようにセリフがスラスラ出てきてくれました。咲姉の心、気持ちの入ったお芝居に１年間、引っ張ってもらいました。邪かもしれないけど、また別の関係でも役をやれたらと思っています。

水瀬いのりさま

いのりちゃんは最初からできあがっていて、キュアパルフェという役にピッタリで、ジョーカー的な６人目のプリキュアがいのりちゃんで本当によかったと視聴者としても思います。ライブパフォーマンスも素晴らしくて、歌がうまい、かわいいだけじゃなく、思っていた以上に面白い部分もたくさんありました。会話の最中に予想もできない斜め上のワードを言ってきたのもいい思い出です。またマイク前でいのりちゃんとやれるように頑張ります。これからも面白かわいいいのりちゃんでいてください。

水瀬いのり

Profile

【みなせ・いのり】12月2日生まれ。東京都出身。主なアニメの出演作品は『宇宙よりも遠い場所』（玉木マリ役）、『バジリスク ～桜花忍法帖～』（伊賀響役）、『刀使ノ巫女』（燕結芽役）など。

キュアパルフェ★キラ星シエル

シエルの信念を演技でも伝えたかった

妖精、人間、プリキュアと演じ方が難しかった

——最初に、本作の放送が終わっての率直な感想を教えてください。

（取材の時点では）最終話がオンエアされていないので、気持ち的には終わった感じはあまりありません。でも高揚感と、さびしいなという気持ちはすごくあります。走り抜けてきた1年間で絆が深まったからこそさびしく思うんだろうし、ちゃんとバトンをつながなければいけないのに、どこか手放したくない気持ちもあって。すごく複雑な気分です。

——本作で最初にお披露目となったプリキュアは5人でしたが、オーディションの段階ではシエル／キュアパルフェ（以下「パルフェ」）の存在については、どの程度わかっていたのでしょうか？

オーディションを受けたときは、シエル／パルフェの役はありませんでした。私はスタジオではいちか／ホイップをやらせていただいて、それから妖精のキラリンをやった感じでした。

——その段階では、キラリンがプリキュアになるという話はまだなかった？

自分でも「妖精の役だ」という認識で、人間体になることは決まっていたけど、まだプリキュアになることは知らなかったと思います。キラリンはイラストもない状態だったので、その後に役が決まったと連絡をいただいて、キラリンがシエルにもパルフェにもなるとわかって、ちょっと不安もありました。

——キラリンに決まったと連絡があったときの気持ちはどうでしたか？

２０１６年は、ほかの作品でマスコットキャラクターに挑戦したこともあって、もっとやりたいという気持ちが高まっていたんです。だから、キラリンを演じられるのは、すごくうれしくて。キラリンが人間になって、しかもプリキュアになると知ったときは、「プリキュアになりたい」という夢がかなったんだなという気持ちでした。

——シエル／パルフェを最初に見たときの印象はいかがでしたか？

第一印象は、まず迷いのない子なんだなという印象でした。立ち姿も瞳も、ちゃんと自分を持っている女の子だなと。本当に好きなことのためにひたむきに頑張っていく子でもあるので、孤高というか、孤独でも生きていけそうだなというイメージでした。

——でも、いちかがプリキュアだと知ったときに動揺している姿は、ふだんの凛としたシエルとギャップがありました。

妖精から見るとプリキュアって、女神さまじゃないけど、憧れの存在だから、あんなふうになっちゃうんですよね（笑）。最初はいちかから「弟子入りをさせてください」と言われたけど、いちかがホイップであると知ったとき、師弟関係が逆転する。シエルのときはいちかが慕ってくれて、でもキラリンとして見るホイップは神々しい存在だっていうふたりの関係性がすごく面白いなと思いながら演じていました。

——シエルを演じるにあたって心がけていたことはありますか？

５人の関係性ができあがった状態で新しいキャラクターが出てくるのって、子どもたちはワクワクするポイントだと思うんです。でも、シエルは自信家なので、みんなが感情移入してきたプリキュアたちに対しての言動が、ともすればちょっと強すぎるので、嫌われてしまわないかとかいう不安はありました。なので、いちかに対する態度や、言葉のひとつひとつを、ワガママとか高飛車とか、マイナスなイメージにつながらないように演じたつもりです。シエルの行動には信念があるので、それをちゃんと伝えられるような芝居ができたらいいなと思いました。

——ピカリオとの関係も、ともすればシエルが悪者みたいに見えかねないような危険性もありましたよね。

そうですね。ピカリオとの件は、シエルの好きなものに対するひたむきさの代償というか、自分の好きなものだけを見てしまったから、いろいろなことに気づけなかったという未熟さから来ているので、シエルの完璧な部分とそうじゃない部分とのコントラストをきちんとつけるように気をつけていました。彼女は誰の言うことも聞かない、誰も舵をとれないような女の子ではなくて、ちゃんといちかたちと出会うことで変われるという余地を残すようにしたつもりです。

——キラリンを演じるときは、シエルのときよりはストレートな感じですか？

キラリンに関しては見た目がほわほわしているというのもあるんですけど、大きく動いたり、画面内を走り回ったりするキャラクターなので、パワフルな演技を中心にしました。

——これがパルフェになると、また演じ方は変わりますか？

キラリンはプリキュアに憧れている子ですから、プリキュアになれた喜びを強く持ちながら演じていました。戦うときは苦しい場面も多かったですが、それでもどこか楽しみながらというところも、すごく意識はしていますね。

秋映画での活躍もうれしかった

——シリーズを通して印象的だったエピソードを教えてください。

大切にしているのは、22話のピカリオとの回と、23話の初めてパルフェに変身した回です。シエル初登場から5話くらいかけて、パルフェの変身までを描いていただけたので、そこは毎週、すごく気が引き締まりました。オーディションのときには、キラリンが変身の名乗りをあげるなんて想像もしていなかったので、「夢と希望」という名乗りをできるワクワク感がすごくて。アフレコのときも、ものすごく気合いを入れていきました。

——変身バンクは、毎週アフレコで新たに録っているんですよね。

そうです。物語の流れからの名乗りなので、1年間を通して1回も同じ名乗りはないんです。そのとき、キャラクターがどう思って変身をするのか、敵に対してどんな想いを持っているのかを考えながらの名乗りでしたから、全話通して、いつも大切にしていた場所です。

——秋映画ではシエルがメインで活躍していて、見せ場も盛りだくさんでした。

シエルは『ドリームスターズ！』には参加していなくて、秋映画が私にとって初めての「プリキュア」の映画だったんです。シエルのお当番回とも聞いていたので、どんな物語になるのかすごく楽しみにしていました。秋の段階ではピカリオとの過去のエピソードも、もう放送さ

れていたので、お当番回といっても何ができるんだろうと思っていたら師匠のジャン＝ピエールが登場すると……。『プリキュア』には、みんなで手を取り合って戦うという印象があったんですが、秋映画はシエルの戦いということもあって、みんながシエルをそっと見守ることが多かったんですよね。駆け寄って励まそうとするいちかを高校生組が止めるシーンでは『プリアラ』のチームの形は、お姉さんたちが包んでいるものでもあるんだと気づかされました。それから頭突きが印象的でした（笑）。シエルって、おでこが広いんですよね。パルフェになっても広いままだったのは、頭突きのためなのかなと思うくらいでした。ゼロ距離で、自分にもダメージがくる頭突きを選ぶところが、シエルの熱血漢なところだな、好きだなと思いながら演じていました。

――シエル以外のキャラクターには、どのような印象がありますか？

いちかは元気いっぱいでやさしい子だけど、物語が進むにしたがって、自分のなかで処理できない想いや、元気でいなきゃと思い込んでいる部分が見えてきて、支えたくなる子でした。どんどんたくましくなっていって、振り返ってほかの子たちを見てくれるやさしさがあっても、ちょっと不安に感じてしまう部分もあるのが彼女の魅力なんだなと。つい守りたくなります。ひまりちゃんは本当にピュアで無垢のかたまり。彼女はシリーズを通して強くなっていったし、一番成長しているんじゃないかと思います。小動物みたいなかわいいところもありつつ、自分の好きなものに対する熱意というのは誰にも負けない。その熱意が暴走することもあるけど、自分の好きなものに対する想いというのは誰よりも強いし、言葉にウソ偽りがなくて、心をつかまれる魅力があります。あおちゃん（あおい）は、ムードメーカーで、意外と大人。空気がすごく読めるんですよね。中学生組で一緒にいるときは、ボケでありツッコミもできて、お嬢さまだからマナーもしっかりしている。でも、言葉で敵にねじ伏せられたときに意外と簡単に折れてしまうのを見て、「そうだよね、中学生だもんね」って気づかされました。ゆかりは、敵に回したくないです（笑）。アフレコ現場では、主に（村中）知ちゃんと私は、ゆかりに対してボヤくことが多かったですね。でも、その手に負えない感じが、彼女の魅力なんじゃないかな。それでいて、自分に人一倍厳しいんですよね。それに気づくと、すべての行動が腑に落ちてきて、一気に好きになりました。あきらさんは、彼女が苦手な人はこの世にいないと思うくらい、みんなに好かれる人。あきらさんは、自分でなんでも背負ってしまって内に秘めてしまうタイプだし、誰に対してもやさしいから、きっと何が一番守りたいものかと聞かれたときに口ごもってしまうと思います。無理してひとりで全部を守らなくてもいいんだってプリキュアになって気づいてくれたのはうれしかったです。私もあきらさんを見ていて、やさしさにもいろいろな形があるんだと知りました。

――そして妖精のペコリンも最後にはプリキュアになりました。

最後の1クールに入って、今後の展開リストのなかに「ペコリン、プリキュアになる」ってさらっと書いてあって驚きました（笑）。同じ妖精がプリキュアになれたので、それもうれしかったです。

――シエルといえば、ピカリオという存在も欠かせませんでした。

キラリンとピカリオの関係も、もちろん好きなんですけど、ピカリオが復活してからのやりとりがすごく好きなんです。41話では、シエルがリオにタックルをして自分の想いを伝えるシーンがあるんですが、放っておけない姉と目をそらすことのできない弟の関係がすごく表れていて。シエルはリオをべた褒めするし、すり寄るし、本当に大切なんだろうなと。そこにビブリーが入っての、てんやわんやも大好きでした。

シエルにはずっと探究し続けてほしい

――最終話を迎えてシエル／キラリン／パルフェに声をかけるとしたら？

かけてあげたい言葉……真面目なことじゃなくても大丈夫ですか？

――大丈夫です（笑）。

じつは私、洋菓子があまり得意ではないんです。なので、シエルにはぜひ和菓子、ジャパニーズスイーツに触れてほしい。それから、いろんな国のお菓子に触れていってほしいです。「夢と希望」は終わりがないものなので、また新たな夢を見つけて、いろんな人と出会いながら、探究し続けてほしいです。

――最後に『プリアラ』のファンに向けてメッセージをお願いします！

私は『ふたりはプリキュア』を観て育ったので、今でも『プリキュア』シリーズが大好きなんです。すべてのシリーズが好きですが、実際に作品に携わってみて、自分のこのチームが一番好きとも思うようになりました。みんなと一緒に演じたからこそ、『プリアラ』を好きになれました。私が演じたパルフェが、この本を読んでくれるみなさんに、どういう「夢と希望」を与えられたかっていうのは、ひとりひとり違うと思いますが、私自身はシエルを演じることで、自分のなかに新しい輝き、キラキラルをたくさんもらえた1年でした。今後もいろいろな『プリキュア』がどんどん続いていくことを願いつつ、私たちの『プリアラ』が一番好きだって、ずっと思っていけたらいいなと思っています。『プリアラ』に対する〝愛は私たちが一番負けないぞ〟という気持ちを持ちつつ、これからも続いていく『プリキュア』シリーズを応援していきたいです。

水瀬いのりからプリキュアのみんなへ

美山加恋さま

加恋ちゃんは、子役のころから活躍しているから、考え方や役への向き合い方が大人だなと思いました。それでいて、一生懸命、頑張らなきゃと空回りしちゃうような、年相応の面も持っている人です。自分より年下の人がいる現場はあまり多くないので、今回の現場ではお姉さんみたいな気持ちを味わえました。加恋ちゃんのちょっとした態度からかっこよさを感じていました。座長として1年間、お疲れさまでした。

福原遥さま

お芝居に対してのモチベーションは高く、熱もあるのがはるちゃんなんですが、私は今のはるちゃんが本当に大好きでなので、大人になっても、変わらずそのままでいてほしいです（笑）。はるちゃん自身は気づいていないかもしれないけど、みんなを笑顔にする魅力があると思っています。電車での移動中に、一緒に変顔アプリを使って遊んだときは本当に楽しくて「妹ができたみたい」と思いました。1年間、とても楽しかったです。

村中知さま

知ちゃんは、お姉さんというより、幼なじみ感覚で話すことが多かったです。共通の趣味があって、好きなものも似ていて、つい甘えてしまう存在でした。知ちゃんにだったら、どんなパスを投げてもうまく返してくれるという絶対的な信頼があって、なんでも話すことができたし、知ちゃんの前では何も恐れることがなかったです。『プリアラ』以前にも共演はしていたけど、『プリアラ』を通して一番、距離が縮まった気がしています。

藤田咲さま

咲さんが笑っていると幸せになる、そんな存在です。キャラクターのことを本当に深く想っていて、『プリアラ』に対する想いは、誰よりも強いんじゃないかと思っていました。「自分が思うプリキュア」になるための厳しさは、ゆかりさんそのものだなと。言葉を多くかけてくれるわけではないけれど、やさしく見守って、他愛ない話にも付き合ってくれて、咲さんがいたからこそ私たちは伸び伸びとお芝居ができたと思っています。

森なな子さま

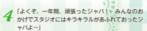
ななちゃんは、スタイルがよくてかっこよくて素敵だと思っていたんですけど、じつはヌケてる面がけっこうあって（笑）。それを見ていると、すごく愛くるしさがこみあげてきました。ななちゃんのちょっとしたドジを指摘すると、「そういうところがあるの」って恥ずかしそうに認めるところは、女性らしいやわらかさがあるなと思っていました。かっこよさとやわからさの両方を持っているところに、あきらさんと通じるものを感じます。

【かないみかさん&水島裕さんへの質問】
1.「キラキラ☆プリキュアアラモード」への出演が決まったときの感想　2.キャラクターの印象　3.役作りで気をつけたこと
4.プリキュアに声をかけるとしたら　5.印象的だったセリフやエピソード　6.最終話まで終わっての感想　7.ファンへのメッセージ
【かないさんへの追加質問】 8.プリキュアに変身した感想

1 キャラ表(設定)を見たとき、一瞬で大好きになりました！　ワタ菓子のような空気感にイチコロ。

2「茶目っ気があってかわいい」→「ますますかわいい」→そして最終話は「デカッ！」。

3 暮田(公平)カントク(SD)からは「かわいらしさを忘れないでくださいね」と言われました。長老なりのかわいらしさは出せたかな。

4「よくぞ、一年間、頑張ったジャバ！　みんなのおかげでスタジオにはキラキラルがあふれておったジャバよ～」

5 印象的というか、このひと言ですべてを語れるというか……「ジャバ！」です。どうして「お風呂の洗剤のCM」がこなかったのでしょうか？「ジャバ！」を連発したのに！

6 最終話は僕にとって、まさかの展開でした。よもや長老があんなに巨大化するとは！　巨大体の収録はメチャ楽しかった。

7 最終話での僕たちの声の収録が終わったあとも、スタッフのみなさんは1か月近く仕上げの作業で頑張ってくださいました。もちろん始まる前もずいぶん前から準備して大変だったと思います。でも、そのおかげでとても素敵な作品になりました。スタッフ&キャスト、そして番組を観てくださったアナタに感謝しています。

1「やった～～！「プリキュア」にやっと出られるんだぁ～～！」。以前からとても出演したかったので、本当にうれしかったです。

2 ペコリンを演じられることに、とにかく幸せを感じていました。そして回が進むごとに、ペコリンはきっとプリキュアになると信じていました(笑)。

3 いちかたちへの"大好き"な気持ちを大切にしていました。

4「みんな、キラキラルがいっぱいペコ～♡」

5 作品中で印象的だったのは「"大好き"な気持ち」！アフレコで思い出に残っているエピソードは、ひまり役のはるちん(福原遥さん)が、クシャミをしてマイク前で転んだこと(笑)。

6 最初から最後まで、本当に素晴らしいお話でした。心が毎回ほんわかしました。

7 これから新しいプリキュアが始まりますが、「プリアラ」のこともずっとずっと忘れないでください。キュアペコリンもよろしくペコ♡

8 とうとうプリキュアになっちゃった～～！　そして、ビックリするほどビジュアルがかわいくてキュンキュンしました♡

【皆川純子さん&千葉千恵巳さんへの質問】
1.「キラキラ☆プリキュアアラモード」への出演が決まったときの感想
2.キャラクターの印象　3.役作りで気をつけたこと
4.プリキュアの味方も敵も演じた感想
5.プリキュアに声をかけるとしたら　6.印象的だったセリフやエピソード
7.最終話まで終わっての感想　8.ファンへのメッセージ

1 ずっと「プリキュア」に出たいと、プリキュアになりたいと思っていました。なので、たとえプリキュアではなくても、出演できることがとてもうれしかったです。敵の少年で、プリキュアの双子の弟でもあると聞いたとき、演じがいのありそうな役だとワクワクしました。

2 **黒樹リオ：**かっこいいけどクセがありそう！
ジュリオ：悪役なのに瞳がピュア！
ピカリオ：めちゃめちゃかわいい！
リオ：王子さまみたい！
敵として登場しましたが、根っからの悪者のつもりでは演じていませんでした。弱さやスキが丸見えだったので、ちょっとこじらせちゃっただけの、愛すべきキャラクターなのだろうと思いました。味方になってからは、いろいろなことから逃げていた彼が自分の心の弱さを認めたうえで、姉と共に夢を追う決心をした姿に感動しました。本当の意味で強くなった彼がまぶしかったです。

3 彼を根っからの悪者だと思っていなかったせいか、ジュリオ形態のときはスタッフの方から「もっと怒りや憎しみの気持ちを前面に出してください」と要望されました。意識していたことは、どの形態のときも、余裕ぶっているようでじつはいつでも必死！な感じが出ればいいなと思って演じていました。

4 正直おいしかったです(笑)。リオくんはいろんな形態があるので、いろんな姿を楽しめましたし、何より演じがいがありました。敵のときも味方のときも、彼の感情をていねいに追っていただいたので、演者として気合いが入りました。

5 **いちか：**本当の意味で強い、女神のような君に、恋をしていたと思います。
ひまり：かわいくてやさしい君がいると、ほんわりしました。
あおい：ギャップが好き。「リオ」って呼び捨てが心地よかったです。
ゆかりさん：いろいろ傷つけてごめんなさい。似た者同士だったのかな……。
あきらさん：やさしさ、素直さ、スマートなかっこよさ、見習いたいところだらけ！
キラリン：悩ませて傷つけてごめん。本当は大好きな自慢のお姉ちゃんです。
みんなお疲れさま！　かっこよくてかわいい6人が大好きです！

6 ホイップに、知られたくない本心を、やさしく暴かれた回です。あのときのリオくんは、くやしいのかうれしいのか怖いのかあったかいのか、よくわからないぐちゃぐちゃの感情が押し寄せてきたんだろうなぁと。演じていても胸が苦しかったです。それとリオの復活シーン！　わたし的には「キュアワッフル」誕生だと思っています(笑)。借りものの力とはいえ、プリキュアと同等の力を持てたという事実、本当にうれしかったです。

7 終わってほしくなかったです。まだまだあの6人のプリキュアを見ていたかった。リオの学校生活も見たかった(笑)。でも、そんなふうに思える作品に携われて幸せです。負の感情も認めて受け入れていく。そんな懐の深さを感じるこの作品が大好きです。

8 1年間ありがとうございました。楽しんでいただけましたでしょうか？　これからも「プリキュア」は続いていくでしょうし、そのたびに素敵なプリキュアが誕生するのでしょう。でも、「キラキラ☆プリキュアアラモード」のこと、忘れないでください。そしていつか、何かの形でまたみんなに会えますように。キラキラキラルン、キラキラル！　またね！

1 純粋にうれしかったです。

2 ゴスロリの女の子は過去にも演じたことがあったので、「同じような方向性なのかな？」と思っていました。現場で求められたものが自分の引き出しになかったものだったので、かなり台本をかぶって考え込みました。

3 かなり歳はいっていると聞いていたので、若くならないように、でも絵のイメージから離れすぎないようにと思って演じていました。普通の生活のなかで言えないようなセリフや壊れたような高笑いはクセになりそうでした(またやりたい)。あと、イルの立ち位置にも私なりに気を使っていました。

4 やりたい放題、言いたい放題も楽しかったし、レッツ・ラ・クッキングも楽しかったです。過去など、ビブリーはしんどいシーンも多かったので、演じていて苦しいこともありました。

5 私は途中参加なので最初のほうはわかりませんが、キュアホイップが一生懸命みんなを引っ張っていて、いい座組でした。声をかけるなら「頑張っていて偉いね」かな?

6 無人島で体育座りは忘れられないです。(福原)遥ちゃんの天然っぷりはとても素敵で、毎回癒されていました。

7 まだ終わったって気がしてないんです。来週また、みんなに会えるような気持ち。

8 キラキラして元気な世界に漆黒のスパイスはいかがでしたか？　今まで演じたことのない方向の芝居に声、いまだにドキドキしております。悪いけど憎めない、そんなビブリーを楽しんでいただけていたらうれしいです。「プリアラ」の6人を今後も応援よろしくお願いいたします！

スペシャル メッ

【ノワールとしもべたちを演じたみなさんへの質問】

1.『キラキラ☆プリキュアアラモード』への出演が決まったときの感想
2.キャラクターの印象
3.役作りで気をつけたこと
4.印象的だったセリフやエピソード
5.最終話まで終わっての感想
6.ファンへのメッセージ

グレイブ役★江川央生

1 まさか『プリキュア』シリーズに参加できるとは思っていなかったので、その知らせにはとても驚きました。

2 ヤンチャなイメージが前面に出ているグレイブというキャラクターは、車に乗り込みキラキラル集めに暴れ回ります。その姿に一発でほれ込みました。次第にディアブルの闇の力に魅入られ、欲望を剥き出していくグレイブの狂気をはらんだそのさまにゾクゾクしました。喜怒哀楽をより極端に表現することで、グレイブの闇をストレートに伝えられるよう心がけてみました。

3 監督(SD)からはとにかく怖く、怒りを力強くぶつけることを求められました。ともすれば気の抜けた優男にならないよう、つねにテンションを上げて怒りまくることに徹していました。

4 闇を求め闇で世界を染め上げることに猛進するグレイブがキュアカスタードに「あなたもノワールに心の闇を利用されているんでしょう」と突きつけられる39話で、グレイブが「みくびるなぁー‼(中略)俺は俺の闇をわかったうえでしもべになったんだ‼」と叫び返すシーンが印象に残っています。グレイブというキャラクターの成り立ちを象徴するセリフだと思います。

5 アフレコはとても楽しく和気藹々(わきあいあい)の現場でしたね。それぞれのキャラクターがその役とシンクロしているようで絶妙でした。最終話を迎え、打ち上げも済んだ今、にぎやかな祭りが終わったようなさびしさが残っています。またどこかで別の形で逢える日を楽しみにしています。

6 応援してくださったみなさんも"大好き"を大切に秘めて、今、この不穏な世界をたくさんのキラキラルで満たしていきましょう‼　ありがとうございました。

ノワール役★塩屋翼

1 自分でいいのかと思いました。最初は信じられませんでしたが、ふだんよりいっそう気合いをこめてやらなければと思いました。

2 ああー……ノワールって感じですかね！　とにかく、嫌な人にならないと、と思いました。『プリキュア』シリーズのなかで記憶に残る悪役になりたい。そう思いました。

3 なるべく低く。気持ちをこめずに。得体の知れない。心を許さない。感情を出さない。「ない」が多かったです。

4 印象的だったセリフは「私への愛の証としてプリキュアを倒すのだ」。印象的なエピソードとしては、プリキュアの6人の掛け声が一糸乱れずそろっていてビックリしました。

5 なんとかやり遂げることができてよかったです！

6 『プリキュア』ファンのみなさまのもとでノワール役ができたことを光栄に思います。ありがとうございました。

エリシオ役★平川大輔

1 「ついに『プリキュア』シリーズに自分も出演させていただけるのか！　やったー！」と、単純にすごくうれしかったです。

2 第一印象としては「白い！」でしたね(笑)。悪役なので、精いっぱい、その務めを果たさせていただこうと思い続けながら収録に臨ませていただいてはいましたが、プリキュアがかわいそうに感じるときもありました(苦笑)。

3 エリシオは人の心の闇に興味を持っています。だから本来なら人が表に出さないようにしている部分や、見せたくない、見られたくない部分を狙って、ときには真綿で絞めるように、またときにはズバッと突きつけるように迫っていけたらなと思いながら挑ませていただいたつもりです。

4 印象的なものはいろいろとあるのですが、あえて挙げるとするなら、48話のラスト付近でしょうか。キュアホイップに「本当にバラバラの生き物がつながる世界を作れるというのなら……見てみたいものです……それは……とてもおいしそうな未来ですから」と。そしてノワールとルミエルのカードに「さあ、還りなさい……」と言ったときは、うまく表現できないのですが、なんだか僕自身の胸のなかがギュッとしました。

5 キャストのみなさんもスタッフのみなさんも本当に仲がよくて、すごくチームワークのある番組でした。そんなチームのなかに加えていただき、とても素敵な役を任せていただけたことに、心から感謝していますし、毎回の現場が本当に楽しかったです。

6 『キラキラ☆プリキュアアラモード』をご覧いただき、本当にありがとうございます！　プリキュアをいっぱい苦しめる役での参加でしたが、彼女たちの成長にひと役買えたのではないか……な……なんて自分では思っています(苦笑)。作品を通して、ご覧いただいたみなさまの心があったかくなるような何かがお届けできていたのではないかと信じております。『キラキラ☆プリキュアアラモード』が、みなさまの胸にいつまでも残り続ける作品になっていたらうれしいです。

ディアブル役★竹内良太

1 まさかこんな日が来るとは……驚くと共に、いったいどんな役なんだろうとワクワクしていました。ありがたく、さまざまな役を演じさせていただいておりますが、まさか自分が『プリキュア』作品に出演できるとは思っていなかったので、とても感謝です。

2 「かわいい」でした。目の釣り上がり具合や、大きな耳……敵ながらなんてかわいいキャラクターなんだと。物語が進むにつれて、進化を遂げるディアブルですが、とくに最終形態の二足歩行になったときは……しかし……やはりかわいいと感じてしまうのは僕だけでしょうか……。個人的には、四足歩行状態のディアブルさんが一番オススメです(笑)

3 プリキュアに対して、かなりの憎悪を持っているディアブルさん。それを糧にどんどん強くなっていくので、憎悪の部分はつねに根底に置いて芝居させていただきました。

4 35話のひまり&あおいの友情が描かれる場面で、ディアブルとふたりが戦っている際に「そこまで必死になるほどの価値がこいつにあるか？」と問いかけるシーンは敵として熱が入りました。そこから、あおいのひまりに対する本音が爆発する。そして、ふたりのキズナが深まる……敵としてこれほどやりがいのあるシーンはないと感じました。倒されるっていいですね(笑)。

5 登場シーンは全体の一部分ではありますが、やはり『プリキュア』作品に関われたこと、制作スタッフのみなさまの『プリキュア』愛を現場で感じることができたのはうれしかったですね。

6 最終的にはグレイブに取り込まれてしまい、グレイブさんの愛車の一部となりましたが、ディアブルのかわいさは視聴者のみなさまにも伝わっているのではないでしょうか！　敵としてディアブルを真剣に演じさせていただきましたが、ディアブルとの戦いを経て、さらにプリキュアたちのキズナが強く深くなる話の流れは、グッとくるものがありました。関わらせていただきまして本当に感謝でございます！　ぜひ、これからのプリキュアたちの活躍を見守ってくださいませ！

Staff Interview 1

【シリーズディレクター】暮田公平 × 【シリーズディレクター】貝澤幸男

スタッフが製作の裏側について、熱く語る！

Profile
【くれた・こうへい】アニメ演出家、アニメ監督。東映アニメーション所属。主なアニメの担当作品は「ONE PIECE FILM Z」(助監督)、「聖闘士星矢Ω」(シリーズディレクター）など。

Profile
【かいざわ・ゆきお】アニメ演出家、アニメ監督。主なアニメの担当作品は「デジモンクロスウォーズ～時を駆ける少年ハンターたち～」(シリーズディレクター)、「暴れん坊力士!!松太郎」(シリーズディレクター）など。

心強かったふたり体制のSD

——『キラキラ☆プリキュアアラモード』(以下『プリアラ』)では、なぜSDがふたり体制になったのでしょうか？

貝澤　前シリーズからの反省として、『プリキュア』というシリーズをひとりで担うのは大変だということで、今回は最初に「暮田SDと一緒にどうですか？」というお話をいただきました。

暮田　最近のアニメは作品数も多く、関われるスタッフも流動的で、先輩が経験してきたことを下の世代が学ぶ機会が少ないんじゃないかということが会社のなかでも問題点としてあげられていたんです。もう少し上下の世代での意思疎通があってもいいのではないか、いろいろな意見を集約させて作品を作るのもありではないかという話になって、今回はふたり体制になったみたいです。

貝澤　僕はこれまで『映画Go！プリンセスプリキュア　Go！Go!!豪華3本立て!!!』のなかの『キュアフローラといたずらかがみ』という作品でしか『プリキュア』シリーズに携わったことがなかったんです。『プリキュア』という作品に対する知識がなかったので、『プリキュア』経験者である暮田さんとのふたり体制は本当にありがたかったですね。

暮田　僕のほうは『Go！プリンセスプリキュア』(以下『Go！プリ』)や『魔法つかいプリキュア！』の絵コンテ・演出をやっていたので、逆に『プリキュア』に慣れすぎちゃっているなとは感じていました。『プリアラ』のプロデューサーも、ずっと『プリキュア』をやってきた神木優さんでしたから、ほとんど『プリキュア』に触れていない貝澤さんの新鮮な目線からの指摘で、目からウロコが落ちた部分も多かったです。

——本作のテーマである"大好き"や、モチーフである「スイーツ」と「アニマル」は、どのように決められましたか？

暮田　玩具が出ることが前提の作品なので玩具会社の意向はありつつ、「スイーツ」「アニマル」の要素、そして「スタートは5人でやりたい」ということを神木プロデューサーに言われました。それをもとに、みんなでそれらの要素の組み合わせや物語の進め方を相談しながら決めていきました。最初に「スイーツ」をどう作品内で位置付けるかというときに、貝澤さんから"大好き"という気持ちをスイーツにこめてはどうかという提案があったんです。

貝澤　「スイーツ」と「アニマル」を軸に演出してほしいと言われたときは、僕も暮田SDも「どうする!?」ってなりましたね（笑）。「スイーツ」を前面に出せばいいのか、「アニマル」を前面に出せばいいのか、両方の要素が出ていればいいのか、どこをプッシュすればいいのかがわからなかったんです。『プリキュア』のターゲットは子どもたちですから、子どもたちに向けて表現するのに、「スイーツ」と「アニマル」がバラバラではいけない。何かのつながりを持たせたくて"大好き"というテーマを考えたんです。女の子の"大好き"という想いの先に「スイーツ」があって、その「スイーツ」を作りながらひとりひとりの個性がどんどん芽生えて確立されていく。その個性が「アニマル」と紐付けば、きれいにまとまるんじゃないかなと思いました。僕自身は『プリキュア』そのものに女の子が秘めているようなキラキラした特別な力があると思っているんです。そのキラキラは個性であり、それが形になったときに「スイーツ」や「アニマル」をまとうという物語になれば子どもにもわかりやすいんじゃないかなと。

——最初に5人でスタートすると聞いたときはいかがでしたか？

暮田　正直なところ、(人数が）多いなと思いました。アニメーターさんからも「5人ですか……」って、よく言われましたね。5人もいると並べるのも大変だし、映像にしても5人がそれぞれにセリフを言うだけでもかなり尺を取られるんです。ですから、中学生組と高校生組に分けて、メインは中学生ということにすれば、少しはそれらの問題を解消できるのかなと考えました。

貝澤　たしかに5人は多いですよね（笑）。でも、最近は子どもたちがスマートフォンなどに早くから触れて、ものすごい情報量から自分の"大好き"を選ぶ時代になっているんですよね。そう考えると、人数が少ない＝情報量が少ないと気に入った子が出てこないかもしれないのかなと思いました。5人いれば、性格も色もアニマルのモチーフも、いろいろな方向性で個性を作ることができる。たくさんの個性があれば、きっと気に入るキャラクターが出てくれる。そのお気に入りのキャラクターから『プリアラ』の世界に飛び込んでくれるかもしれない……と考えると、より多くの子どもたちに楽しんでもらうチャンスができたんじゃないかなとは思いました。何より、最初の打ち合わせで神木プロデューサーに「『スイーツ』『アニマル』『5人』という要素のなかで一番やりたいのはどれですか？」と聞いたら「私がやりたいのは『5人』です！」と宣言されたんですよ。そこまではっきりと言いきられたら、そこは譲れないんだろうなと思って、じゃあ5人でやりましょうということになりました。

子どもたちの目線で考えることを大切に

——『プリアラ』を制作するにあたって、とくに心がけたことは？

暮田　長いシリーズですから、どうしても『プリキュア』とは、こうでなければいけない」みたいな固定観念があったんです。『プリアラ』では、そういったものを崩していきたいなと思っていました。それが今回、肉弾戦ではないバトルにも表れているんです。

貝澤　僕がこれまで担当してきた作品と違い、『プリキュア』は未就学児も観ているので、「その子たちが理解して楽しめるものを作ってください」と言われたんです。それを聞いて改めて、バトルは肉弾戦でいいのかなと考えました。僕はプリキュアは女の子のなかにあるキラキラした特別な力が能力になっていると思っていて、バトルではそのキラキラを拳に乗せて敵にぶつけているのだととらえました。だから、キラキラをぶつけるためのエネルギーを描けるとすれば、バトルは肉弾戦という形でなくてもいいのではないかと思い、今回は歴代シリーズとバトルシーンの方向性が変わったんです。

暮田　バトルシーンに関しては『プリアラ』の話の流れによるところも大きかったです。話の前半でスイーツを作っているのに、後半でアクションをするというのは流れが分離してしまっているように感じたんです。『プリアラ』はスイーツのなかのエネルギーを使って戦うほうが前半からの流れもきれいですし、スイーツを作ることは戦って大切なものを守るのと同じなんだよ、というのがわかってもらえるのではないかと。

貝澤　『プリアラ』では"大好き"を伝えるためにスイーツを作っているのに、敵がそのスイーツを台なしにしちゃうんですよ。スイーツがダメになれば"大好き"が伝えられないのとイコールになるわけですから、いちかたちが怒るのは当然だし、悪いことをした人と戦うのも当然。"大好き"を守るために戦うという

『プリアラ』で〝大好き〟の大切さを思い出してもらえたら（暮田）

ことが『プリアラ』らしさにもつながったんじゃないかなと思っています。

——今回、いわゆる各話ボスのような存在があまりいなかったのも印象的でした。

暮田　これも子ども目線で考えての見直しでしたね。最初に組織を見せて、その組織の幹部が攻めてくるのが『プリキュア』の定番ですが、子どもたちに組織といきなり言っても難しいんじゃないかなと思って。序盤は地続きの世界からやってくるちょっと悪い存在という形にして、話が進むにつれて幹部を出したほうがいいだろうという話になりました。

貝澤　世界を滅ぼそうとするのはもちろん悪ですが、ひとりの女の子の〝大好き〟を壊そうとするのも悪です。ですから、最初のころの敵は女の子の〝大好き〟を破壊する存在という感覚で描いています。小さな子が「悪」という概念がわからなくても、スイーツを奪おうとする悪いやつだと思ってくれればよかったんです。

——シリーズ前半に出てきた敵が、ガミーをはじめとする「悪い妖精」だったのも、子どもたちにわかりやすく観てほしかったからなんですね。

暮田　そうですね。今回は個人の心に根ざすスイーツがメインなので、いきなり敵が「世界を滅ぼす」と言い出すと、乖離しすぎているかなと思ったんです。

貝澤　スイーツを作ってキラキラルを集めているだけなのに、世界征服っていうと違和感があるんですよね。

暮田　ですから、今回は妖精たちもプリキュアたちと地続きの世界の存在にして「世界を滅ぼす」ということから遠ざけました。悪い妖精たちもジュリオも〝大好き〟が気に入らない〝大嫌い〟だから〝大好き〟を破壊しようとするという、比較的わかりやすい行動理由で動いていたと思います。最終的には〝大好き〟も〝大嫌い〟もない存在としてエリシオがやってくるんですが、それをプリキュアが全部包み込んでくれる。「完全なる悪」というのは、この作品世界にはいないのかなと思っています。ノワール（エリシオ）も愛情で包み込んでくれる人を求めていたけど、ルミエルひとりでは荷が重かった。それをいちかたち6人の個性があるから包み込めたと、きれいにまとめられたのではないかなと思っています。

中学生と高校生の絶妙なバランス

——プリキュアのキャラクターについては、どのように考えられましたか？

暮田　まず、いちかはリーダーとしてみんなをまとめるというよりも、みんなが自然についてくる、放っておけないような感じにしたいなと思いました。明るく元気にというのは当然ですが、「うさぎ」がモチーフなので、その明るさの原点にじつはさびしさがあって、さびしさのなかには離れているお母さんへの想いがあったりと、話によって雰囲気が変わるように盛り込んだ感じですね。

貝澤　主人公って物語を引っ張るキャラクターなんですよね。単に元気なだけだとメンバーを引っ張っていきにくいこともあって、いちかはちょっとポンコツ娘という存在になりました（笑）。でも、それだけだと主人公にはなり得ない。みんながついていくのは、それだけ彼女に魅力があるからです。それが「想いの力」なんです。いちかは何かをしなきゃ、何かをしてあげたいという想いが強く、それをスイーツにこめられるからキラキラルを生むことができる。その想いこそが、人を引き寄せるいちかの力なんです。

——ひまりは、人見知りである一方で、スイーツのこととなると周りが見えなくなるほど熱くなるのが印象的でした。

暮田　本来、中学生って観ている子たちからしたら年上のお姉さんだと思うんですが、『プリキュア』では子どもたちを映す鏡のような存在だと思うんですね。ひまりは、『プリアラ』のなかでも子どもたちが一番共感してくれたんじゃないかなと思います。こだわりがあるけど人に伝えづらいと感じたり、うまく伝えられなくて人を傷つけたんじゃないかと思い込んだり、一歩踏み出す勇気が必要な話も多かったので、視聴者は自分のことのように思ったんじゃないかなと。

貝澤　いちかに欠けているものを補うことができるのが、ひまり&あおいだと考えています。いちか以外のメンバーって、じつは天才なんですよ。いちかだけが成績がよくない、みたいな立場なんですね。そのいちかのちょっとぼけているところを、たとえばひまりであればスイーツの知識で補える。逆に、ひまりが持っていない「明るさ」や「前向きさ」を、いちかが持っているという形ですね。

——そうなると、あおいの立ち位置は？

貝澤　いちかは「想い」だけで突き進める子ですが、それゆえに迷ったり悩んだりすると前に進めなくなることがある。それを後押しして進める力を、あおいが持っているんです。

暮田　あおいは中学生3人のなかでは、完全にツッコミ役ですよね。ロックが好きで自由で活発で、言いたいことが言えるのは、あおいならではだなと思っています。それでいながら、じつはかなりの常識人。立神家やキラパティのみんなを気遣ったり気にしたりする繊細なところもあるという、年ごろの女の子のいろんな面を持っている子ですね。

貝澤　中学生グループの3人を集めると「完璧な主人公」になる感じですよね。

——高校生のふたりは、本音をあまりオープンにしないという意味で、中学生よりは大人っぽい雰囲気に感じました。

暮田　小さい子から見ると、高校生ってすごいお姉さんだと思うんです。ですから、憧れられるお姉さん像を、ゆかりとあきらには持たせたかったんです。ゆかりは「ザ・憧れのお姉さん」です。こんなにきれいなお姉さんがいたら素敵だなとか、自分もそうなりたいという感じの、大人の世界を見せてくれる存在です。もちろん、ゆかりはゆかりでいろいろ悩んでいたりもするけど、その葛藤も大人らしいものとして映ってくれたらいいなという存在でしたね。『プリアラ』を観ていた子が思春期になって、ゆかりと同じく自分の存在に悩んだときに、ふと思い出してくれたらいいなと思っています。

貝澤　ゆかりの悩み方に関しては、僕たちも悩みました（笑）。すんなり入れないキャラクターでもあったんですよ。

暮田　いちかは一気に落ち込んでも一気に回復するみたいなタイプだからわかりやすいけど、ゆかりは「自分は何者なのか……」みたいなところで悩むので難しいんですよね。

貝澤　いちかたちから見てもわかりづらい、理解できない部分があるのが高校生なんです。彼女たちを描くにあたっては、100%考えていることを全部表現するのではなく、視聴者にも想像させるような形で描いたほうが魅力が増すのではないかと思って、詳しく描かなかった部分もあります。とくにゆかりは、僕たちも100%理解しないほうがいいんじゃないか、ある程度は成り行きに任せていいのではないかと思いながらキャラクター造形が決まっていったところもあります。ライターの方が書いてきたシナリオにも、最初は「ゆかりの本心はこうなんだ」と各話の演出の方用にメモを入れていたんですよ。でも、ゆかりの気持ちを理論づけても、キャラクターとしての魅力が薄れてしまう気がして、その話は演出の方にお任せすることにしたんです。「ゆかりというキャラクターはわからない部分も大切な魅力なんですよ」とお話しました。ゆかりのエピソードに関しては、脚本の坪田文さんがうまくまとめてくれたなと思っています。

——あきらは、ゆかりと比較すると、まだ行動理由はわかりやすいほうですよね。

暮田　そうですね。あきらは5人のなかではみんなを守るキャラクターで、一歩引いたところからサポートするタイプですね。一歩引いているからこそ目立ちにくいキャラクターにもなりそうだったところを、シリーズ構成の田中仁さんが宝塚的な男装風の女の子にするという案を出してくださって今の形になったんです。

貝澤　あきらは一見、普通っぽいキャラクターですが、じつは一番普通っぽくなかったなと最終話まで終わったところで思いました。妹にこだわりすぎているんですよね。妹を守ることを課せられたと思っていたけど、じつは妹を守ることが目標だったと44話で気づきましたが、「普通はそこまで思いつめるのか？」みたいなところがあって。正直、将来が一番心配なキャラクターです（笑）。ほかの子たちは放っておいてもいいけど、あきらだけはちょっと目が離せないんですよね。

暮田　しっかりしているように見えて、とぼけたところも多かったですからね。

——6人目のプリキュアとして登場したシエルは、かなりジョーカー的な立ち位置なのかなと感じました。

暮田　敵がプリキュアになるパターンは過去にもありましたし、本作でも検討しました。しかし、敵からの改心の過程を描くことは、せっかくバーンと登場して新しくプリキュアになるキャラクターなのに、苦悩や悩みを見せる展開にかなりの時間を割くことになります。では『プ

子どもたちが観て"楽しく、わかりやすく"を最も大切にしました（貝澤）

リアラ」らしくインパクトある展開にするにはどうしようと考えて、「最初から完璧な存在」として登場させたんです。登場はインパクトを狙いましたね。完璧だから周りに目を配れなかった子が、いちかと出会って人を想いながらスイーツを作ることの素晴らしさを知る。一方で、いちかはシエルからスイーツ作りの技術などを学んでいく。そんな相乗効果で、ふたりの関係もうまく描けたと思います。

貝澤　一方はプロのパティシエになりたいと思い、一方はプリキュアになりたいと思っている。お互いにないものを持っていて引かれ合うようにできたのは、面白かったなと。

——シエルと対になるジュリオ／ピカリオに関しては、どう考えていましたか？

暮田　『Go!プリ』で、敵キャラクターのクローズが転校生として学校に来る話があったんです。"身近なところに敵がいる"というのは面白いなと思って、ジュリオ（黒樹リオ）を考えました。じつはシエルの弟で、劣等感から闇落ちしてしまったんですが、プリキュアになりたいという憧れをちょっとこじらせちゃった、みたいな感じです。ペコリンと逆のイメージですね。人の心をいじったりして本当に悪いことをしたのだから、死なないとつぐなえないんじゃないかという案もあったのですが、彼の苦悩を考えると、やっぱり消えるのはかわいそうになり、充電期間をおいて復活させるという案に落ち着きました。復活まで引っ張りましたが、逆に心配してもらい、結果的に、たくさんの方に愛されるキャラになって、よかったです。

いちかたち中心の目線で描く大切さ

——その後、47話ではなんとペコリンがプリキュアになりました。合計7人のプリキュアになったというのは史上最多でしたが、いつごろペコリンをプリキュアにするという話が出たのでしょうか？

暮田　詳しい時期は覚えていないんですが、みんなで先の展開を考えていたときに「ペコリンが人間になる話数があるんだから、これはもうプリキュアにしなきゃいけないね」という暗黙の了解があった気がします。ペコリン自身も、いちかたちのそばにいて、ずっとプリキュアになりたいと思っていたんだから、その願いをかなえてあげたいと考えたんです。

貝澤　妖精たちは人間よりももっと昔からルミエルの力を受けて、プリキュアになりたいと頑張っていた存在ですから、妖精のなかでもとくに想いの強かったペコリンがプリキュアになるのは妥当だと僕たちは思っているんです。シエルがプリキュアになれたのは、リオの力によるところも大きくて、正統派のプリキュアの変身とはちょっと違うかなと。であれば、いちかたちの想いを継ぎつつ、「望めば女の子は誰でもプリキュアになれるんだ」という夢を実現させたのが正統派のプリキュア・キュアペコリンなんです。

——プリキュアたちの家庭環境も比較的多めに描写していましたが、ひまりだけ家族が出てこないのが気になりました。

貝澤　僕もどんな人たちか知らないんですよ（笑）。

暮田　36話の大運動会で応援に来ているシーンを描こうかとも思ったんですが、あえて外したんですよね。とりあえず、「やさしいご両親です」とだけ伝えておきます（笑）。

——ちなみに、あえてそこを描かなかった理由はありますか？

暮田　『プリアラ』は、子どもたちの目の届く範囲というのを気にしながら作った作品でもあるんです。子どもたちの見える範囲って目の前のことがすべてみたいなところがあるなと思っていて。主人公目線でものを見ることを考えていたので、いちかの家庭については比較的多く描かれますが、ほかの家庭のことにいちかが首を突っ込むわけではないので、あえて出さなかったんです。

貝澤　あくまでいちかたちの視点が中心なんですよね。いちご坂はスイーツのお店がいっぱいあるように見えますが、それはいちかたちがスイーツが好きで、スイーツのお店によく目がいくから、そう見えているという表現なんです。

——学校における描写があまりなかったのも、いちかたちの視点が学校メインではなかったからということですか？

貝澤　それについては、いちかたちにとっての"大好き"が学校よりも放課後の商店街やキラパティにあったからですね。"子どもたちにもわかりやすく"と考えたときに、一気に周りの状況を説明してしまうのは違うだろうというのもありました。主人公のいちかが友達と出会って友達の顔が見える。でも、友達の顔がわかったからといって、友達の両親の顔までわかるわけではない。だから、そこまでは描かない。仲よくなって初めて生い立ちやその子の家が見えてくる。そんな流れを気にして作りました。

暮田　キラパティがいちかとみんなをつないだというのも大きくて、それは学校ではなく放課後の世界になります。普通に学校生活だけを送っていたら、いちかとひまりとあおいって友達になれなかったと思うんですよね（笑）。ましてや、ゆかりとあきらは高校生だから知り合う余地もない。キラパティが子どもたちの放課後における秘密の集まりみたいな部分があるので、大人たちが入り込むのは無粋かなと思って、大人を極力出さなかったというのもありますね。あとは放課後の子どもたちだけの秘密の場所を、みんなで楽しんでほしかったんです。

キャストとプリキュアの驚きのシンクロ

——本作のキャスト発表の際には、これまで女優業が多かった美山加恋さんや福原遥さんがいて驚きの声も多かったです。

暮田　『プリキュア』は毎年オーディションをしますし、今年も当然そうだったのですが、基準はただひとつ「キャラクターをリアルな感じで受け取りたい」ということだけでした。結果的に、あまりにもキャラクターとキャストがシンクロしすぎていて「キャストを決めてからキャラクターを作ったんじゃないか」なんて疑惑もあったみたいですが、決してそんなことはありません（笑）。村中知さんはあおいそのものみたいでしたが、そのシンクロがあったからこそコンサートやライブイベントも盛り上がったみたいですし、結果的にはよかったですね。

貝澤　今回のキャスティングは、暮田SDの"心のキラキラル"の表れかなと思っています（笑）。普通なら主人公を決めてからほかの子たちのバランスを決めていきますが、今回は全員同時に決めたんです。それでこれだけバランスよく決まったのは、決断を下した暮田SDの力です。

暮田　じつはオーディションから玩具の声録りまでって時間があまりないんです。持ち帰って決めることはできなくて。

貝澤　その場でスタッフから決断を迫られていましたよね（笑）。

暮田　『プリキュア』の主人公になることは、その声優の方の人生を変えるくらい大きいことなので、決断を下すのはプレッシャーではありました。

——最初のオーディションの段階で、シエルも決めたのですか？

暮田　決めました。妖精から変身するとか完璧な子というのは決まっていたけど、まだ細かい設定は決まっていなかったので、妖精の声もできる人がいいなと思い、水瀬いのりさんにお願いしました。

——キャストとのリンクというエピソードでいえば、ひまりが43話で料理番組のアシスタントオーディションを受ける、という話がありましたが……。

暮田　これも、キャストが福原遥さんだったからというわけではないですよ（笑）。ひまりを過酷な状況に追い込むとしたらどうしたらいいかと考えた結果、コミュニケーションが苦手な子にはカメラの前でしゃべるというのはかなりハードだろうということになったんです。ひまりへの試練は6人のなかでもとくに過酷でしたよね。エリシオにも大切なスイーツノートを燃やされるし……。

——結果として、それでもへこたれないくらい自信を持てたのが、ひまりの素敵なところなのかなと思います。

「想いの手渡し」の気持ちを大事に

——『プリアラ』は変身シーンの冒頭などにキャラクターソングが流れるのが、これまでにない展開でしたね。

暮田　キャラクターソングを作中に入れたいといったのは神木プロデューサーでしたね。演出的には大変でした（笑）。

貝澤　単に曲を入れればいいわけではなく、曲を聴かせるためにセリフとかち合わないようにしなくてはいけないし、絵コンテの段階からしっかりと構成を決めなくてはならず、シナリオの時点からかなり綿密に打ち合わせをしました。

暮田　みんな曲調が違うので、それに合わせるのも大変だったんですよね。あきらに関してはイントロがやたらに長かったし（笑）。曲調によってはストーリーのテイストに合わないんじゃないかとい

う不安もありましたが、思っていたよりしっくりきました。

——変身シーンは『プリキュア』の魅力のひとつだと思いますが、今回の演出でのこだわりを教えてください。

暮田　「スイーツ」のプリキュアということなので、「スイーツの世界に入り込んで、スイーツになりきる」というコンセプトで、それぞれの変身バンクを作りました。「アニマル」がそれぞれの個性の表れでもあるので、要所要所にアニマルのポーズを入れて、それぞれの個性を際立たせました。玩具自体が、かき混ぜたりするギミックがあったので、変身バンクとそのあとのバトルシーンが組み合わさって、小さい子が〝ごっこ遊び〟をするときのなりきり要素として、うまくいったかなと思いました。

貝澤　「スイーツ」の特徴は動きに入れ込みにくいから、「アニマル」の動きをうまく取り入れましたよね。でも実際にオンエアされてみると、自分たちが喜ぶだろうと思っていたのとは違うところで子どもたちが喜ぶんですよ。子どもたちはカスタードが変身バンクの最後にくるっと回るところが面白かったらしく、そんな大人と子どもの感じ方の違いが興味深かったですね。

——あおいの変身バンクで靴下を片方上げるしぐさは、話題になっていましたね。

暮田　あのシーンのコンテは貝澤さんが切ったんですよ。もともとソックスが片方しか上がっていなかったので「上げなきゃ」みたいな感じでしたか?

貝澤　そうですね（笑）。村中さんが何かとあのしぐさを歌のステージでしてくれたのはうれしかったです。

——それぞれの決め技の名前やキャラクターの名前なども、毎年スタッフのみなさんで苦労して決められているようですね。本作ではいかがでしたか?

暮田　技名はみんなで頭を突き合わせて、「決まるまで帰れません」みたいな（笑）。

貝澤　みんなの意見がバラバラだから、なかなか決まらないんですよ。誰の発案かは曖昧で、とにかく決まるのに時間がかかった悪夢のほうが蘇ってきます（笑）。

暮田　キャラクターの変身前の名前は読みやすさ重視で全員ひらがなにしました。

貝澤　基本は会議でしたけど、主人公は暮田SDが「『いちか』はどうでしょう」って言って決まりました。

暮田　ショートケーキから「いちご」も考えたんですが、ほかの作品で使われていたので……。とにかく、ほかの作品や過去の『プリキュア』となるべくかぶらない名前を考えるのが大変でしたね。

——ちなみに、世界観設定で、黒電話やボンネットバスなど、なつかしいモチーフがありましたが、あれはどういった意図で作られたのでしょうか?

暮田　企画当初からインターネットやスマートフォンは出さないようにしようということにしたので、美術の方が「だったら黒電話を出してみよう、車もレトロなものにしよう」という感じで決まりました。あの世界観には、新しいものよりも、レトロなもののほうがしっくり合うんじゃないかなと思ったのもありますね。

貝澤　気持ちは直接伝えたほうが伝わりやすいかなということで、スマートフォンなどはやめたんですよね。大切な何かを伝えたいときに、一生懸命に走ってそこまで行かなきゃならないっていうアナログ的なところを、暮田SDが非常に大切にしてくれたので、美術の方もそこを読み取ってくれたのかもしれません。いちかの「想いの手渡し」で、温もりは表現できたんじゃないかなと思いますよ。

『プリアラ』を観て 〝大好き〟を思い出して

——各話のエピソードについては、本作ではかなり「お当番回」に対するこだわりがあったように感じました。

暮田　本来なら、ゲストが来て何かを作ってあげるというパターンを考えがちになりますが、シリーズ構成の田中さんの意向で、いちかたちの心の中の気づきに重きを置きました。

貝澤　田中さんは、キャラクターを掘り下げるのが大好きみたいですよね。僕たちも、女の子の素直な気持ちがドラマの中心になっていくほうが作りやすいかなと感じて、メインキャラクターの当番回が多めになった感じですね。

暮田　玩具会社さんから出す玩具が決まっているので、どのタイミングでこのスイーツを入れ込まなければいけないというのもあるんですが、それぞれのキャラクターの内面に大きく踏み込みつつスイーツもクリアするところが、田中さんのうまいところですね。

貝澤　もちろん最後はラスボスとの戦いになるんですが、その前にキャラクターの話にケリをつけたいというのは暮田SDの意向でしたよね。

暮田　あくまで女児向けなので、女の子たちがどうなるのかというのはていねいに描きたいと思ったんです。

——49話では、ラストバトルから数年後の姿が描かれていましたね。

暮田　これは最初から決まっていたわけではなく、最終話のシナリオの制作過程で決まりました。

——それぞれが成長していったなかで、ゆかりだけ何をしているのか、はっきりとわからなかったんですが……。

暮田　トキメキを探しているんでしょうね（笑）。彼女の心のおもむくままに、自分の心が動くところへ行っていたんだと思います。

貝澤　ゆかりは、いちかに惹かれた部分があって、そのいちかが求めるスイーツというものに、自分もトキメキを感じ、そして自分もその先に行ってみようかな、という形で留学を決めた部分があるんです。いちかによって作られた〝大好き〟で動き出したけれど、これからはちょっと離れたうえで自分なりの道を目指していけば、〝大好き〟を発見できるのかな、というところでしょうか。ただ、最終話で「こうなりました!」と描いてしまうのは、ゆかりらしくない気がしたんです。ですから、大人になったゆかりのシーンでは、自由気ままに海を見つめ、何かにトキメキを感じつつも、その何かを観ている人たちには明かさず、想像させるようなシーンにしました。

——49話では『HUGっと!プリキュア』のキャラクターも登場しましたね。

暮田　『魔法つかいプリキュア!』のラストにキュアホイップ（以下「ホイップ」）が出たのが好評だったみたいです。結果的に、『プリアラ』の1話の視聴率もよかったので、その流れを踏襲した部分はあります。当初は番外編的な作りでもいいのかなと思ったのですが、いちかの想い、いちかの行く末をていねいに描きたかったので、48話を受けての、いちかの進路の話にしました。結果、うまくハマったかなと思います。

貝澤　「プリキュア」の引き継ぎという意味で、「新しいプリキュアが、単に出ました」というのではなく、『プリキュア』の気持ちを引き継いでいく、受け継いでいくような登場にできればいいなと考えていました。いちかにとって、自分の〝大好き〟が原動力となって作り上げたスイーツを食べた人が笑顔になってくれるのって本当にうれしいことなんです。だから、その笑顔が彼女の力になっていることを野乃はなというキャラクターで描きたかった。また、ペコリンたちが一生懸命に頑張って「任せてよ」って言っているシーンも、キュアエールとして一緒に街を守ろうとしてくれるところも、いちかが「自分だけが街を守っているんじゃない、みんなで守っているんだ」と改めて感じることができたという、すごく大事なエピソードなんです。いちかが一歩階段を上がる大切な力になっているんです。もしかしたら、はなちゃんたちがいなかったら一歩を踏み出せなかったかもしれないぐらいに、いちかに影響を与える重要なキャラクターとして描くことで、次作も興味を持って観てくれるんじゃないかなと考えたわけです。単にゲストキャラクターではなく、話の根幹に関わるキャラクターとしての登場がうまくできたと思っています。

——49話に登場した男の子と女の子はノワールとルミエルの生まれ変わりということでいいんでしょうか?

暮田　そうです。46話で「ノワールも救ってみせます」ということをホイップが言っていたので、その約束は果たさないといけないと思いまして。

貝澤　最後のシーンは、僕が絵コンテをやろうかなと思っていたら、暮田SDのほうから「最後のシーンだけは俺にやらせろ」と取り上げられました（笑）。

——全49話を振り返っての感想は?

暮田　短いようで長かったような、あと10話か20話くらいあってもよかったような、そんな気持ちです。もう少し長かったら、あきらのとぼけた話数など、それぞれの何気ない持ち味も描けたんじゃないかなと。

貝澤　僕は全体の長さもですが、1話の長さがもっとほしかったなという感想です。それほど密度の濃い内容でした。できれば30分、40分あってもよかった。でも、変えられませんから、構成を一生懸命に考えて、子どもたちにできるだけ想いを伝えられるように頑張りました。

——では最後に、『プリアラ』を1年間応援してくれたファンに向けて、メッセージをお願いします。

暮田　『プリアラ』で自分のなかの〝大好き〟を作品のなかにつめ込むことができたかなと思います。ときどき、この作品を思い出してもらって、自分のなかの〝大好き〟を思い出し、考えるきっかけにしてくれたら、とてもうれしいです。

貝澤　『プリアラ』は、いちかたちが〝大好き〟という気持ちで、どんどん未来を切り開いていく話です。〝大好き〟を力にして一歩を踏み出すことで、どんどん先につながっていくんだよという、〝大好き〟の先にあるものを描いてきました。〝大好き〟の先には希望に満ちたキラキラした輝く夢があるということを、とくに49話に込めたつもりです。その想いをぜひ観て感じていただけたらと思います。

【シリーズ構成】

田中仁

Profile
【たなか・じん】脚本家。主なアニメの担当作品は『Go！プリンセスプリキュア』（シリーズ構成・脚本）、『ゆるキャン△』（シリーズ構成・脚本）など。

キャラクターも物語も挑戦をしたかった

「個性」のテーマを描くのに5人は最適だった

――田中さんは『Go！プリ』に続いての『プリキュア』のシリーズ構成になります。今回に関してはどういう経緯でお話があったのでしょうか？

『魔法つかいプリキュア！』の放送が始まったころに声をかけていただきました。その段階で、「スイーツ・アニマル」というモチーフ、最初に登場するプリキュアは5人だということ、それぞれの個性をテーマとして押し出したいということは決まっていましたね。

――今回、各話の脚本家の方には、どのように声をかけられましたか？

『Go！プリ』で一緒だった方々に加え、『プリキュア』の脚本を受け継げる新しい方を育てたい」という東映アニメーションの要望もあって、新しい方々にも入ってもらいました。

――プリキュアが5人からのスタートだと聞いたときはいかがでしたか？

追加プリキュアをたせば、6人以上になるので「多いな」とは思いました。でも、「個性」がテーマだと考えると、いろんなキャラクターがいたほうがいいので、それをプラスの方向に持っていけるのではないかとも考えました。

――最初に暮田公平SD、貝澤幸男SDからは、どのような話がありましたか？

視聴者が一般的に抱く「スイーツ」のイメージからかけ離れたものにはしたくないので、物語序盤から、戦わなければ世界が終わってしまうというほどに重い状況にはしたくないという要望がありました。敵の存在や目的も、主人公目線でだんだんと何かがわかっていく感じでいきたいと。また、作中の世界は妖精界と人間界というように分かれているのではなく、ひとつの街を舞台にしたいという方向性も伝えられました。

――たしかに『プリアラ』は、いちご坂という場所全体にスポットが当たっていた印象があります。

今回のプリキュアたちは、それぞれ家庭環境や生活エリアが違う子ばかりなのも、そういう目的からです。結果、学校では集まりづらくなったのもあり、テーマを考えても、スイーツを作る場所としてのお店にプリキュアが集まるのがいいという流れになりました。

これまでにない新しいプリキュア像

――田中さんご自身が本作においてこだわっていたポイントはなんですか？

今まで『プリキュア』シリーズでは出せなかったキャラクターを出すということです。SDのおふたりは最初から『プリアラ』で新しいチャレンジを提案していました。僕や神木優プロデューサーのように『プリキュア』にそこそこ長く関わっていると、どうしても『プリキュア』らしさを考えてしまうのですが、おふたりの想いに引っ張られる形で、僕も挑戦をしようと思いました。

――では、これまで『プリキュア』シリーズにいなかったキャラクターとして考えたのは誰でしょうか？

まず、あきらです。彼女はプリキュアが3人だったら絶対にはじかれていたキャラクターなんですよ。プリキュアが5人いて、それぞれの個性についても掘り下げていくからこそ出すことができたキャラクターでした。あきらは、これまでの『プリキュアらしさ』という物差しではなく、「自分らしさ」を貫いたキャラクターでしたが、自分が思っていた以上に子どもたちに人気が出てくれたのはうれしかったです。

――ゆかりは、あきらとはまた違った意味で『プリキュア』らしさから離れているところがありますよね。

そうですね。ゆかりも、かなり挑戦的なキャラクターです。「紫」という色や、お姉さんキャラクターというのは子どもたちにかなり人気の要素ではありますが、ゆかりは正義の味方としての王道からは外れた考え方や行動をします。これも3人だったらできなかったなと思いますね。

――ゆかりは、みんなで手を取り合って協力するということから一線を引いているけれども、それでいてみんなのことをちゃんと信頼しているというのが新しいなと感じました。

ゆかりは、周りの協力は仰がないけど、確実に影響は受けているキャラクターなんですよね。実際に手を貸さなくても通じ合える空気感が伝えられたらいいなと思っていました。ミステリアスなキャラクターになったのは、かっこよさを保つのにデレデレしすぎないほうがいいんだろうなと感じたというのもあります。

――中学生3人のほうでは何かチャレンジはされましたか？

いちかに関しては、お母さんが働いていて実質、父親が育てている家庭環境というのは、今まであまりなかったんじゃないかなと思います。数年前に提案しても通らなかったと思いますが、今はそういう家庭も現実にありますから、とくに反対はなかったですね。本作はさまざまな生活環境を描くということも考えていたので、いちかはお母さんと離れて暮らしているという形になりました。

――1話から、帰ってくるはずのいちかのお母さんが帰ってこないという展開になったのが衝撃的でした。

現実問題として考えると、お母さんが帰ってくるとか、娘のために仕事を辞めるとか、そんなに簡単にはいきませんよね。なので、あえてそこは誰かにとって都合がいい形にはしませんでした。42話でのあおいの人生の選択もそうですが、結局のところ選ぶ段階では、どれを選んでも正解なんです。ですから、無理に答えというものを描かず、相手を思いやる気持ちがあればいいということを描こうと考えていました。

――ひまりが人見知りを簡単に克服できないのも、リアルでしたね。

実際、ひまりは「自分が変わらなければいけない」とは考えていないんです。内にこもりがちだったのが、いちかと知り合って外に目が向くようにはなりましたが、成長していくなかで彼女が知ったのは、「大好きなスイーツと一緒に生きていく選択肢はいくらでもある」ということなんです。結果的にひまりは、得意なフィールドから無理に離れなくても輝くことができるんだということを体現したキャラクターになりました。

――あおいはロッカーでありながら、じつはお嬢さまだったというギャップが面白いキャラクターでした。

『プリアラ』では歌を多めに使いたいというプロデューサーからの提案があり、それであれば歌うキャラクターがいたほうがいいと思って考えたキャラクターです。ロックを目指す、ボーイッシュな子で……と考えていったのですが、もう少し魅力がほしくて、「裏お嬢さま」という設定を考えてギャップを狙いました。

――あおいといえば、42話で立神コンツェルンは執事の水嶌が継ぐ、みたいな雰囲気になっていましたね。

あの展開に対して「あおいが水嶌と結婚するの!?」という声もあったようですが、どうとらえるのかは人によると思います。水嶌は立神家の家族同然に育っている存在で、必ずしも跡継ぎは世襲である必要はないので、お父さんは「あおいだけが選択肢ではない」と伝えたかっただけかもしれません。その後、あおいたちがどうなったのかは、自由に想像していただければと思います。

――6人目のプリキュアであるシエルは、最初から出るという話でしたか？

そうですね。6人目を誰にするかという打ち合わせはありましたが、僕は最初の段階で妖精しかないと思っていました。同じ世界で暮らしているし、同じようにスイーツが好きなんだから、新しいプリキュアは人間より妖精のほうがふさわし

いだろうと考えました。

——妖精は、人間にならないとプリキュアにはなれないのでしょうか？

そういうわけではないです。優秀なパティシエが人間界にはたくさんいて、その人たちに教わるための手段として人間になりたいだけです。本作のプリキュアは伝説のパティシエですから、それを目標にしていたら、優秀なパティシエに習うのが近道ですからね。

——たしかにそうですね。伝説のパティシエといえば、シエルが初めてホイップに会ったときのリアクションが、ふだんの自信満々な態度とは違っていたのが、とてもかわいかったです。

シエルといちかの関係は見ていて楽しいですよね。19話で、いちかがシエルに「弟子入りしたい」とジャンピング土下座をするのを脚本の香村純子さんが書いてきたとき、のちに立場が逆転したときにシエル（キラリン）にもさせなきゃと思って、そうしました（笑）。

未来へ踏み出したキャラクターたち

——敵キャラクターに関しては、どのように出されていこうと思いましたか？

ジュリオは、暮田SDが『Go！プリ』の黒須くん（敵キャラクターのクローズが人間に変装して学校に忍び込んだ姿）を気に入ってくれて、「ああいうキャラクターを出したい」と言ってくれたことで生まれました。シエルと双子になったのは、双子でも同じことができるわけじゃない、という個性を描くためです。あとは、〝好き〟がテーマのひとつである以上、〝嫌い〟も描かなければいけないと思っていたので、そのためにも必要な存在でした。ジュリオって、じつはすごくエグいことをしているんですよ。相手の内情を利用して戦いをしようとするキャラクターだったので、のちのち「ごめんなさい」をしても視聴者の方たちから許してもらえるのかが心配でした。許してもらえたのは、視聴者の方に共感してもらえたのと、キャラクターデザインやお芝居のおかげだと思っています。

——ノワールが悪に染まったのは、ルミエルに振られてしまったから、ということでいいんでしょうか？

振られたというより……ノワールは自分という存在を拒絶されたと感じたんだと思います。映像以外のところで説明しすぎるのはよくないと思うのですが、あえてしますと……。ノワールは「100年前の戦場」で身も心も傷ついてしまい、まともな日常生活を送ることができなかったんです。そんな彼が経験したことのないやさしい気持ちに触れ、おいしいスイーツに出会った。でも彼は、ルミエルやスイーツからもらった温もりを求める気持ちをどう表現したり伝えたりしていいのかがわからない。だから「自分だけにスイーツを作れ」と言い出してしまった。その行動は稚拙でしたが、彼はほかに手段を知らなかったんです。ノワールが求めていたのは恋ではなく、おそらく愛。一方で、伝説のパティシエであったルミエルは、ほかの人に〝大好き〟をあげるのをやめて、ノワールだけに愛を注ぐこともできなかった。ここで、ふたりは決定的にすれ違ったわけですが、ノワールは戦場で数えきれない大きな「罪」を犯してきたこともあり、慈愛の人であるルミエルにも拒絶されたことで、誰も自分を救ってはくれないと衝撃を受けたのだと思います。

——そして、最終話（49話）で登場した子どもたちは、ノワールとルミエルの生まれ変わりなんですよね。

そうです。絶対に交わることができない状態で出会ってしまったふたりに、もう一度やり直す機会を与えたいと思い、あの子どもたちが生まれました。ルミエルもノワールに対して後悔はあったと思うんです。彼女は助けられるものなら全員助けたいと思う人ですから。その助けたいという想いを、伝説のパティシエの後継者として成長したいちかが解決するという流れにしました。

——最終話で数年後のいちかたちが登場したのは、ルミエルとノワールの想いの回収も兼ねていたのでしょうか？

それも、もちろんありました。あと、それぞれ違う道へ歩いていく姿を描いた以上、その先に生きている姿は見せなければいけないとも考えて、数年後の姿を登場させることにしました。

——ゆかりは何をしているのかとSNSなどでも話題になっていました。

おそらく、まだ旅の途中かと。好奇心のままにいろいろな世界を見て回っている感じだと思います。ゆかりは一見するとすごく大人ですが、目標や夢を見つけるのが最後でしたから、ゆっくり時間をかけていいと思います。

ペコリンは最初からプリキュアにしたかった

——今回、キャラクターのお当番回が個別にきちんと描かれていたのは、やはりそれぞれの個性を際立たせたいという想いがあったのでしょうか？

お店をやるので、やってきたお客さんに合わせて毎回スイーツを作るような構成も考えました。でも、そうするとゲストキャラクターにスポットが当たってしまって、プリキュアになった女の子たちを描く尺がなくなってしまうと思い、本作はパティシエとしての活動やスイーツ作りを経てどう成長するのかということで物語を作っていきました。

——そして今回、1作品のなかでは史上最多となる7人目のプリキュアとして、キュアペコリンが登場しました。

じつは僕は最初から、ペコリンはプリキュアにしたいと考えていました。先ほど、6人目のプリキュアが妖精というのは初めから考えていたと言いましたが、当初は1話からプリキュアたちと行動を共にしているペコリンが妥当だと思っていたんですね。いろいろ打ち合わせるうちにシエル／キラリン、ジュリオ／ピカリオというキャラクターができたので、シエルが先にプリキュアにはなりましたが、それでもペコリンがプリキュアにならないストーリーは僕のなかにはありませんでした。中盤でプリキュアになれないのであれば、終盤で。そして、プリキュアになった以上は、きちんとその後の話数でも登場させたいと思っていたんです。その想いをスタッフに伝えた結果、いちかが自分の夢を追うためにいちご坂を出ることになり、キラパティをどうするのかという話になったときに、プリキュアにもなれたペコリンたちが引き継ぐという流れにつながっていきました。

——最終話で『HUGっと！プリキュア』の野乃はな／キュアエールが登場したことに関してはいかがですか？

最後のほうの脚本は、ほぼ僕が担当したのですが、暮田SDから「最終話はただのバトンタッチ回にはしたくない」と言われました。ならば、最終話は完全に『プリアラ』のエピローグにして、かつ、脚本を担当された坪田文さん（本作の各話担当／『HUGっと！プリキュア』のシリーズ構成）や、引坂理絵さん（いちご山の妖精・ヤバパ／野乃はな役の声優）のためにも、はなもガッツリ話に入れ込むことにしました。

——全49話を振り返ってみて、印象深かった話数はありますか？

いちかのお母さんが帰ってくる31話ですね。この話は1話を書く前にすでに考えていたエピソードでもありました。自分では、それぞれのキャラクターにこめた「今の時代」のテイストの象徴的なものとしてとらえています。本作はキャラクターの設定でチャレンジが多かったので、物語展開でチャレンジをしたという意味でも、印象的なエピソードです。

——また、全49話のなかに、ひまりの家族が登場しなかったことが少し気になっているのですが……。

ちゃんと存在しています（笑）。36話の運動会の応援に来るシーンに入れたかったのですが、尺の都合でそこでも出すことができず……。あえて言いますと、ひまりとよく似た、とてもやさしいお父さんとお母さんです。普通の会社員の家庭で、それゆえにストーリーに絡みづらくなってしまいました。

——人数が多いと、変身バンクや名乗りのシーンを描いていくだけでも、かなり時間がかかりますよね。

じつは、人数を減らす案もなかったわけではないんです。でも、子どもたちがなりきりの〝ごっこ遊び〟をする際に、プリキュアの数が少ないとプリキュアをやれない子が出てきてしまうというのが、ずっと気になっていて。それもあって数を減らすことはしませんでした。さらに言えば「スイーツ」と「アニマル」というモチーフは、両方を活かして「アニマルスイーツ」としたほうが断然かわいいんです。大人がシンプルにかわいいと思うことは子どもたちにも響きます。ですから、魅力的な要素はなるべく減らさずに、スタッフみんなで頑張りました。

——それでは最後に、1年間『プリアラ』を応援してくれた人に向けてのメッセージをお願いできますか？

『プリアラ』は、暮田SD、貝澤SDをはじめ、スタッフがみんなでいろいろと新しいことに挑んだ作品でした。観てくださった方がキャラクターの魅力を感じていただけたようでよかったです。『プリアラ』を制作するにあたり、『プリキュア』シリーズが長く続くだけでなく、もっと広がっていかなくてはいけないという想いがありました。ですから、『プリアラ』から『プリキュア』シリーズを観るようになった方もたくさんいると知って、とてもうれしかったです。また、今まで『プリキュア』シリーズを応援してくださった方が、これからも応援していきたいと思えるような作品になっていたらと思います。応援していただき、ありがとうございました。

【キャラクターデザイン】

井野真理恵

変身前も変身後もそれぞれのキャラクター性を反映しました

Profile
【いの・まりえ】アニメーター、キャラクターデザイナー。主なアニメの担当作品は『サーバント×サービス』（総作画監督など）など。

実際のスイーツを見ながら考えた衣装

——「プリキュア」シリーズのキャラクターデザインは、例年オーディションで決まるとうかがっています。オーディションの段階では、どういったイラストを描かれたのでしょうか？

オーディション時に描いたのはホイップとキュアマカロン（以下「マカロン」）のふたりだけでした。中学生の子と、それより年上の子を描いてください、というオーダーでした。

——「プリアラ」のデザインは、どのように決められていったのでしょうか？

今回は最初から5人登場することもあって、まず線は減らそうと思いました。それから、小さいお子さんが見ても5人の見分けがすぐにつくように、シルエットもわかりやすい状態にできればいいなと思いながらデザインしていきました。

——ラフイラスト（左図）を見ると、ホイップに関しては完成したものとあまり変わっていませんね。

シルエットはほぼ同じですね。ただ、「プリキュア」は子どもたちが着る洋服が商品として発売されるということを聞いていたので、服としても着られることを意識しました。そして、スカートに「スイーツ」っぽさを入れています。

——キュアカスタード（以下「カスタード」）のプリンは元が台形ですから、スカートの形やシルエットをイメージしやすそうですが、ホイップのショートケーキは形が複雑で難しそうです。

その辺は、みなさんとすり合わせをしながら考えていきました。ショートケーキを1日中眺めていたこともありましたね。「スイーツ」に見えることと、おいしそうであることは、つねに意識しながらデザインしていました。

——一番デザインで大変だったのは、やはりスカートですか？

そうですね。スイーツをデザインに落とし込むというのはやったことがなかったので、どうしたらいいのか試行錯誤の連続でした。プリキュアはバトルシーンなどで動きも多いので、線は極力減らしたかったんです。でも、キュアジェラート（以下「ジェラート」）のスカートにマーブル模様を入れたら線が増えるけど、入れないとアイスっぽくないし……とか。あと、キュアショコラ（以下「ショコラ」）も、けっこう悩んだ記憶があります。

——チョコといえば「板チョコ」みたいなイメージがあります。

そうですよね。多くの人がチョコと言って想像するのは板チョコなんです。でも、四角形だと衣装に入れにくい。丸くするとただのボタンに見えてしまうんですよね。それから、ホワイトチョコもありますが、みんなはチョコといえば茶色を想像するというのも難しいポイントでした。プリキュアなのに茶色なのか……と。モチーフとしては、キュアパルフェ（以下「パルフェ」）のパフェと同じくらい、イメージするのが難しかったです。

——パフェはカラフルな印象があって、デザインしやすそうに見えますが、どういった点が難しかったのでしょうか？

パフェと言われてみなさんが思い描くのは、逆三角形の器だと思うんです。あれが普通のお皿だったら、パフェだとは思ってもらえない。でも、衣装にグラスが付くのってどうなんだろうと思って、ずーっとパフェを眺めながら、「パフェか……」と考え続けていました。結果的には、器をひっくり返してスカートに見せる感じになりました。パフェは、カラフルさもじつは大変だったんですよ。テーマカラーが7色は多いなと思って。線を増やさないようにしつつ、どうやっていくかはこちらも試行錯誤でした。

——本作は「アニマル」と「スイーツ」の両方がモチーフとしてありましたが、「アニマル」のモチーフを落とし込むのは難しかったですか？

アニマルのほうは、耳としっぽがついていればそれっぽく見えるので、スイーツほど苦労しませんでしたね。アニマル要素って、作中のキャラクターの性格とすごくリンクしていると思うんです。物語のなかでも、いちかが「あおいはライオンっぽく見えたから」ってライオンのスイーツを作っています。そういう意味では性格と紐付いていたので、デザインに関しての苦労はあまりありませんでした。

——ちなみに、ジェラートの靴下が片方下がっているデザインに関しても、やはりあおいのロックのイメージから考えられたのでしょうか？

そうですね。ファッションからもあおいの好きな雰囲気を感じられるように、あえて下げています。たとえば、いちかであれば両方上げているか、下げているかだろうし、ひまりだったらそもそもニーハイは履かないと思うし（笑）。そういう意味でも、プリキュアになったときの衣装にも性格はきちんと反映されていると思います。

変身前のデザインもキャラクターの性格に添って

——変身前のデザインに関しては、変身後が決まってからの作業ですか？

そうです。でも、変身後のデザインを反映することはあまり考えず、あくまでも「この子の性格なら、どんな服を着るかな」ということを考えていました。

——ひまりのスカート丈がいちかよりも長くなっているのは、ひまりが引っ込み思案な性格だからですか？

そうです。パッと見て、その子の性格がわかるのが重要だと思っていましたから。いちかのいちご柄の靴下にヘタが付いているデザインは、貝澤幸男SDから提案されました。あまり映らなかったのは、ちょっと残念ですね（笑）。

——ゆかりの水着は衝撃的でした。白は自信がないと着られない色だなと思って。

着られませんよね（笑）。ゆかりには、基本的に「普通の人は、これは着られないだろうな」という服を着せたんです。自信の表れでもあるのかな。

——ハリウッド女優を彷彿とさせる帽子&サングラススタイルも、普通の女子高校生はしないですよね。

あれはSDたちからの要望なんです。「ただ者じゃない雰囲気を出してほしい」

と言われて、あえてオーバーにしてみました。高校生らしさは、たしかにあまりないですが、ゆかりだったら着てもおかしくないだろうなと。

——それでは、キラパティの制服については、いかがですか？

キラパティの外観の玩具デザインはすでにあがっていたので、それに合うにはどんなデザインにすればいいのかなと考えながら作りました。

妖精や敵キャラクターもその性質がわかるように

——妖精についてはいかがですか？

「こういうものを作りたいんです」というテーマがあって「このポイントを押えてもらえれば、ほかは自由でいいです」という感じでした。ペコリンに関しては「耳が光るので、耳は絶対につけてください」と言われましたね。それから鼻と前掛けはつけてほしいとお願いがありました。あとぽっちゃりしたキャラクターにしてほしいという提案ももらいました。

——ペコリンはほかに人間の姿、プリキュアになった姿がありました。

プリキュア姿は「ドーナツをモチーフにしてほしい」と言われたくらいで、ほかには提案をされたことは、とくにありませんでした。プリキュアに変身する前に、人間の姿のペコリンを描いていたので、その子がプリキュアになったらどうなるかということだけ考えて描いた記憶があります。

——妖精といえば、キラリンとピカリオの目には星が入っていますね。

キラリンは6人目のプリキュアになるキャラクターで「頼れるヒーローみたいなノリがほしい」と言われていたんです。しかも妖精だし、普通の人とは違う何かを入れたいなと思って、名前もキラリンだし、星を入れるかとなりました（笑）。『魔法つかいプリキュア！』のモフルンの目にも星が入っていたので、それとは形が似ないようにしました。

——敵キャラクターに関してのデザインは、どこまで担当されましたか？

ガミーとブルブルは、私が担当しました。それから、ビブリーやエリシオなどの敵幹部とノワールもやりました。

プリキュアのラフイラスト

——敵キャラクターのデザインのポイントを教えてください。

悪い妖精に関しては、ペコリンたちと基本的には変わらず、ちょっと悪さをするということで、トゲトゲしたデザインになりました。

——敵キャラクターのなかでも、ジュリオ（黒樹リオ）はイケメン転校生としても話題になりましたよね。

彼はキラリンの弟なので、目のデザインは同じにして、双子ではあるけど性格の違いを表現できるように、対称となるようにしました。

——ちなみに、ジュリオをデザインされた段階で、彼が味方になるという話は決まっていたんでしょうか？

全然決まっていませんでした（笑）。味方になるかもしれないし、そうじゃないかもしれない、なんなら消滅するかもしれないくらいのふわっとした情報しかなかったんです。ですからリオ（味方になってからのジュリオ）はあとから「作ってください」と言われて、「出るんだな」と思ったくらいで（笑）。

——ほかのノワール陣営の敵に関しては、ベースが黒ですよね。

ノワールが「闇」なのと、プロデューサーから敵は黒っぽくしたいと言われたので、統一して黒の要素を入れました。プリキュアはオリジナル作品ですから、敵キャラクターに関しても人間性というか性格、性質がわかるようにと考えながらキャラクター表を作りましたね。

——1年間『プリキュア』というシリーズに携わってみて、キャラクターのデザインに、どんな面白さがありましたか？

私は『プリアラ』で初めてキャラクターデザインを担当したので、ほかの作品とは比べられませんが、子ども向けに徹底して「わかりやすさ」をテーマにしているんだなというのは感じました。それから、キャラクターは立体物になるんだということも考えながら作るというのは「なるほど」というポイントでした。敵に関しては自由にやらせていただけた印象なのですが、「ちょっとでも怖いと子どもは観なくなるんだ」とプロデューサーがおっしゃっていて、色使いなどに注意していたのも印象的でした。

——そう言われてみると、ジェラートのモチーフである「ライオン」は獰猛な部分もあるのに、印象としては〝ふわふわもこもこ〟した感じですね。

初期のころに描いたジェラートは、もっとギザギザしていたんです。でも、プロデューサーによるとツンツンしているのは子どもウケがあまりよくないということで、ちょっと丸みを持たせました。髪の毛が跳ねているのも人気が出にくいらしく、ちょっとウェーブをしているくらいという、その微妙な塩梅が興味深かったです。

——では最後に、『プリアラ』を1年間応援してくれたファンに向けて、メッセージをお願いします。

まずは1年間、観ていただいて、ありがとうございました。楽しんでいただけたのならば、よかったなと思っています。『プリアラ』のキャラクターたちは、まだまだ映画にも登場しますので、もし彼女たちがピンチになっていたら、ぜひ応援してあげてください。

【音楽】

林ゆうき

「怖くなりすぎないように」というオーダーが、とても印象的でした

Profile
【はやし・ゆうき】作曲家、編曲家。主なアニメの担当作品は『映画プリキュアドリームスターズ！』『ボールルームへようこそ』など。

音楽の作り方が独特だと感じた『プリアラ』

――林さんはこれまで実写ドラマや少年向けのアニメの音楽を多数手がけられています。『プリアラ』は女児向けとして制作されていますが、音楽に求められるものは、ほかの作品と違いましたか？

最初にスタッフの方と打ち合わせをしたときに、プロデューサーから「音楽が怖いと、観ている子が泣いてしまうので、怖くしすぎないようにしてほしい」とお願いされたことが印象に残っています。これまで僕が担当させていただいたドラマや少年向けのアニメですと「もっと怖くしてください」とか「バトルシーンでは強い感じにしてほしい」と言われることのほうが多かったんです。ですから、怖さを抑えて音楽を作るというところが、ほかの作品と一番違うところだなと感じました。とはいえ、いきなり怖くない音楽を作るというのも難しい部分がありますから、1回作ったものを聴いていただいて意見をもらってから、楽器をやわらかいものに差し替える作業をしました。

――「やわらかい楽器」というと、たとえばどんな楽器が挙げられますか？

木管楽器やマリンバですね。ストリングスでもスタッカートで刻むところをピチカートに変えたりして、やわらかさは表現できるんです。あとは楽器ならハープを多めに使いました。ハープはファンタジー感というか非日常感の強い音色を出すので、本作ではかなりの頻度で使っていたと思います。敵キャラクターが登場するシーンでは、ふだんだったら怖いままにしているんです。でも、本作ではやわらかく、きれいな音がする楽器を入れて調整しました。コード進行は、少年向けのアニメの悪役が登場するようなシーンとそれほど変わらないので、『プリアラ』では楽器の選定について、いろいろと試行錯誤しました。

――『プリアラ』では、どんな形で音楽のオーダーがありましたか？

オーダーのされ方は、ほかの作品とあまり変わりませんでした。コミカルな曲、日常の曲、ちょっとさびしい曲、みたいなオーダーでした。それ以外ですと「玩具用に先行で音楽を作ってください」と言われたのが、ほかの作品にはないオーダーでした。

――玩具用の収録は、キャストのみなさんもTVシリーズ本編が始まる前にされていましたが、音楽も本編の前に細かく作られていたのでしょうか？

そうです。全体のサントラを作る前に、「変身のイントロや変身のクライマックスの部分の音楽を作ってください」とオーダーがありました。普通は全体を作って、そこから目立つところを抜いて使うことが多いので、最初にイントロとクライマックスを作って、それに合わせてサントラを作るということに、最初は少し戸惑いもありました。

――その段階では物語やキャラクターの設定は、どの程度ご存知でしたか？

基本的な世界観やキャラクター設定などは、すでに資料をいただいていました。「スイーツ」と「アニマル」がテーマということも聞いていましたから、過去のシリーズを担当されていた先輩作家の方の音楽を参考に聴いて、自分なりのプランを立てていきました。

――「スイーツ」と「アニマル」がテーマだと聞いたときの感想は？

「アニマル」に関しては、きっとかわいい動物にするだろうなと思っていましたから、それほど驚きはなかったです。キャラクターの性格とアニマルが紐付いていたので、ひとりひとりのキャラクターを理解しつつ、なぜこのアニマルなのかを加味しながら音楽に反映させていきました。じつは「スイーツ」というテーマのほうが、音楽を考える際には難しかったんです。過去の作品では『プリンセス』や「魔法つかい」といった、モチーフから音楽をイメージしやすいテーマだったんですね。でも「スイーツ」の音楽ってどんなものだろうと考えると、なかなかピンとくるものがなくて。そこは試行錯誤をしながら考えていきました。

――日常のシーンについては、どのように制作されましたか？

実写ドラマでも出てくる音楽のテーマなので、作り方としてはベーシックに、いつもやっているとおりに取り組みました。ただ、ここでも使用する楽器を、ふだんだったらピアノのところをトイピアノにするなどして、子どもでも楽しんでもらえるような雰囲気は出るようにしました。泡立て器やお箸など、作品に紐付いたアイテムを使った音作りにもチャレンジしました。

――『プリアラ』の各キャラクターの音楽については、どのように作られていったのでしょうか？

6人のプリキュアを差別化するために、それぞれのキャラクターのモチーフとなる楽器を決めました。いちかはヴァイオリン、ロックをやっているあおいはギター、ひまりは木管を使ってコロコロとしたかわいい感じを出し、あきらはガットギターでかっこよく、ゆかりはサックスで妖艶な感じを出すようにしました。シエルはパリから来たということだったので、アコーディオンを使ってパリっぽいおしゃれさを出しました。それから、パルフェのモチーフがペガサスだったので、架空の動物特有のきらびやかさが出るように、ハープを用いました。

自分に求められた音楽をきちんと作れるように

――今回『プリアラ』の音楽作りで、とくに心がけたことはなんですか？

まず、なぜ僕が選ばれたのかということを考えました。僕が選ばれたからには、僕でないと作れない音楽を求められているとも思ったので、今までの『プリキュア』シリーズでの定番を拾いつつ、自分じゃないとできないようなアプローチをするようには心がけました。『プリキュ

ア」だから」とか「子ども向きだから」と考えるのではなく、どうやってとがったところを作れるかなということは意識しました。小さい子どもたちが観ていると言いつつも、大きいお友達もたくさんいると思うので、そういう方に聴いてもらって面白いと思ってもらえるような要素を入れていったつもりです。

──制作してみて、とくに印象に残っている曲を教えてください。

やはり、変身シーンです。49話放送されるなかで、これが流れない回は一度もないし、変身シーンでその年の『プリキュア』の印象が決まるといっていいくらい重要な曲だと思うので。

変身シーンの音楽はラフ絵に合わせて作ることができて、それはとても貴重な体験でした。通常のアニメやドラマでは、映像に合わせて音楽を作る「フィルムスコアリング」という方法をとることは、今の日本の現場ではまずないんです。あっても映画くらいで。ラフ絵とはいえ、TVシリーズでそれができるというのが『プリキュア』ならではだと感じました。

それからバトルシーンの音楽は作っていて楽しかったですね。あと『プリキュア』シリーズは年に2回、映画があるので、そこでもフィルムスコアリングができてうれしかったです。

──『プリアラ』にはいわゆる「メインテーマ」と呼ばれる曲もありましたよね。

正直なところ、最初はメインテーマって必要なのかなって思ったんですよ。『プリキュア』の肝になる音楽って、変身と技だと思っていましたし、それがあるんだからメインテーマはいらないだろうと。でも、実際にオンエアを観てみたら、物語を描くうえで大事な場面で使われていたので、「なるほど」と思いました。メインテーマといえば、打ち合わせのときにいただいたオーダーでは「スイーツのときめき」と書いてありましたね。

──その単語を頼りにして、音楽を作っていくんですよね。

基本的に打ち合わせのときにいただくオーダーは、漠然としたものが多いんです。それを受けてデモを作って、聴いてもらったあとでリアクションが出てくる。それを受けて、また僕が音楽を修正していくというのが一般的な作業なので、とくに困ったりはしませんでした。

──『映画キラキラ☆プリキュアアラモード パリッと！想い出のミルフィーユ！』の音楽についても教えてください。

パリが舞台ということで、アコーディオンを多めに使ったくらいで、ほかはTVシリーズと大きく制作が異なるということはありません。映画は子どもたちがライトを振るシーンがあるので、ミュージシャンの方たちに「子どもたちが、ここでライトを振ります」と説明したのは、ほかではなかったですね。実際に劇場にも足を運んでみたのですが、すごく不思議な光景だなと思いました。大人から見ると、ライトって振らなくても話は進むなって思っちゃうんですよ（笑）。でも、そこで一生懸命にライトを振る素直さこそが子どもらしさなんだなと改めて感じましたし、音楽を作るうえでも、とても参考になりました。

ミュージシャンとのキャッチボールも楽しかった

──1年にわたる長いシリーズということで、ほかの作品とは違った出来事などはありましたか？

これは朝ドラの音楽を作ったときもそうだったのですが、映画も含め100曲近い曲を作っていくと、似たようなものができてしまうことがあるんです。同じコード進行で同じテンポ感の曲ができたときは、片方で使用する楽器をギターからピアノに変えて差別化したりしました。

──『プリアラ』の音楽を1年間担当した感想を教えてください。

じつは、すでに『HUGっと！プリキュア』の作業を2017年末から進めているので、『プリアラ』に対して「やった、終わった」という感じはあまりないんです。ただ、ほかの作品のときよりも、周囲の人から感想をいただくことが多くて、やはり『プリキュア』はたくさんの方に観ていただけているシリーズなんだなと改めて感じました。

──改めて本作を振り返って、「これは『プリキュア』ならではだったな」と思ったことはありますか？

ミュージシャンに対して「怖い曲だけど、怖すぎると子どもが泣いちゃうらしいのでやわらかめにしてください」というニュアンスを伝えることが多かったです。これは、ほかの作品ではあまりなかったので、『プリキュア』ならではだったんだと思います。僕がニュアンスを伝えると、ミュージシャンのみなさんはスゴ腕の方ばかりなので「こうしたらどうかな」といろいろな新しい引き出しを見せてくださるんですね。そういったキャッチボールをしながら音楽を作り上げていったのが、とても思い出深いです。

──それでは最後に、1年間『プリアラ』を応援してくれたファンに向けて、メッセージをお願いします。

現在は『プリアラ』の次の『HUGっと！プリキュア』の音楽を担当しています。『プリアラ』で得たものを落とし込めたらと思っていますので、『プリアラ』も『HUGっと！プリキュア』も、どちらもよろしくお願いいたします。

CD情報

「映画プリキュアドリームスターズ！」
オリジナルサウンドトラック
2017年3月15日発売　マーベラス

「映画キラキラ☆プリキュアアラモード」
オリジナルサウンドトラック
2017年10月25日発売　マーベラス

キラキラ☆プリキュアアラモード
オリジナル・サウンドトラック1
プリキュア・サウンド・デコレーション!!
2017年5月31日発売　マーベラス

キラキラ☆プリキュアアラモード
オリジナル・サウンドトラック2
プリキュア・サウンド・ゴーランド!!
2017年11月29日発売　マーベラス

さまざまな要素を〝まぜまぜ〟した魅力が みなさんに伝わっていたらうれしいです

Profile
【かみのき・ゆう】アニメプロデューサー。東映アニメーション所属。主なアニメの担当作品は『Go！プリンセスプリキュア』『美少女戦士セーラームーンCrystal』など。

派手さがほしかった5人でのスタート

──「最初から5人のプリキュアでいこう」と提案されたのは、神木プロデューサーだったとうかがいました。

そうです。最初にドカンと派手に出したいという気持ちがあって、人数でそれを出したらわかりやすいんじゃないかなと思ったんです。前作『魔法つかいプリキュア！』の力を合わせて戦うバディ感が素敵だなと思ったので、こちらは力を合わせる〝チーム〟でいこうと考えました。

──6人目としてシエル、7人目としてペコリンがプリキュアになるのは、いつごろ決まったのでしょうか？

シエルは最初の段階で決まっていて、ペコリンが最終的に決まったのは、1クール（12話）が終わったくらいでしたね。パルフェは「すでに5人出ているから特別感を出したい」という考えのもとで生まれたキャラクターで、ペコリンは最後のサプライズみたいな感じになりましたね。じつは、最近のお子さまの傾向なのか、1年に何回もブームを作らないと、気持ちが離れていっちゃうんですね。なので、『プリキュア』でも年に3回くらいブームを作ろうと思って最初に出したのがシエルなんです。すでに登場していた5人のキャラクターが立っているから、全部乗せという意味を込めて、名前もデザインも色合いも決めていきました。

──妖精がプリキュアに……というパターンは過去のシリーズでもありましたが、あまり多くはありませんでしたよね。

6人目のプリキュアって、すでに好きなプリキュアがいるところに登場して、さらに好きになってもらわないといけないので、どうしたらいいのかは、みんなで考えたんです。しかも、お子さまの好みってみんな違うので、いろいろと検討した結果、妖精がプリキュアになるというのがお子さままでもわかりやすいし、特別感があっていいのではないかということになりました。シエルの人となりをもっと知ってほしいということもあり、2クール目はシエル／キラリンのエピソードを重視しました。

──プリキュアの色に関して、この色は必ず使うというルールはあるんですか？

お子さまが好きな色はデータとしてあります。でも、上位何個を絶対に使わなければいけないということはないです。ただ、緑のスイーツだったら抹茶くらいしかパッと思い浮かばなくて。抹茶はお子さまが得意じゃないこともあって、寒色系は青のほうがいいんじゃないかとか、紫は人気のカラーではあるけど紫色のスイーツってなんだとか、パズルのように決めていきました。それから、中学生組／高校生組で組むことがあると考えたときに、どちらにも寒色と暖色がいたほうがいいということになったりもしましたね。

──『プリキュア』シリーズは、玩具とのリンク感も重要だと思います。『プリアラ』に関しては、玩具会社からはどういった要望がありましたか？

玩具会社の方から、女の子たちがよくやる〝お店屋さんごっこ〟ができる玩具を出したいと提案がありました。私のほうでは、ちょうど「スイーツ」や「アニマル」をテーマにすることを考えていたので、なんのお店にするかという打ち合わせになったときにスイーツを提案したのを覚えています。とはいえ、スイーツっていろいろな種類がありますし、もっとオリジナリティーがあったほうがいいのではないかという話になり、プラスアルファとしてアニマルのモチーフも追加しましょうということになりました。『プリキュア』には戦う要素があるので、「スイーツとは、あまり相性がよくない」と言われていたんですけど、今回はアニマルという要素がそこをうまく補ってくれたなと思っています。アニマルスイーツひとつひとつのビジュアルにかわいさをギュッとつめることができたのも、結果的にはよかったですね。

──「スイーツ」と「アニマル」を作品に落とし込むのは大変ではなかったですか？

正直なところ、大変でした（笑）。デザインにしろ話作りにしろ、みなさんにすごく苦労をかけることになってしまいました。でも、苦心していただいたなかで生まれた内容が『プリアラ』をさらに魅力的に引き立ててくれたと感じています。

──とくに、どちらのほうが作品に落とし込むときに苦労しましたか？

「スイーツ」です。これは作品のテーマになった〝大好き〟をどう表現するかということにもつながるのですが、当初はスイーツを大切にするプリキュアに対してスイーツを奪う敵にしようかという話もあったんです。でも「奪われる前に分けてあげようよ」という話になって（笑）。かといって、日曜日の朝から敵キャラクターがスイーツを地面にグシャッと叩きつけるみたいなことをやっていいのかという問題もありました。闇のパティシエが「闇のスイーツ」を作るのはどうかという案も考えましたが、敵もスイーツへのリスペクトがあるので対立構造がわかりづらくなってしまう。そこで生まれたのがキラキラルなんです。

──キラキラルは〝大好き〟が形になったものととらえていいのでしょうか？

そのとおりです。〝大好き〟って抽象的でわかりにくいと思ったので、キラキラルという具体的なもので表しました。その結果、スイーツに宿るキラキラルを守ろうとするプリキュアと、奪おうとする敵という対立構造が理解しやすくなったと思います。子どもたちにも〝大好き〟がどういう感覚なのか、本作が何を大切にしようとしているのかが伝わればいいなと思って生まれたアイデアでした。

──敵キャラクターに関しては、どうやって作っていきましたか？

プリキュアが一番大切にしようとしているものに対立するのが敵キャラクターですから、本作の場合は「想い」や「個性」を無下にする存在です。エリシオに関しては、48話がわかりやすいかなと思いますが、個性のない世界を作る存在。個性を否定する存在ですね。ジュリオは〝大好き〟の反対である〝大嫌い〟を体現したキャラクターですし、いろいろな角度から〝大好き〟という気持ちのアンチテーゼについて考え、それを各々の幹部が表現していきました。

──そんな敵キャラクターも、最終的にはちゃんと救われましたね。

「スイーツ」をテーマにすると決めたときから、勧善懲悪ではなくて最後はスイーツを食べさせて救う結末になるのかなと感じていたんです。暮田公平SDと貝澤幸男SDの人柄なのか、作品作りの姿勢なのか、作品全体にすごくやさしい雰囲気があるんですよ。殺伐とした決着ではないだろうという雰囲気はありました。

──49話でノワールとルミエルが転生したのも、やさしさなのかなと感じました。

子どもたちって『プリキュア』のバトルシーンの爽快さやかっこよさは求めているけど、深刻さを求めているのかという議論があって。もちろん、熱を伝えるためにシリアスに振りきるのもありだし、そうしなければならないこともあるんですが、ほかに熱の伝え方があるんじゃないかと。それもあって、ふたりの転生が描かれたのかなと思います。

──「スイーツ」の扱い以外で、本作を作るうえでの難しさはありましたか？

シナリオ作りが難しかったですね。作中に登場する「うさぎショートケーキ」などのアニマルスイーツは、なぜ「うさぎ」で「ショートケーキ」なのかを考える必要があったんです。最初はなんとなくでもいいかなと思っていたんですが、みんなで打ち合わせをすると、どうしても気になるんです。ですから、理由付けはみんなで試行錯誤をしていました。37話では、パティシエとしてのステップアップもしているシエルの成長をスイーツでどうやって表現すればいいのか、スイ

ーツ監修の福田淳子先生にかなりアイデアをいただいたのを覚えています。

——各エピソードで、どのスイーツを出すかがすでに決まっていた状態でシナリオを制作されていたんですか？

そうですね。このクールにこのスイーツを出そうと決めていましたが、シナリオの作業に入ってみるとうまくいかないこともありました。一方で「この話数でできます」みたいなこともあって、本当にみなさんの協力があってできあがっていったなと思っています。

歌を聴くことで 表現できる〝大好き〟

——今回、本編中にキャラクターソングを入れるというのは神木プロデューサーからの提案なんですよね？

そうです。キャラクターを好きになったときに髪形をマネる子がいれば、変身アイテムを持ってプリキュアになりきる子もいますし、スイーツを作る子もいると思うんですね。そして、プリキュアを〝好き〟っていう気持ちで歌を聴く・歌うということもあると思っていたんです。私自身が子どものころに『美女と野獣』のベルに憧れていて、ベルの歌を歌いながら歩いていたりしましたから、そんな楽しみ方もあるだろうなと思って、今回は作中にキャラクターソングを入れてもらいました。それから、プリキュアたちの個性を表現する方法のひとつとして、この子だけの音、この子だけのものを色濃く出したいと思ったんです。劇中に音楽を流すというのは、シナリオの段階から考えていないといけなかったりしたので、それを先にクリアしていただけたのも、とてもありがたかったです。

——今回、キャラクターソングがシングルとして発売されましたよね。

1キャラクターにつきCD1枚というのは、本当に貴重でしたよね。

——これまでのシリーズは、なかなか作中でキャラクターソングが使われることがなかったので、新しさを感じました。

歌によって深くキャラクターを認知してもらえたのではないかなと思いました。個人的には、子どものいる親御さんに、「あの歌は、どこかに売っているんですか？」と聞いてもらえたことが、とてもうれしかったです。

——キャストがステージに立って、キャラクターソングを歌うのも初めてでした。

ステージに関しては、音楽チームのみなさんがいろいろと頑張って実現してくださいました。単独ライブなどを観て、「プリキュア」としてのいろいろな可能性を見たなという気持ちで、新鮮でビックリしたし、感動しました。正直なところ、リアルなステージ展開というのは「いつかやりたいね」くらいで、夢を語るレベルだったんです。「プリキュア」はショーというわかりやすい形もあるし、本当にプリキュアが実在すると思っている子もいるので、そことどう差別化するのかのハードルは高かったです。それが実現できたことは、やはり感慨深いです。

——キャストといえば、最初にキャストが発表されたときに、パティシエ服姿が披露されたのも印象に残っています。

キャストのオーディションは、いつもどおりキャラクターに合っているかどうかで選んだのですが、集まっていただいたあとに、1回みなさんを集めてのお披露目というのがあってもいいんじゃないかという話になりました。制服でパティシエ感も伝わったんじゃないかなと思いますし、「プリアラ」のイメージ作りはうまくできたかなと思います。

挑戦することに寛容な 『プリキュア』チーム

——バトルシーンが肉弾戦ではなくなったというのも、ひとつの挑戦でしたね。

私も「プリキュア」シリーズを担当するようになってから長くなってきたので、肉弾戦は当たり前だと思っていました。でも、SDのおふたりから、見せ場であるバトルシーンでこそ作品モチーフと向き合いたいという話があって、本作は肉弾戦ではなくなったんです。決め技のバンクもスイーツやアニマルから由来するものだったので、結果的には「プリアラ」らしくて素敵な仕上がりになりましたね。すごく作品としてまとまった流れになっていたと思っています。

——そのバトルシーンに関して、ほかのスタッフの方の反応はいかがでしたか？

周りのスタッフからは「いいんじゃないか」と言われました。「プリキュア」って長くシリーズが続いているから、「ここを守ろう」というポイントはもちろんあります。でも、挑戦することに対してすごく寛容なんです。その空気感を含めてチャレンジしてよかったなと思いますし、それをふまえて未来につながっていくのかなとも思いました。形式にこだわりすぎるのではなく「プリキュア」という作品が描きたい精神を引き継いでいけばいいんだろうなと、改めて感じることができました。お子さまは毎回「プリキュア」に出会い直しますから、違っているところも面白いなと思っていただけたらと思います。

——1年間プロデューサーとして携わっていて「これだけは絶対に描きたい」と思ったエピソードはありましたか？

ふたつあって、ひとつはいちかのお母さんが帰ってくる31話。ホイップは元気と笑顔のプリキュアなんですが、じつはお母さんがいないことはさびしいと思っていて、そのさびしさをスイーツや元気と笑顔で補完しているんです。そんな主人公の心中をいつ描くかという話は、つねに議題に上がっていました。当初、最終話にお母さんが帰ってくるという案もありましたが、早めにいちかの想いを知ってもらいたかったので、31話になりました。あとは、48話ですね。48話でプリキュアが言っていたワードは、自分でも印象深いです。「〝大好き〟はみんな違うから、〝大好き〟はいっぱいあるから、ひとつの〝大好き〟でぶつかっても別の〝大好き〟でつながることもできる」って、めちゃくちゃ難しいことを言っているんですよ。この人とは合わない、違うと思って諦めて縁を絶つっていうのは簡単なことだけど、私たちのプリキュアはそれを諦めようとしなかった。物理的に戦って強いプリキュアも爽快感があって、わかりやすさもありますが、そういうことを決断できて、理解しようとし続けられる人は強いなと感じました。

——壮大なことでも笑顔で語れるホイップは、本当に強い存在でしたね。

ホイップが変なところで笑顔になってしまうと「この子はなんなんだ」みたいになりますが（笑）、彼女はみんなの気持ちがわかったうえで絶妙なところで笑うんですよね。それって、じつはすごいことなんです。笑って「つながれる」と言いきるところまで描ききれましたから、とても大切にしたい話数です。

——いちかのすごさを感じたうえで物語を振り返ると、45話でゆかりがあきらにではなく、いちかにギュッとしてもらっていたのも印象的でしたね。

ゆかりが最初にトキメキを感じたのはいちかですからね（笑）。あきら＆ゆかりは苦手なことを補完し合う存在ですが、やっぱりその中心にはいちかがいるんですよね。私自身、いちかの存在から感じることはたくさんありました。印象的だったのは、22話で、叫ぶジュリオに語りかけるいちかの姿です。その存在感、たたずまいから、プリキュアの「ｃｕｒｅ＝癒す」とはどういうことか、映像を観て改めて実感しました。美山加恋さんや皆川純子さんの演技も素晴らしく、いいシーンでしたね。

——神木さんは以前、別のインタビューで「あきらはボーイッシュな子だというよりは、単に自分のしたい格好をしているだけなんだ」とおっしゃっていましたよね。いわゆる〝女の子らしさ〟を求めなくなっているという意味で、「プリアラ」からは現代社会の時流も感じました。

私たちとしては「こうしたら今風だよね」と考えながら作ってはいないんです。ですから、インタビューなどで聞かれて「そう見えるのか」と思うことも多いですね。あきらに関しては、あえて女の子らしくない子にしようと思っていたわけではなく、5人も女の子が集まっていれば、ショートカットであったり、ズボンの子がいたりするのは当然だという部分もあります。本編中ではかなりかっこいい感じに描かれていたあきらですが、49話では等身大で頑張っている未来のあきらの姿が描かれていて、これがSDのおふたりが思うあきららしさなんだろうなと感じました。あきらにとっては、いつも自然体なんだろうなと。

——かっこよさという意味では、あきらやあおいをイメージしますが、最後まで一本筋が通っているという意味で、ひまりもかっこいい子なんだなと感じました。

そうなんです。ひまりは、人見知りではありつつも、最初からずっとスイーツが好きというところはブレなかった。それは数年後の姿でも変わりなく、ずっと揺らがなかったという意味で、すごくかっこいい子なんです。それぞれのかっこよさが伝えられていたらと思います。

——では最後に、応援してくれたファンに向けて、メッセージをお願いします。

観てくださってありがとうございます。本作には「レッツ・ラ・まぜまぜ！」というセリフがありますが、「プリアラ」はまさにそのセリフどおりの作品になったなと感じました。新しいこと、今までやってこなかったことも取り入れて〝まぜまぜ〟してみるという作り方をして、キャラクターの個性も、スタッフやキャストのアイデアも〝まぜまぜ〟したことで、いろいろな挑戦ができた作品になりました。また、スイーツを食べることがあれば、ご自身の「キラキラル」や〝大好き〟だと想う気持ちを思い出していただけたら本当にうれしいです。

Gakken Mook

オフィシャルコンプリートブック

パッケージ情報

vol.2まで発売中
vol.3は2018年3月21日発売
vol.4は2018年5月16日発売

●各12話収録
(vol.4は13話収録)　●発売元：マーベラス

vol.10まで発売中
vol.11、12は2018年3月21日発売
vol.13、14は2018年4月18日発売
vol.15、16は2018年5月16日発売

●各3話収録
(vol.16は4話収録)　●発売元：マーベラス

2018年3月24日　第1刷発行

発行人　廣瀬有二
編集人　谷川浩保
企画編集　馬渕悠
発行所　株式会社 学研プラス
〒141-8415　東京都品川区西五反田2-11-8
印刷所　凸版印刷株式会社

編　集　後藤悠里奈

編集・執筆　野下奈生(アイプランニング)
宮村妙子(アイプランニング)
草刈勲

デザイン　坂井容美(CUiR WORKS)
小西美穂(CUiR WORKS)

カバー＆表紙イラスト
原画／井野真理恵

製作協力　東映アニメーション株式会社
東映株式会社

学研の書籍・雑誌についての新刊情報・詳細情報は、下記をご覧ください。
学研出版サイト　http://hon.gakken.jp/

■**MAIN STAFF**
プロデューサー／田中昂(ABCアニメーション)、矢崎史(ADK)、神木優
シリーズディレクター／暮田公平、貝澤幸男　シリーズ構成／田中仁　音楽／林ゆうき
製作担当／太田有紀　美術監督／飯野敏典　色彩設計／佐久間ヨシ子
キャラクターデザイナー／井野真理恵　スイーツ監修／福田淳子

■**CAST**
キュアホイップ・宇佐美いちか／美山加恋　キュアカスタード・有栖川ひまり／福原遥
キュアジェラート・立神あおい／村中知　キュアマカロン・琴爪ゆかり／藤田咲
キュアショコラ・剣城あきら／森なな子　キュアパルフェ・キラ星シエル／水瀬いのり
ペコリン／かないみか　ほか

ありがとう